1998年度

外国語学部共通科目シラバス
教養課程シラバス
外国語学部共通自由科目シラバス

獨協大学

利用上の注意

① この冊子では、目次が1994年度以降入学者用と、1993年度以前入学者用とに分かれています。

② 目次では、部門ごとに科目名、指導教員名、掲載ページが記載されています。

③ 科目名の表記について

入学年度によって、科目名の異なる科目があります。該当する入学年度は、科目名末尾のカッコ内に表示されています。表示がない場合は、入学年度による科目名の区別はありません。正しい科目名で履修するよう、注意してください。自分の入学年度を対象としていない科目名での履修登録はできません。

④ 「文化人類学」は1994年度以降・1993年度以前、どちらの入学者にも開設していますが、それぞれ下記の表のように合併しており、異なる科目です。履修登録や、試験の際には十分に気をつけてください。

	1994年度以降入学者	1993年度以前入学者
科目名	文化人類学	人類学
	社会科学特殊講義A （文化人類学特殊講義）	文化人類学

目　　次

1994年度以降入学者対象

「保健体育」部門

保健体育講義　2 ----------（半期完結）青　柳　多恵子 -------- 1
〃　　2 ----------（半期完結）梶　野　克　之 -------- 3

「人文科学」部門

哲学 ---------- 高　尾　由　子 -------- 5
〃 ---------- 松　丸　壽　雄 -------- 6
心理学 ---------- 杉　山　憲　司 -------- 8
〃 ---------- 三　本　　茂 -------- 10
倫理学 ---------- 市　川　達　人 -------- 12
国語学 ---------- 桂　　千佳子 -------- 14
〃 ---------- 小　島　幸　枝 -------- 16
国語表現 ---------- 飯　島　一　彦 -------- 18
〃 ---------- 小　島　幸　枝 -------- 20
〃 ---------- 中　村　　文 -------- 22
〃 ---------- 肥田野　昌　之 -------- 24
日本文学 ---------- 飯　島　一　彦 -------- 26
〃 ---------- 北　村　　進 -------- 28
〃 ---------- 肥田野　昌　之 -------- 30
外国文学 ---------- 北　澤　滋　久 -------- 32
〃 ---------- 松　山　恒　見 -------- 34
〃 ---------- 山　路　朝　彦 -------- 36
歴史学（日本史） ---------- 新　井　孝　重 -------- 37
〃　（日本史） ---------- 齊　藤　　博 -------- 39
〃　（東洋史） ---------- 熊　谷　哲　也 -------- 41
〃　（西洋史） ---------- 井　村　行　子 -------- 43
〃　（西洋史） ---------- 小　林　登志子 -------- 45
〃　（西洋史） ---------- 古　川　堅　治 -------- 47
人文科学特殊講義Ａ（現代社会と学問）　1 ------ 川　村　　肇 -------- 49
〃　（西洋哲学史）　2 ------ 谷　口　郁　夫 -------- 50
〃　（哲学思想史）　3 ------ 谷　口　郁　夫 -------- 52
〃　（キリスト教史Ⅱ）　4 ------ 中　島　文　夫 -------- 54
〃　（日本近代史）　5 ------ 中　村　　粲 -------- 56
〃　（古典古代の遺産）　6 ------ 古　川　堅　治 -------- 58

「社会科学」部門

政治学 ---------- 志摩園子 -------- 60
経済学 ---------- 岡田　博 -------- 62
日本国憲法 ---------- 元山　健 -------- 63
社会学 ---------- 有吉広介 -------- 65
国際関係論 ---------- 阿部純一 -------- 67
文化人類学 ---------- 井上兼行 -------- 69
社会科学特殊講義A（教育法） 1 ------ 市川須美子 -------- 71
〃 （近代市民社会像の形成と批判） 2 ------ 市川達人 -------- 73
〃 （文化人類学特殊講義） 3 ------ 井上兼行 -------- 75
〃 （広告論） 4 ------ 梶山　皓 -------- 76
〃 （マスコミュニケーション論） 5 ------ 佐々木輝美 -------- 78
〃 （日本経済論） 6 ------ 波形昭一 -------- 80
〃 （経済理論の基礎
ーマクロ理論を中心として） 7 ------ 西村允克 -------- 82
〃 （国際貿易と国際収支調整） 8 ------ 益山光央 -------- 84
〃 （民法概論） 9 ------ 松嶋由紀子 -------- 86
〃 （社会思想史） 10 ------ 松丸壽雄 -------- 87
〃 （集団と文化の社会心理学） 11 ------ 三本　茂 -------- 89
〃 （ジャーナリズム） 12 ------ 森永京一 -------- 91
〃 （世論調査） 13 ------ 森永京一 -------- 92
〃 （貿易実務） 14 ------ 山崎静光 -------- 93
〃 （現代国際社会の統合と分裂） 15 ------ 若林　広 -------- 95
〃 （中東政治） 16 ------ 水口　章 （最初の授業で説明）

「自然科学」部門

数　学 ---------- 福井尚生 -------- 97
物理学 ---------- 東　孝博 -------- 98
地　学 ---------- 福井尚生 -------- 99
生物学　A ---------- 加藤僖重 -------- 100
〃　B ---------- 加藤僖重 -------- 102
自然科学概論 ---------- 福井尚生 -------- 103
自然科学特殊講義A（東洋の健康論） 1 ---------- 青柳多恵子 -------- 104
〃 （植物と人間） 2 ---------- 加藤僖重 -------- 106
〃 （化学） 3 ---------- 和田浩志 -------- 107
〃 （宇宙論） 4 ---------- 福井尚生 -------- 109
〃 （体力トレーニング論） 5 ---------- 松原　裕 -------- 110

「情報科学」部門

コンピュータ概論（97年度以前入学者のみ） -------- 各担当教員 -------- 112
コンピュータ入門（98年度入学者のみ）-----（半期完結） 各担当教員 -------- 114
情報論 ---------- 前田功雄 -------- 116

言語学 ---------- 新里博樹 --------118
〃 ---------- 城田 俊 --------120
情報科学特殊講義A(コンピュータ・プログラミング論) 1 - 高柳敏子 --------122
〃 (コンピュータ・プログラミング論) 1 - 立田ルミ --------124
〃 (コンピュータサイエンスと自然言語処理) 2 - 工藤育男 --------126
〃 (情報処理) 3 - 東 孝博 --------127
言語学特殊講義A (音の構造) ---------- 伊豆山敦子 --------128

「比較文化」部門

地域文化研究 (現代英米社会研究) 1 ------- 有吉広介 --------130
〃 (日本の民俗藝能) 2 ------- 飯島一彦 --------132
〃 (ラテンアメリカ) 3 ------- 佐藤勘治 --------134
〃 (スペイン:歴史と文化) 4 ------- 野々山ミチコ --------136
〃 (イスラム(原理)主義過激思想) 5 ------- 藤原和彦 --------138
〃 (エピソードから考える韓国の歴史) 6 ------- 朴 聖雨 --------140
〃 (西洋美術史) 7 ------- 前川久美子 --------142
〃 (中洋-ネパール・インド・チベット-の社会と文化) 8 ------- 三本 茂 --------143
比較文化論特殊講義A (カリブ海域の民族と文化) 1 -- 井上兼行 --------145
〃 (東西文化比較) 2 ---- 近衛秀健 --------147
〃 (能楽における中世武士の諸像) 3 ---- 瀬尾菊次 --------149
〃 (神話・説話の世界) 4 ---- 肥田野昌之 --------151
〃 (古代ギリシャ社会における日常生活) 5 ---- 古川堅治 --------153
〃 (日韓文化事例の比較) 6 ---- 朴 聖雨 --------155
〃 (アラブ文化・芸術) 7 ---- 本田孝一 --------157
〃 (比較思想) 8 ---- 松丸壽雄 --------159

「日本語教育」部門

日本語学概論 ---------- 金田一秀穂 --------161
日本語教育概論 ---------- (前期完結) 井口厚夫 --------163
日本語教授法Ⅰ ---------- 中西家栄子 --------164
日本語教授法Ⅱ ---------- (前期および集中授業) 井口厚夫 --------166
日本語文法論 ---------- 城田 俊 --------167
日本語音声学 ---------- 城田 俊 --------169
対照言語学 ---------- 中西家栄子 --------171
日本語史 ---------- 小島幸枝 --------173

「第三外国語」部門

ドイツ語Ⅰ ---------- 大串紀代子 --------175
ドイツ語Ⅱ ---------- 山中康子 --------177
フランス語Ⅰ ---------- 松橋麻利 --------179
フランス語Ⅱ ---------- 柴田芳幸 --------180
スペイン語Ⅰ（総） ---------- 北岸団 --------182
〃 （〃） ---------- J. L. Velasco --------182
〃 （L） ---------- 高松朋子 --------183
スペイン語Ⅱ（総） ---------- 佐藤勘治 --------184
〃 （L） ---------- 霞洋子 --------185
〃 （読） ---------- 北岸団 --------186
スペイン語Ⅲ（総） ---------- 佐藤勘治 --------187
〃 （L） ---------- 佐藤勘治 --------188
〃 （読） ---------- 野々山ミチコ --------189
ロシア語Ⅰ ---------- 井上幸義 --------191
ロシア語Ⅱ ---------- 井上幸義 --------192
中国語Ⅰ ---------- 張継滨 --------193
〃 ---------- 陳跡 --------194
中国語Ⅱ ---------- 秦敏 --------195
朝鮮語Ⅰ ---------- 朴勇俊 --------196
朝鮮語Ⅱ ---------- 朴勇俊 --------198
アラビア語Ⅰ ---------- 本田孝一 --------200
アラビア語Ⅱ ---------- 本田孝一 --------202
古典ギリシア語 ---------- 古川堅治 --------203
ラテン語 ---------- 松田治 --------205

「総合」部門

総合講座A ---------- 青柳多恵子 --------207

「共通演習」部門

共通演習 ---------- 青柳多恵子 --------209
〃 ---------- 有吉広介 --------210
〃 ---------- 飯島一彦 --------212
〃 ---------- 城田俊 --------214
〃 ---------- 瀧本孝雄 --------216
〃 ---------- 中西家栄子 --------218
〃 ---------- 古川堅治 --------220
〃 ---------- 松原裕 --------222
〃 ---------- 松丸壽雄 --------224
〃 ---------- 三本茂 --------226

目　次

1993年度以前入学者対象

一般教育科目

「人文科学」系列

哲　学 …… 高尾由子 …… 5
〃 …… 松丸壽雄 …… 6
倫理学 …… 市川達人 …… 12
日本語学 …… 桂　千佳子 …… 14
〃 …… 小島幸枝 …… 16
国　語 …… 飯島一彦 …… 18
〃 …… 小島幸枝 …… 20
〃 …… 中村　文 …… 22
〃 …… 肥田野昌之 …… 24
日本文学 …… 飯島一彦 …… 26
〃 …… 北村　進 …… 28
〃 …… 肥田野昌之 …… 30
外国文学 …… 北澤滋久 …… 32
〃 …… 松山恒見 …… 34
〃 …… 山路朝彦 …… 36
日本史 …… 新井孝重 …… 37
〃 …… 齊藤　博 …… 39
東洋史 …… 熊谷哲也 …… 41
西洋史 …… 井村行子 …… 43
〃 …… 小林登志子 …… 45
〃 …… 古川堅治 …… 47
一般言語学 …… 新里博樹 …… 118
〃 …… 城田　俊 …… 120
一般音声学 …… 伊豆山　敦子 …… 128

「社会科学」系列

経済学　（外国語・法学部生対象） …… 岡田　博 …… 62
〃　（経済学部生対象） …… 米山昌幸 （経済学部シラバス「経済学」を参照）
政治学 …… 志摩園子 …… 60
法　学（「日本国憲法」2単位を含む）（外国語・経済学部生対象）… 元山　健 …… 63
〃　（法学部生対象）…… 明田川昌幸 （法学部シラバス「政治学入門」を参照）
〃　（法学部生対象）…… 鈴木淳一 （　〃　）
社会学 …… 有吉広介 …… 65
社会思想史 …… 市川達人 …… 73
〃 …… 松丸壽雄 …… 87

「自然科学」系列

心理学 …… 杉山憲司 …… 8
〃 …… 三本茂 …… 10
数学Ⅰ　（経済学部生対象） …… 遠藤信 （経済学部シラバス「数学」を参照）
数学Ⅱ …… 遠藤信 （経済学部シラバス「数学」を参照）
数学概論　（外国語・法学部生対象） …… 福井尚生 …… 97
物理学 …… 東孝博 …… 98
化学 …… 和田浩志 …… 107
地学 …… 福井尚生 …… 99
生物学A …… 加藤僖重 …… 100
〃 B …… 加藤僖重 …… 102
人類学 …… 井上兼行 …… 69
自然科学概論 …… 福井尚生 …… 103
コンピュータ概論 …… 各担当教員 …… 112

保健体育科目

「保健体育」部門

保健体育講義2 …… （半期完結）青柳多恵子 …… 1
〃 2 …… （半期完結）梶野克之 …… 3

共通自由科目

「文化・思想」部門

西洋哲学史 …… 谷口郁夫 …… 50
西洋倫理思想史 …… 中島文夫 …… 54
西洋美術史 …… 前川久美子 …… 142
マスコミュニケーション論 …… 佐々木輝美 …… 78
〃 …… 森永京一 …… 91
社会心理学 …… 三本茂 …… 89
文化人類学 …… 井上兼行 …… 75
情報論 …… 前田功雄 …… 116
コンピュータ・プログラミング論 …… 高柳敏子 …… 122
〃 …… 立田ルミ …… 124
西洋文化特殊講義A …… 近衛秀健 …… 147
〃 …… 古川堅治 …… 153
〃 …… 古川堅治 …… 58
日本文化特殊講義A …… 飯島一彦 …… 132
〃 …… 瀬尾菊次 …… 149
〃 …… 中村粲 …… 56
〃 …… 肥田野昌之 …… 151

「社会・国際関係」部門

比較文化論特殊講義A …… 藤原和彦 …… 138
情報論特殊講義A …… 工藤育男 …… 126
マスコミュニケーション論特殊講義A …… 梶山皓 …… 76
時事問題研究 …… 阿部純一 …… 67
世論調査 …… 森永京一 …… 92
経済原論 …… 西村允克 …… 82
日本経済論 …… 波形昭一 …… 80
貿易実務 …… 山崎静光 …… 93
民法概論 …… 松嶋由紀子 …… 86
教育法 …… 市川須美子 …… 71
国際関係論 …… (前期) 有賀貞
(後期) 竹田いさみ
〃 …… (前期) 竹田いさみ
(後期) 有賀貞
(英語学科シラバス93年度カリキュラム「国際政治論」参照)
国際経済論 …… 益山光央 …… 84
時事問題研究特殊講義A …… 水口章 (最初の授業で説明)
国際関係論特殊講義A …… 若林広 …… 95

「言語」部門

日本語教授法 …… 中西家栄子 …… 164
日本語学概論 …… 金田一秀穂 …… 161
日本語文法論 …… 城田俊 …… 167
日本語音声学 …… 城田俊 …… 169
日本語教育概論 …… (前期完結) 井口厚夫 …… 163
日本語史 …… 小島幸枝 …… 173
対照言語学 …… 中西家栄子 …… 171
日本語学特殊講義A …… (前期および集中授業) 井口厚夫 …… 166
古典ギリシア語 …… 古川堅治 …… 203
ラテン語 …… 松田治 …… 205
ドイツ語Ⅰ …… 大串紀代子 …… 175
ドイツ語Ⅱ …… 山中康子 …… 177
フランス語Ⅰ …… 松橋麻利 …… 179
フランス語Ⅱ …… 柴田芳幸 …… 180
スペイン語Ⅰ (総) …… 北岸団 …… 182
〃 〃 …… J. L. Velasco …… 182
〃 (L) …… 高松朋子 …… 183
スペイン語Ⅱ (総) …… 佐藤勘治 …… 184
〃 (L) …… 霞洋子 …… 185
〃 (読) …… 北岸団 …… 186
スペイン語Ⅲ (総) …… 佐藤勘治 …… 187
〃 (L) …… 佐藤勘治 …… 188
〃 (読) …… 野々山ミチコ …… 189
ロシア語Ⅰ …… 井上幸義 …… 191

ロシア語Ⅱ …… 井上幸義 …… 192
中国語Ⅰ …… 張継滨 …… 193
〃 …… 陳跡 …… 194
中国語Ⅱ …… 秦敏 …… 195
朝鮮語Ⅰ …… 朴勇俊 …… 196
朝鮮語Ⅱ …… 朴勇俊 …… 198
アラビア語Ⅰ …… 本田孝一 …… 200
アラビア語Ⅱ …… 本田孝一 …… 202

総合講座A …… 青柳多恵子 …… 207

科　目　名	保健体育講義２	担当者名	青　柳　多恵子

（半期完結）

講義の目標	近代文明のめまぐるしい発展と、すさまじい勢いの人口の高齢化や地球環境の変化が急速に進むなかで、豊かで健康な人生を生き生きと送ることは、昔よりも難しくなりつつある。真の健康とは、ともあれ自然に順応した生活の追求と言えます。日本人の食生活は美食・飽食の時代になって早くも30年余であります。夜型生活の浸透と食生活の欧米化に加えて核家族化という中で、健康は自分のライフスタイルの確立に大きく左右されると思われます。我々を取り巻く諸問題を正確に受け止め、自己の将来設計に健康で豊かな生活を送るための真の健康とは何かを考えることを目的とします。	
講義概要	文明の発達がもたらした便利で過ごし易い生活が、健康にとって如何なる問題をもたらしたか。また文明の発達が環境にとって何を残したのか。急速に変化が生じてきた。高齢化を迎えるためのライフスタイルを自立した生き生きした健康なものとするには、環境、食生活、心の在りよう、疾病、人間の身体、特に本講座では、東洋医学の用いている人間の本来保持している自然治癒力の考え方を理解することによって、真の健康を考える。	
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	・加藤　橘夫著「体力科学からみた健康問題」 ・村木　弘昌著「丹田呼吸健康法」 ・NHK 「日本人の健康観」 ・内山　興正著「生死を活きる」 ・ネット・ローレンス著「健康・体力づくり」 ・湯浅　泰雄著「気とは何か」 ・立川　昭二著「病気の社会史」 ・岩槻　邦男著「植物からの警告」
評価方法	出席状況とテストによる。	
受講者に対する要望など	東洋医学的健康方法に興味のある学生。単位取得だけの目的の学生は遠慮してほしい。	

年間授業計画	1. 東洋（中国）の身体の捉え方。西洋の疾病の考え方。 東洋的心身観について・「気」について。 2. 健康の捉え方。 人体の見方と自然観（見える身体と見えない身体） 3. 病気について 身体の三つの回路について。「経路」のシステム。 4. 食生活と自然治癒力 現代の食生活の実態の捉え方と未来 5. 健康を意識する事とは。 運動と成人病の関連について。 6. 心（精神）の健康の維持と育成。 東洋的修養法とは…ヨーガや気功について 7. 西洋のエアロビクス理論について。 運動器官・身体訓練と気功との違いについて。 8. トータルフィットネスの意味と必要性 息・食・動・想について。 9. 生活・仕事・家庭・趣味について。 パラダイムの大転換を解析する。 10. 社会生活と健康管理 20-40-20の考え方と家庭について。 11. 健康教育の必要性 東洋的人間性と健康観 12. まとめ

科　目　名	保健体育講義２	担当者名	梶　野　克　之

（半期完結）

講義の目標		生涯を通じての健康のためには、年齢・体力に応じた身体活動の実践が重要である。人間の社会生活にとって不可欠の文化活動として存在するスポーツ・身体活動の実践により健康の増進と体力の維持向上をはかることが重要になる。これらの課題を解決するために、体育・スポーツに関する情報を理解したうえで、実践に結びつけることが大切である。体育学に関する知識をいろいろな角度から探究し、社会生活にとって重要な基礎的理論を身につけることにより、現在から将来にわたって健康で有意義な社会生活が送れることを目的としたい。
講義概要		体育学に関する知識についていろいろな角度から解説する。 現代社会の特質とスポーツについて、その現状と問題点についての理解を深める。つづいて体育をめぐる心理学的な側面について、個人・集団にわたって解説する。 体育・スポーツの実践にかかわる身体運動について、生理学的な側面から解説し理解を深める。現代社会をめぐる体力についてその現状を理解するとともに、体力を向上させるトレーニングについて考える。
使用教材	テキスト	必要に応じてプリントを配布する。
	参考文献	・粂野豊編『現代社会とスポーツ』不味堂出版 ・大学保健体育研究会編『大学生の体育と保健』道和書院
評価方法		評価は授業への参加態度、出席回数、定期試験の成績を加味して決定する。
受講者に対する要望など		後期を選択する場合も第１回目の授業に出席して下さい。

年間授業計画	1. 講義概要の全般的な説明と、現代社会とスポーツについて考える。現代社会の特質と問題点をさぐり、社会の変化とスポーツについて解説する。 2. 現代人の健康・体力問題とスポーツについて考える。積極的な身体運動の必要性やよりよいスポーツ生活をめぐっての理解を深める 3. 現代人にとってスポーツとは何かについて考える。スポーツの意味とそのとらえ方や、生きがいとスポーツについて理解する。 4. 体育の心理学的側面について、発育・発達の意義や発達段階について考え、さらに身体的機能や運動能力の発達などの理解を深める。 5. 体育における運動学習について考える。学習の意義を考えるとともに、運動技能の能率化について理解する。 6. 体育における集団の心理について考える。集団として実施される体育活動について、その集団の形成や集団の構造について考える。 7. 身体活動の生理学的側面について、運動と呼吸から理解する。呼吸数や喚気量を理解したうえでエネルギー代謝などを考える。 8. 運動と筋力について考える。筋収縮のメカニズムについて考え、収縮のエネルギー源について理解する。 9. 前回に引き続き、運動と筋力について考える。運動を制御する神経系についての理解を深め、疲労についても考える。 10. 体力とトレーニングについて考える。体力の概念について理解するとともに、体力の要素と関係要因について理解する。 11. 体力づくりとトレーニングについて、その意義について理解を深める。さらにトレーニングの一般的な原則について考える。 12. 体力づくりの具体的な方法について考える。筋力にかかれる、ウェイト・トレーニングやサーキット・トレーニングについての理解を深める。 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24.

科目名	哲　　学	担当者名	高尾由子

講義の目標		さまざまな情報が氾濫する現代、「確実な知」はいかにして得られるのか。そもそも知とは何なのか。主に西洋哲学の基本的な概念を学びながら、「自分自身の知」の形成を中心課題として、「自分で、哲学的に、考える」ことをめざす。
講義概要		西洋哲学史上、主要な思想家の著作を読みながら、何が問題となっているのか、その問題がどのように考えられているのか、を検討する。
使用教材	テキスト	プラトン『ソークラテースの弁明』、新潮文庫、デカルト『方法序説』、岩波文庫、カント『純粋理性批判』上巻、岩波文庫
	参考文献	田中美知太郎『ソクラテス』、岩波新書、野田又夫『デカルト』、岩波新書、石川文康『カント入門』、ちくま新書、その他、授業で指示する。
評価方法		前後期末各１回のレポートによる。テーマその他は授業で指示する。
受講者に対する要望など		テキストを読んでくること。

年間授業計画

1. １年間の予定と授業の進め方の説明。哲学という学問について。
2〜8. プラトンの『ソクラテスの弁明』を読みながら、「知を求めること」と「われわれの魂を気づかうこと」の結びつきについて考える。
9〜11. 近世哲学の出発点となるデカルトの『方法序説』の第１部〜第３部を読み、哲学の「方法」について考える。
12. 前期のまとめと課題について。
13・14. 『方法序説』の第４部〜第６部を読み、「確実な知」について考える。
15・16. 大陸合理論とイギリス経験論の比較を通じて、「経験」と「知」について考える。
17〜23. カントの『純粋理性批判』第２版序文を読みながら、理性自身が理性を吟味することによって変革される知と世界のあり方について考える。
24. １年間のまとめと課題について

科目名	哲　　学	担当者名	松　丸　壽　雄

講義の目標		人間は存在する限り、様々な問題と遭遇し、それと対決せざるを得ない。その場合に、どのような立場から、どのように問題に対処するかを、様々な角度から考えることができるように目指す。
講義概要		人の生涯は、生まれ、世界の中に生き、死にゆく。それぞれの人の生涯の内で様々な局面において何時かは考えなければならないのは、生、愛、世界、死をめぐる問題であろう。これらの問題を、どう対処するかを、何人化の思想家の考えたところから知ることにする。続いて、これらの問題を自分の問題として捉えたらどうなるか、をディスカッションを通じて検討して行く。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	講義中に指示
評価方法		最低二回のレポートとディスカッションの積極的参加度により評価
受講者に対する要望など		自分で考えようと努力し、ディスカッションに積極的に参加する用意のある人たち。

年間授業計画	1. 講義の概要説明 2. ディスカッションのグループ分け 3. 愛についての考察 4. 同 上 5. 同 上 6. 愛をめぐる諸問題 7. ディスカッション 8. 同 上 9. 「生とは何か」についての考察 10. 同 上 11. ディスカッション 12. 同 上 13. 世界についての考察 14. 生きる「場所」について 15. 同 上 16. 同 上 17. ディスカッション 18. 同 上 19. 生に対する死の問題についての考察 20. 同 上 21. 安楽死、脳死について 22. ディスカッション 23. 同 上 24. 全体をふりかえってのディスカッション

科目名	心理学	担当者名	杉山憲司

講義の目標		この授業では、性格、発達、動機づけ、社会などの心理学の諸領域からなるべく広範囲なテーマを選び、心理学の問題の捉え方、研究方法を紹介しながら、心理学のキー概念や諸理論を学ぶ。そして、現代の様々な日常的諸問題に諸概念や諸理論を適用し、諸課題を捉える心理学の視点や問題への対処法について講義する予定である。 心理学から見た科学的な人間の理解が講義の最終的な目標である。しかしその人間観は単一ではなく、複数の多様な人間観とその背景をなす研究成果とを学ぶことになろう。
講義概要		心理学の研究内容は日常的で身近な現象が多い。従って、学生は、既に、一定の意見を持っていることが多い。例えば、良心や道徳性の問題、知的理解と行動の関係、社会現象や自分の行動の因果帰属、人の性格の形成と変容過程などであるが、案外、解っていないことも多く科学的研究の成果を講議する。また、心理学は自分自身を研究対象にすることも多く、心理学は自分自身が研究者でありながら同時に研究対象という特徴があり、自己意識についても講義する。 心理学の領域を大きく分けると、①性格や知性などの様に、一人一人の個性・個人差の領域と、②人間に共通する学習・知覚・動機づけなどの一般的な共通特性とに分けられるが、これらと日常生活との関わりについて講述する予定である。
使用教材	テキスト	青柳肇・瀧本孝雄・杉山憲司・矢澤圭介（編著）「こころのサイエンス」「トピックスこころのサイエンス」福村出版（各￥1,900）
	参考文献	教科書の各章末に参考文献が示されている。その他は授業中に随時指示する。
評価方法		前後期２回の試験で評価する（追試は教務課を通すこと）。 リーディングレポートの実施については授業の始めに相談する。
受講者に対する要望など		この授業を自分自身を知り、見つめ直すチャンスとして利用すること。 授業を聞く際、自分の専攻や、将来の職業、現代社会の諸問題との関連を考えながら聴講するよう希望する。

年間授業計画	1．心理学への導入：心理学の全体的体系について。心理学の研究対象と研究方法。他の学問との比較。人間に共通な一般法則を学習する意味。一人一人の個性や個人差について。 2．前期目標：人間の個性理解　Ⅰ．パーソナリティ（性格）（1章）：1）気質類型論とクレペリン検査、DSM-Ⅳと精神障害 3．2）パーソナリティの特性論　質問紙性格検査、因子分析と根源特性　標準心理検査 4．3）パーソナリティの力動論　フロイトの精神分析、無意識、幼児期の重視、心的外傷　4）人間性心理学説のパーソナリティ論 5．パーソナリティの形成・発達と病理　1）初期経験の重要性、相互作用説、遺伝プログラムと状況規定性　2）パーソナリティの病理と対処法、クライエント中心療法 6．Ⅱ．知能と創造性（2章）：1）知能研究の源、知能観と知能検査、2）新しい知能観、偏差値の功罪、能力か動機づけか 7．創造性と創造性の開発：知能検査で測られていないもう一つの能力　1）拡散的思考と集中的思考　2）創造性の育成と活性化 8．Ⅲ．生涯発達（3章）：1）研究の源と発達観の変遷、生涯発達の視点　2）研究法：縦断的研究、親や教師の発達観とピグマリオン効果 9．初期発達　1）乳児の気質の型、アタッチメント　2）コンピテンスと自己原因性の獲得 10．社会性の発達　1）道徳性と向社会性の発達段階　2）仲間関係のルールとスキル 11．青年期と自己意識　1）公的自己・私的自己、自我同一性の獲得　2）自己主張、対人不安 12．生涯発達と生き甲斐　1）仕事と生き甲斐、キャリアーとしての職業　2）老人の喪失感、統制感の喪失 13．後期目標：人間理解のために、Ⅳ．行動の視点からの人間研究（4章）　1）行動の種類と発達・進化　2）学習の基本型、しつけ、情緒の統制など、他律から自律へ 14．行動の視点から人間研究（その2）　1）模倣の理論、役割、影響力のあるモデルの特性など、観察学習の影響　2）行動の自己制御（良心の仕組みと機能） 15．重要な学習・行動の種類と内容　1）スポーツと健康の自己管理、2）技能学習の特徴、自動車運転の要因と交通安全 16．重要な学習・行動の種類と内容（その2社会的行動）：1）リーダーシップ　2）同調と服従、実験室のアイヒマン 17．社会的行動（その2）：3）攻撃行動、愛他行動　4）課題達成と愛他行動のバランスと育成 18．Ⅴ．感覚受容器、知覚や認知の視点から（5章）　1）感覚（受容器の特徴や種差など、対人感受性も人毎に違う　2）知覚（恒常性や錯視などの特徴、人毎にものの見方は違う 19．3）認知のプロセス　4）人間の情報処理モデル、日常的判断との異同　2）社会的認知、事象の原因帰属 20．記憶の構造や特徴　1）短期記憶・長期記憶、意味記憶・エピソード記憶など　2）記憶の情報処理モデル 21．Ⅵ．動機づけと情緒の視点から（6章）：　1）生理的動機、ホメオステーシス　2）情緒、快不快が行動に及ぼす効果 22．内発的動機　1）知的好奇心、自己原因性、有能感、動機の自発性と活性化の条件　2）内発的動機づけの活性化、最適不適合とズレ理論 23．対人社会動機　1）愛着、共感性と愛他動機　2）動機の矛盾、コンフリクト、フラストレーション、ストレス 24．最終のまとめ　1）心理学からみた人間、2）現代の問題にどれだけ答えられたか、3）自己について何を学び得たか等と、残された諸課題について。

科目名	心理学	担当者名	三本　茂

講義の目標		一人間行動を理解するために一心理学は、人間の行動における法則性を明らかにしようとする科学である。今回の講義は、行動を個人的要因と社会的要因の二つの面に関係付けて考察する。
講義概要		行動の個人的要因として、パーソナリティ（性格、知能、集団的パーソナリティ）や適応のメカニズムなどを取り上げる。 社会的要因については、集団の特性と機能、コミュニケーション、リーダーシップ、社会的態度、文化と社会現象等を扱う。
使用教材	テキスト	・なし
	参考文献	講義の際に適時指示する。
評価方法		前期に提出するレポートと年度末の筆記試験による。この他に、随時レポート等の提出を求めることがある。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1.性格とパーソナリティ 2. 性格の理論(2) 3. 性格の理論(1) 4. パーソナリティの形成 5. 集団的パーソナリティ 6. パーソナリティの診断(1) 7. パーソナリティの診断(2) 8. 適応のメカニズム 9. 知能の構造論 10. 知能検査 11. 知能の分布とその特性 12. 人間の集団の特性 13. 集団の機能(1) 14. 集団の機能(2) 15. リーダーシップ 16. 集団のコミュニケーション 17. 社会的態度（形成と変容） 18. 社会と文化(1) 19. 社会と文化(2) 20. 社会現象（マス・コミュミケーション、流行） 21. 社会現象（流言、パニック） 22. 23. 24.

科目名	倫理学	担当者名	市川達人

講義の目標		前半は倫理に関する理論的な理解を目的として、倫理学上の基礎概念について解説する。後半は今日の実践倫理の主要な関心となっている環境倫理について考える。時代をみすえる方法を倫理的視点から確立することが目標である。
講義概要		倫理とは善き生を目指しての共同の努力である。善き生とは何かを扱うのが価値の問題である。共同の努力を導くのが規範の存在である。講義の前半は、価値と規範を軸として倫理に関する原理的な理解をめざす。私たちが倫理的な判断を下すとき、そこにいかなる思考のメカニズム、あるいは論理が働いているかを考えるということである。後半では、「環境倫理」を取り上げ、人間・自然関係の組み直しを課題とする倫理的議論を紹介し、地球環境の時代に倫理学がなにをすべきかを考えてみたい。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	尾関周二編『環境哲学の探究』大月書店
評価方法		後期のテストにて評価。 前期末にレポートの提出を要求する。これの評価も加味する。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 一年間の予定。倫理学の対象と課題 2. 倫理の概念 3. 規範としての倫理(1)　動機―行為―結果の連関と倫理的判断 4. 規範としての倫理(2)　法の問題 5. 規範としての倫理(3)　習俗の問題 6. 価値としての倫理(1)　価値と欲求構造 7. 価値としての倫理(2)　価値と真実 8. 価値としての倫理(3)　人格と人間性の価値 9. 倫理的問題状況と倫理学の歴史(1) 10. 倫理的問題状況と倫理学の歴史(2) 11. 功利主義と自由主義(1) 12. 功利主義と自由主義(2) 13. 環境をめぐる問題状況 14. 環境と自然の概念(1) 15. 環境と自然の概念(2) 16. 人間中心主義とエコ中心主義(1) 17. 人間中心主義とエコ中心主義(2) 18. 共生とは？ 19. 人間存在の特異性と自然との関係 20. 社会的公正と環境倫理 21. フェミニズムと環境倫理 22. マルサス主義と環境倫理 23. 風土の理論と環境倫理 24. まとめ

科目名	国語学（94年度以降） 日本語学（93年度以前）	担当者名	桂　千佳子

講義の目標		じっくりと自分の中を探るという機会の少ない現代の生活の中で、加速度的にコトバは不確かなものとなり、コミュニケーションの危機が叫ばれている。 “日本語について学ぶ”“日本語について考える”“日本語で表現する”と、様々な形をとりながら、一年間、コトバと真剣に向き合ってもらう。それは、自分の存在について問い直し、より深く自分を知っていくことにつながる。コトバを通じて、全ての基盤となっていく自分をしっかりと掴んでほしい。
講義概要		前期は、コトバに関する本質的な問題について学んでいく。その中でコトバについてより自分の心の深いところで考えていくようにする。特に作文は、添削、返却によってレベルの高いものを目指していく。 後期は、主に文の構造、文末の構造を中心に、日本語についての知識を深めていく。
使用教材	テキスト	・テーマごとに配布するプリント
	参考文献	・金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』大修館書店 ・テーマごとに参考文献を指示
評価方法		前期のレポート（作文）と後期のテストの総合評価とする。
受講者に対する要望など		自分の中にあるコトバへの想いや、素朴な疑問を大切にし、かつそれを積極的に表現することを望む。

年間授業計画	1. 講義の概要及び方針について 「国語」と「日本語」 2. コトバへの想い・「言霊」の伝統 3. 自分のコトバを見つめる―「母語」と「母国語」 4. コトバが話せるのは本能か 5. コトバはなぜ通じるのかⅠ―現象と認知と言語表現 6. コトバはなぜ通じるのかⅡ―ソシュールの言語理論① 7. コトバはなぜ通じるのかⅢ―ソシュールの言語理論② 8. コトバはなぜ通じるのかⅣ―表現するということ 9. コトバと取り組むⅠ―実作（作文を書いて提出する） 10. コトバと取り組むⅡ―作文返却と講評 11. 日本人の世界観とコトバ 12. 討論が苦手な日本人―以心伝心の文化 13. 頭の中の文法―外国人学習者の誤用例をめぐって 14. コトとムードⅠ―寺村秀夫のコトの分類 15. コトとムードⅡ―文末表現について 16. コトバの構造と文法観 17. 三上章「主語廃止論」の意義 18. 日本語の文の階層構造Ⅰ―南不二夫による4つの分類 19. 日本語の文の階層構造Ⅱ―文の構造のまとめ 20. 日本語の「時」の表現Ⅰ―テンス①絶対テンス 21. 日本語の「時」の表現Ⅱ―テンス②相対テンス 22. 日本語の「時」の表現Ⅲ―アスペクト①静態と動態 23. 日本語の「時」の表現Ⅳ―アスペクト②動詞分類とアスペクト 24. まとめと質疑応答

科目名	国語学（94年度以降） 日本語学（93年度以前）	担当者名	小島幸枝

講義の目標		世界の言語を使用人口の割からみると、ドイツ語に並んで第6位に位置づけられる日本語を、日本人自身は、学校教育を通しても体系的には学んでいないのではないだろうか。国際社会にあって日本人の海外進出が日常的になっている現今、単に日本で生れ成長して日本語で用が足せる程度では日本語を修得しているとはいえまい。 本講では日本民族の地理的環境をふまえた重層文化に根ざす日本語の、基本知識の修得を目標とする。
講義概要		国語学とはどのような内容をもつ学問なのか、国語学の分野を、音声音韻・文字・文法・語彙・文体の領域に分けて講義する。
使用教材	テキスト	福島邦道著　国語学要論（笠間書院）
	参考文献	・岩波講座日本語（岩波書店） ・講座日本語学（明治書院） ・橋本進吉：国語学概論（岩波書店） ・金田一春彦：日本語（岩波新書） ・築島裕：国語学（東大出版会） ・国語学会編：国語学大辞典（東京堂） ・佐藤喜代治編：国語学研究事典（明治書院）　他
評価方法		原則として前期はテスト、後期はレポートとする。
受講者に対する要望など		日本語教師を目ざす学生は受講することが望ましい。

年間授業計画	1. 日本語の特徴（日本語系統論のきめて） 2. 日本語の音韻（音声学と音韻論、音節文字） 3. 五十音図といろは歌、天地詞 4. 漢字音 5. 音韻の変遷（万葉仮名と上代特殊仮名遣の意味するもの） 6. アクセント 7. 仮名——片仮名、反切 8. 文字（漢字、国字） 9. 平仮名——書写の試み、定家写本について 10. かなづかい1——定家仮名遣 11. かなづかい2——契沖仮名遣、歴史的仮名遣 12. ローマ字（単音文字）ポルトガル式ローマ字、ヘボン式ローマ字、日本式ローマ字 13. 文法概説1 14. 文法概説2 15. 文法概説3 16. 文法概説4 17. 日本語の語彙1——語彙史への試み 18. 日本語の語彙2——語彙史への試み 19. 日本語の語彙3——語彙史への試み 20. 国語辞書論その1——大槻文彦の業績 21. 国語辞書論その2——大槻文彦の業績 22. 国語辞書論その3——大槻文彦の業績 23. 日本語系統論への布石——大野普のタミル語論 24. 国語問題について——21世紀の日本語への展望

科目名	国語表現（94年度以降） 国語（93年度以前）	担当者名	飯島一彦

講義の目標		言語の表現手段には、「読む」「書く」「話す」「聞く」「考える」などの分野があるが、その中でも、現在の日本の教育課程ではほとんど省みられることのない、日本語を「話す」「聞く」ことを中心に、「考える」にまで至る、表現の基礎的なトレーニングを行なう。表現手段を獲得できなければ、充分な表現をなしえることはできず、従って他者とのコミュニケーションを完成させることも期待できない。この授業は、日本語によるコミュニケーションを、口頭表現を中心に、より完全に近づけることが目標となる。
講義概要		基礎的な概念は講義するが、それをもとにした実践、つまり学生諸君の毎時間の表現の、実際のトレーニングが主体となる。毎週出される課題に一週間とりくんで、次の週の授業時にその結果をもとに実践する、といった形式が多くなる。従って、トレーニングは課題を前提になされるから、課題にとりくまなかったものは受講しても無意味である。
使用教材	テキスト	特になし
	参考文献	特になし
評価方法		毎回のトレーニングに対するとりくみの深さ、その成果、夏期・冬期休業中に課するレポート他の課題の提出、後期最後に行なわれる発表の成果、等々平常点の成績が中心となる。
受講者に対する要望など		膨大な課題が出されるので、覚悟して受講すること。欠席すると表現の訓練の連続性が損なわれるので、欠席しないこと。

年間授業計画	1.　授業ガイダンス。 2.　講義：国語とは、表現とは、コミュニケーションのサイクル。 3. 4. 5. 6. 7.　諸君の進度に応じた、各種トレーニング・プログラム。 8. 9. 10. 11. 12.　夏休み課題ガイダンス。 13.　夏休み課題提出。後期ガイダンス。 14. 15. 16. 17. 18.　諸君の進度に応じた、各種トレーニング・プログラム。 19. 20. 21. 22. 23. 24.　冬休み課題提出。年間のまとめ。

科目名	国語表現（94年度以降） 国語（93年度以前）	担当者名	小島幸枝

講義の目標		過去の人間の考え方に共鳴したり、未来の人間に語りかけられるのはことばの力である。しかしことばは、ただ通じればよいというものでもない。人の心をうつ美しいことば、的確な表現、それは確かに才能にもよるがたゆまぬ努力と訓練によってある程度習熟できるものである。本講は、社会人予備軍としての大学生の日本語力を培うために、社会の変化に関心をもち情報の吸収および判断力を養うこと、実用文を短時間で書きあげる練習、敬語の使い方の習得、手紙の書き方など、国語の運用面について講述する。
講義概要		前期は音声言語表現を中心とし、一分間スピーチの演習、朗読、敬語の使い方など、後期は文字言語表現を中心とし、実用文の実作、相互の添削、手紙文のかき方などを学ぶ。評価は平常点をもってする。すなわち課題として社説の要約、800字の作文、読書報告文を提出する。
使用教材	テキスト	松村明編『国語表現法』おうふう
	参考文献	・都度、紹介する。
評価方法		提出物による平常点、および出席点。
受講者に対する要望など		授業中に作業することがありますので、無断で２週連続して欠席した場合は受講資格がなくなると思って下さい。

年間授業計画	1. 表現者（送り手）と理解者（受け手）のことばにおけるメカニズムを概説 2. 音声言語について。文字言語との差異および特徴の認識 3. 音声言語の種々相 4. 日本語の基礎知識――日本語の音韻、アクセントの特徴 5. 美しいことばの条件。正確さと品格をどのように獲得するか 6. スピーチ（演習）　互いのスピーチをきいて評価、および自己評価をする 7. 反省とまとめ（次週ディベートの予告） 8. ディベート（ビデオ鑑賞） 9. 反省とまとめ 10. 敬語について。日本の敬語の歴史と特徴（上代～中世） 11. 同上（中世末～現代） 12. 漢字テスト 13. 文字言語――文章を書く手順、材料の収集法 14. 文章を書く――自由文又は意見文 15. 交換、添削しあう 16. 手紙を書く――型のある文章、敬語 17. 材料の収集と選択、配列――説明文、報告文を書く 18. 文献、資料を用いて文章を補強する 19. 漢字テスト 20. アウトラインの作り方――効率よく文章を書くために 21. 評論を書く 22. 段落とトピックセンテンスのきめ方――書評を書く 23. 交換、批評しあう 24. 推敲のポイントを学ぶ。まとめ 備考　前期は、読解と実作を習慣づけるために宿題形式で①社説要約（週１作）②読書報告（月１本）③作文（週１作）を課すが後期は短時間で実作する習慣をつけるために作文は授業中に完成する。従って③の課題はない。

科目名	国語表現（94年度以降） 国語（93年度以前）	担当者名	中村　文

講義の目標		同じ教室で学ぶ誰かと、何か一つの問題について話したことがあるだろうか。或いは、自分一人で何事かを突き詰めて考えたことがあるだろうか。現代は解決するのが困難な問題に覆われていて、この世界に向かい合おうとするとき、私たちは深い無力感にとらわれる。だが、その答えを「識者」や「権威」に任せきりにして、挨拶と相づちだけで通じ合う仲間と楽しく過ごしているだけでは、私たちは決してこの世界の姿を見ることができないし、世界と切り結ぶための「言葉」も獲得できない。無気力に陥ることなく、状況に向かい合い渡り合うには、言葉をどういう形で用いたらよいのか、自分のアタマで考え判断するための、「自分自身の言葉」を探していきたい。
講義概要		基本的には、作文を書いてもらうことと、これを添削及び批評することを繰り返す。誤字の訂正、段落の付け方、文章の構成など初歩的な指摘から始めるが、何よりも学んでもらいたいのは、言葉によって対象や問題を理解・認識する方法、自分の考えを言葉で表現して他者に伝えるやり方である。自分が普段、どのように言葉を用いているかを自覚することから始めよう。言葉の使い方一つで、自分の意志とは異なる方向の結論が導き出されることだって、往々にしてある。この世界や自分自身を掘り起こし、粘り強くわかっていくための小さなシャベル＝ことばを手に入れよう。 前期は主としてテーマに沿った作文、後期は現代的なテーマを扱った文章を読んで作文を書いてもらう予定である。他の学生の作文に対する批評文や感想なども提出を求めることがある。
使用教材	テキスト	使用しない。
	参考文献	適宜、プリントを配布する。
評価方法		提出された作文によって評価し、試験・レポートは課さない。評価の基準は作文の上手下手や、内容が高邁であるかどうかという点によるのではなく、対象を言葉によって捉えようとする姿勢の度合いや、言葉を用いてどれほど考えを掘り下げようとしているかといった観点による。
受講者に対する要望など		400字詰めの原稿用紙を用意すること。作文の上手な書き方を教えてもらうという気持は捨て、自分の言葉はあくまでも自分で探し出すしかないのだという考えで授業に臨んでもらいたい。

年間授業計画	1. ガイダンス。授業の進め方と受講の注意点。 2. 自己紹介をかねた作文を書く。テーマ「今、怒りを感じること」 3. 前回の作文の批評。 4. 折句を作ってみる。〈自分の言葉の掘り起こし〉 5. 他の学生の折句を読んで批評・評価する。(プリントを配布) 6. テーマに沿って作文を書く。テーマ例「ニュースは信じうるか」(第2講で書いてもらう作文を基に、テーマを変更することがある。第8講も同じ) 7. 前回の作文の批評。 8. テーマに沿って作文を書く。テーマ例「大学とはどういう場所か」 9. 前回の作文の批評。 10. 新聞記事を批評してみよう。〈硬直した言語のつまらなさ〉 11. 前回の作文の批評。 12. マークス寿子『ひ弱な男とフワフワした女の国日本』を読んで、作文を書く。〈概念的な大人の言説に反論してみる〉 13. 前回の作文の批評。 14. 大平博『拒食の喜び、媚態の憂うつ』を読んで、作文を書く。〈自分の心に降り立ってみる〉 15. 前回の作文の批評。 16. 鷲田清一『ちぐはぐな身体』を読んで、作文を書く。〈私とは何なのか〉 17. 前回の作文の批評。 18. 橋本治『男になるのだ　男に生まれるのではない』を読んで、作文を書く。〈一人前になるということ〉 19. 前回の作文の批評。 20. 松浦理英子『優しい去勢のために』を読んで、作文を書く。〈現代を生きることの困難さ〉 21. 前回の作文の批評。 22. 佐藤春夫『言述のすがた』を読んで作文を書く。〈制度としての言語〉 23. 前回の作文の批評。 24. 一年間のまとめ。テーマに沿って作文を書く。

科目名	国語表現（94年度以降） 国語（93年度以前）	担当者名	肥田野　昌之

講義の目標		日本語への関心を深め、日本語による表現を豊かにしようとするものである。また常用漢字の練習や日本語・日本文学の基本的な知識の学習を通して、大学生としての教養も深めたいと思う。
講義概要		論理的な文章表現の習得を目的とし、文章の構成・段落の問題、表記法、原稿用紙の使い方などの基本的事項についての講義と実習を行い、文章による効果的な伝達の技能を養うようにしたい。 また、文字の問題・仮名づかいなど日本語に関する知識や教養としての日本文学に関連する基本的知識についても言及したい。
使用教材	テキスト	特に使用せず、その都度プリント配布。
	参考文献	
評価方法		授業への出席と実作および年度末試験によって決定する。
受講者に対する要望など		原則として1/3以上の出席が必要。四年生は特に注意。

年間授業計画	1. 国語表現についての意義と一年間の講義概要を説明する。 2. 現代社会における文章の機能についての考察とともに文章上達法についても考える。 3. 「文は人なり」について考えるとともに文章と文体についても言及する。 4. 文章表現のプロセスとして、文章の目的・主題の選定・主題の限定などについて説明する。 5. 文章表現のプロセスとして、材料の意義・材料の源泉などについて説明する。 6. 文章表現のプロセスとして、材料の順序と構成・アウトラインについて説明する。 7. 豊かな内容とは—物の見方や読書などについて考える。 8. 国語表記の問題—段落の分け方や送りがななどについても言及する。 9. 原稿用紙の使い方や校正などについて説明する。 10. 作文を書く（添削と採点）。 11. 作品を返還して、感想や注意事項を述べる。特に誤字の問題、常体・敬体の混在など。 12. 学生が黒板に出て、漢字かなつけ・漢字書き取りを行う。 13. 小説の面白さ—地獄変・春琴抄など— 14. 教養としての能・狂言・歌舞伎入門—鉄輪・花子・勧進帳など— 15. 文字について—特に「漢字御廃止之儀」から常用漢字までを概説する。 16. 仮名づかいについて—仮名づかいの歴史、特に歴史的かなづかいと現代かなづかいに力点をおいて説明する。 17. 標準語と方言について説明し、女房詞や忌詞などについてもふれる。 18. 文章のさまざま—実用性の濃い文章と芸術性の濃い文章など— 19. 手紙の書き方—手紙の形式を中心にして説明する。 20. 課題作文を書く（添削と採点） 21. 作品を返還し、感想や注意事項を述べる。 22. まとめとしてプリント二枚を配り、年度末試験についての傾向と対策を説明する。 23. 学生が黒板に出て、四字句の完成などを行う。 24. ことばと社会について—ことばの乱れや敬語法について考える。

科目名	日本文学	担当者名	飯島一彦

講義の目標		中世から近世にかけて爆発的に産み出された『お伽草子』群は、日本文学史上においては初の庶民文芸と言ってよいが、庶民文芸であるからこそ、実は長きにわたる日本の文化伝統をそのままに体現していて重要である。今年はその中でも特に親しまれ、昔話としても流布し、学生諸君も小さい頃から知っているはずである「浦島太郎」と「一寸法師」をとりあげて、単なるお伽話としか思っていないものが、どれほど深くて長い文化伝統にのっとって作られているものか、それを受け取る読者、つまり我々の感覚がどれだけ伝統的なのか、明らかにしていく。
講義概要		前期は「浦島太郎」、後期は「一寸法師」をとりあげる。どちらの話も記紀万葉から明治時代の国定教科書を経て、現代に至るまでの長い伝承の歴史を持っている。それらを逐一つまびらかにして、歴史的な変容を明らかにすると共に、変わらない点はどこなのかを明らかにしていく。そのために、古文の講読・解釈を毎時間することになる。
使用教材	テキスト	その都度教室で配付する。
	参考文献	その都度教室で指示する。
評価方法		年二回のレポート、学年末試験の成績による。
受講者に対する要望など		長大なレポートを課するので、様々な文献を読み、考える覚悟が必要である。

年間授業計画	1. 「お伽草子」とは何か？ 2. 「浦島太郎」を読む① 3. 「浦島太郎」を読む② 4. 「浦島太郎」を読む③ 5. 奈良時代の「浦島太郎」① 日本書紀 6. 奈良時代の「浦島太郎」② 万葉集 7. 平安時代の「浦島太郎」① 8. 平安時代の「浦島太郎」② 9. 昔話・伝説の中の「浦島太郎」 10. 国定教科書の「浦島太郎」 11. まとめ：日本人の異郷意識：異人、幸福、時間 12. 予備日「絵本の中の浦島太郎」 13. 「一寸法師」を読む ① 14. 「一寸法師」を読む ② 15. 「一寸法師」を読む ③ 16. 奈良時代の「一寸法師」① 17. 奈良時代の「一寸法師」② 18. 平安時代の「一寸法師」① 19. 平安時代の「一寸法師」② 20. 芸能に見る「一寸法師」 21. 国定教科書の「一寸法師」 22. 昔話の「一寸法師」 23. まとめ：日本人の侏儒観、異人と差別意識、畏れと憧れ。 24. 予備日「絵本の中の一寸法師」

科目名	日本文学	担当者名	北村　進

講義の目標		近代の代表的な短編小説を読み味わいながら、小説のおもしろさ、奥深さを学ぶとともに、人間・社会・愛・自己などについて考える。いろんな作品を取りあげることによって、それぞれの作者の考え方、ものの見方の違いを知り、小説に対する興味を持たせたい。今が一番本を読める時期なので、本を選ぶ手助けとしたい。
講義概要		近代を代表する作家の短編小説を多く読み、作者及び時代背景について解説し、その作品の内容を把握しながら作品世界について考察する。作品の朗読・解説が中心となるが、作品を読んだ後に、簡単な読後感を書いてもらうことがある。これも評価の対象となることもちろんである。
使用教材	テキスト	『近代の短篇小説』(㈱おうふう)、その他必要に応じて指示する。
	参考文献	
評価方法		前期はレポート、後期は未定。出欠は毎回とり、評価の参考とする。その他講義時に課すさまざまな課題。
受講者に対する要望など		休まず出席すること。講義中、無駄話をしないこと。

年間授業計画	1. 一年間の講義の概要について説明する。近代文学について簡単な試験を試みる。 2. 坂口安吾について解説する。安吾のおいたち、作家生活、文学史的位置付けなどについて説明する 3. 「桜の森の満開の下」を読む。 4. 同 上。 読後感を書いてもらう。 5. 「桜の森の満開の下」の作品世界について考察し、他の作品についても解説する。 6. 太宰治を取り上げる。太宰治の生涯をたどりながら、文学活動について解説する。 7. 同 上 8. 「桜桃」を読み、晩年の太宰について解説する。 9. 中期を代表する作品「走れメロス」をシラー「人質」と比較しながら読んでみる。 10. 「走れメロス」と「人質」の相違を指摘しながら、太宰の意図について考える。 11. 横光利一「頭ならびに腹」「蠅」を読み、その作品の意図を探り、「新感覚派」について解説する。 12. 同 上。 「春は馬車に乗って」を読み、解説する。 13. 中島敦について解説し「名人伝」を読む。 14. 「名人伝」を読み、解説する。 15. 樋口一葉の生涯について解説する。 16. 「十三夜」を読む。 17. 同 上。 「十三夜」について解説する。 18. 武田麟太郎「雪の話」を読む。 19. 「雪の話」について解説する。 20. 森鷗外「普請中」を読み、解説する。 21. 鷗外の歴史小説について解説し、「阿部一族」を読む。 22. 同 上。 23. 大江健三郎「他人の足」を読む。 24. 有島武郎「小さき者へ」を読む。

科目名	日本文学	担当者名	肥田野　昌之

講義の目標		日本の代表的な古典である『万葉集』を講読する。主として作品の背景をなす万葉の時代・万葉人の生活・歴史的事件などについて解説し、教養人として必要な「万葉集入門」となるような講義をしたいと思う。
講義概要		前期は主として、初期万葉の歴史的事件を背景として、有間皇子や大津皇子の悲劇・額田王や但馬皇女の恋などについて、その歌とのかかわりで物語風に概説するとともに代表歌人たる柿本人麿や山部赤人についても考察する。後期は主として、伝説・説話の歌から東歌・防人歌の問題および山上憶良・大伴家持などの有力歌人についても広く検討してみたい。
使用教材	テキスト	小野寛校註『万葉集抄』笠間書院
	参考文献	斎藤茂吉『万葉秀歌』上下（岩波新書）
評価方法		授業への出席と前・後期試験によって決定する
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1．一年間の講義概要の説明、『万葉集』についての名義・成立・注釈書などを概説する。 2．巻一　1番・雄略天皇の歌について考える。 3．中大兄の三山歌について、いろいろな角度から考察する。 4．額田王とその歌についての説明と鑑賞。 5．柿本人麿とその長歌を中心に読む。 6．大津皇子・大伯皇女について謀反事件を考察しながら、それらの歌を読む。 7．穂積皇子と但馬皇女の悲恋と歌物語について。 8．有間皇子の謀反と歌について『日本書紀』を参考に考える。 9．再び柿本人麿の短歌とその終焉について考える。 10．前期のまとめとしてプリント二枚を配って、前期試験の傾向と対策について説明する。 11．山部赤人「不尽山を望くる歌」を中心に読む。 12．大宰帥大伴旅人「酒を讃むる歌」を中心にして読む。 13．真間娘子について―赤人と虫麻呂― 14．山上憶良とその歌―貧窮問答歌を中心にして― 15．万葉集の歌体について、特に旋頭歌を中心にしての歌と説明。 16．高橋虫麻呂の伝説歌について―浦島子・菟原処女など― 17．寄物陳思・正述心緒―巻十一の歌を読む。 18．万葉集の用字法―特に義訓・戯訓など― 19．東歌についての説明と歌。 20．中臣宅守と狭野弟上娘子の悲恋とその贈答歌について。 21．巻十六有由縁并雑歌を中心に読む。 22．後期のまとめとしてプリント二枚を配り、後期試験の傾向と対策について説明する。 23．大伴家持とその歌について講読する。 24．防人歌についての説明と歌、上代特殊仮名遣についても説明する。

科目名	外国文学	担当者名	北澤滋久

講義の目標		文学を味わうことの愉しさを伝え、併せて教養豊かな国際人をめざす者の人間形成の一助とすることを主たる目標とします。
講義概要		―英米の文学に観る人間像― 英米の文学のなかの古典・傑作をいくつかのトピックスに大別して、1講義、1作家、1作品を原則に、定説を踏まえながらも担当者独自の観点から解説してゆきます。毎回聴いていれば「学」はつくでしょうが、文学史的な体系を覚えてもらうつもりの科目ではありません。何より受講者の感性に訴えたく思います。文学は本来愉しいもののはずです。この際ちょっと読書好きになってさえもらえれば、美しく感動的に描かれた未知の人生や思想と出会えて、心地よい興奮とともに、ずっしりと重く自分の人生への指標が仄かに視えてもくることでしょう。こうした文学へのいざないに、肩のこらない楽しい授業にしたく思います。興味ある向きは、最初のガイダンス授業を覗いてみてください。
使用教材	テキスト	テキストは特に定めません。
	参考文献	参考文献は、2回目の授業時間に一覧表にして配布します。
評価方法		前期の講義で扱った作品の中から一編を読んで（翻訳可）、その感想文を夏休み後に提出してもらいます。これと後期の試験により評価します。
受講者に対する要望など		毎年多数の受講者の集まるのは結構なのですが、殊に昨年は異常現象が生じ、熱心な学生から私語が多くて困るとの苦情が出ています。単に単位獲得のみを目的とする方は悪しからずご遠慮ください。因みに毎年20％以上の不合格者が出ています。

年間授業計画	1. 登録のよすがに：本講義の内容と目標、そして受講者に願うこと 2. 開講の辞：言語・文学・芸術、そして言語芸術としての文学 3. Ⅰ　現代文明下のアメリカの少年たち　『ハックルベリィの冒険』：インノセントな魂 THE ADVENTURES OF HUCKLEBERRY FINN by Mark Twain 4.『ブラック・ボーイ』：人種差別に抗って　BLACK BOY by Richard Wright 5.『ライ麦畑でつかまえて』：現代社会に生きることの苦悩 THE CATCHER IN THE RYE by J. D. Salinger 6. Ⅱ　19世紀、イギリスの娘たち　『テス』：汚された？純潔 TESS OF THE D'URBERVILLES by Thomas Hardy 7.『フロス河畔の水車場』：新しい女性の生きざまを求めて THE MILL ON THE FLOSS by George Eliot 8.『ジェーン・エア』：自立する女性　JANE EYRE by Charlotte Brontë 9. Ⅲ　19世紀、英米文学の驚異　『嵐が丘』：天国と地獄のパラドックス WUTHERING HEIGHTS By Emily Brontë 10.『白鯨』：近代的英雄の悲劇　MOBY-DICK by Herman Melville 11. Ⅳ　英雄不在の20世紀の英雄たち　『ロード・ジム』：英雄ならざる英雄の悲劇 LORD JIM by Joseph Conrad 12.『老人と海』：一老漁師にみる英雄的雄姿　THE OLD MAN AND THE SEA by Ernest Hemingway 13. Ⅴ　海洋（冒険）小説の諸相　『ロビンソン・クルーソー』：孤島に生きる近代人 THE ADVENTURES OF ROBINSON CRUSOE by Daniel Defoe 14.『ガリヴァ旅行記』：人間嫌悪の結晶　GULIVER'S TRAVELLS by Jonathan Swift 15. Ⅵ　近代芸術観の極致　『月と六ペンス』：芸術家の狂気 THE MOON AND SIXPENCE by William Somerset Maugham 16.『アッシャー館の崩壊』他：至上の美を求めて THE FALL OF THE HOUSE OF USHER by Edgar Allan Poe 17.『ドリアン・グレイの肖像』：耽美の世界に踏み入って THE PICTURE OF DORIAN GRAY by Oscar Wilde 18. Ⅶ　父なるもの、母なるものの原像　『ハムレット』：青年の母への愛憎 HAMLET by Wiliam Shakespeare 19.『息子たち、恋人たち』：母と息子の絆　SONS AND LOVERS by D. H. Lawrence 20.『若い芸術家の肖像』：父なるものを求めて A PORTRAIT OF THE ARTIST AS A YOUNG MAN by James Joyce 21. Ⅷ　倫理と欲望の狭間　『ねじの回転』：女性家庭教師のみた幻想 THE TURN OF THE SCREW by Henry James 22.『事件の核心』：信仰と不倫に揺れて　THE HEART OF THE MATTAER by Graham Greene 23.『緋文字』：姦通と復讐の贖い　THE SCARLET LETTER by Nathaniel Hawthorne 24. 閉講の辞：芸術と人生、そして質疑・応答

科目名	外国文学	担当者名	松山恒見

講義の目標		読書の愉しみと、それによってもたらされる教養の基盤がどれほど大きいかを悟ってもらうこと。特に、自国文学ではなく、他国のそれは、地球規模でものを考える時代には、よその国の人びとの思想感情を少しでも理解すると共に、他山の石として、自分の生活や研究にも役立てられるはずで、これも当然、射程に入る。
講義概要		本年度については、広く読まれている作品を可能なかぎり中軸にしたい。同時に、文学作品を架空の出来事と見るのではなく、自分の人生にひき較べるような読みかたを会得させたい。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	多岐にわたるので、その都度指示。
評価方法		前・後期とも、課題図書を定め、その読後感を書いてもらうことで評価の50%とする。残る50%は、通常の試験と同様で、講義内容の理解度を見る出題による。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 読書について——文学とは何か。自国文学を知るためにも、外国文学を知ろう。 2. ヨーロッパ文学の源泉(1)　古代ギリシャ・ローマ文明、とくにその文学。 3. ヨーロッパ文学の源泉(2)　聖書、キリスト教。 4. 中世文学——ロランの歌、トリスタンとイズー、狐物語、ヴィヨン。 5. 十六世紀（ルネッサンス）——モンテーニュとラブレー。 6. 十七世紀——古典主義、コルネィユ、ラシーヌ、モリエール。 7. 十七世紀(2)　ラ・フォンテーヌ、デカルト、パスカル、モラリスト、ラファイエット夫人（クレーヴの奥方）。 8. 十八世紀——啓蒙主義、ヴォルテール、ディドロ。（課題図書発表） 9. 十八世紀(2)——ルソオ、「危険な関係」、「ポールとヴィルジニー」、「マノン・レスコー」。 10. フランス革命をめぐって。アナトール・フランスの「神々は渇く」。 11. 十九世紀——ロマンチスム。シャトーブリアン、スタール夫人、㈱コンスタンの「アドルフ」。 12. 十九～二十世紀文学の展望。（進度調節） 13. ロマンチスムの四大詩人。ユーゴー。 14. スタンダールの「ラシーヌとシェイクスピア」をめぐって。 15. ジッルジュ・サンド、バルザック。 16. スタンダール、メリメ。 17. フロベール、モーパッサン。 18. ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメ。（象徴主義） 19. 十九世紀のその他の作品。 20. ゾラ、自然主義。（課題図書発表） 21. アンドレ・ジイド、ヴァレリー、プルースト。 22. コクトー、ロマン・ロラン、マルタン・デュガール、その他。 23. サルトル、ボーヴァール、カミユ、モーリャック。 24. 現代文学。ルイ・アラゴンからミシェル・トゥルニェまで。

科目名	外国文学	担当者名	山路朝彦

講義の目標		ドイツの作家カフカの作品について論じながら、小説を読むという日常的な行為を問い直したいと思います。それを通して、自明に思われることを問題として考えていくという、大学での勉強に必要な技術を身につけましょう。
講義概要		カフカの作品をあらかじめ紹介するとともに（映画化や演劇化されたものも使います）、その作品を読み直しながら、様々な解釈の可能性を考えていきます。
使用教材	テキスト	カフカの作品『変身』、『城』、『審判』
	参考文献	
評価方法		前期レポート、後期試験
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 文学の理論へ　①感想・印象と批評、文学の理論と西欧の特質
2. 3. 4. 5. カフカの作品紹介
6. 文学の理論へ　②伝記・評伝と影響史、文学史と文学社会誌
7. 8. 文学の理論へ　③「小説」の誕生とその歴史
9. 10. 文学の理論へ　④文学史と国民意識・「ドイツ学」の成立、「精神科学」の成立と文学研究
11. 12. 文学の理論へ　⑤芸術の自律性、アヴァンギャルド
13. 文学研究の立場と方法　①精神史的方法
14. 15. ②作品内在解釈（インタープリテーション）の方法
16. 17. ③マルクス主義の立場から
18. 19. ④構造主義的方法
20. 21. ⑤文学社会学的方法
22. 23. ⑥「エッセイ」という方法
24. ⑦新たな立場と方法

科目名	歴史学（日本史）（94年度以降） 日本史（93年度以前）	担当者名	新井孝重

講義の目標		14世紀の内乱期は、日本の歴史の大きなまがり角であった。社会は南北朝の内乱を通過するなかで、どのように変化したのか。内乱期の諸相をながめながら、歴史の深いところに分け入り、社会の変化の様相をつかまえる。
講義概要		悪党とはどのような人々のことを云うのか。悪党の生態を観察することによって鎌倉末期の社会矛盾をつかまえる。そのさいの視点として、「武勇」と「武装」の問題は重要。つぎに、内乱の諸相を、なるべく具体的に、人間の行動と思想を通して観る。そのあとで、戦乱のなかで安穏をもとめる民衆のすがたを注目したい。
使用教材	テキスト	新井孝重「悪党の世紀」、吉川弘文館、1997年。
	参考文献	
評価方法		評価は、後期の試験の成績をもってする。
受講者に対する要望など		30分以上の遅刻者は出席者とみなさない。 紳士的な態度で気楽に聴いていただければよい。

年間授業計画

1. 〈大仏を領主にする村〉伊賀の農村、出作をする人びと。
2. 〈大仏を領主にする村〉奈良寺院社会の風景、南京大衆の周辺
   在地住民の寄人（よりうど）・神人化による「僧兵」の出現
3. 〈悪党の活動〉村の悪党Ⅰ　荘園在地武士の悪党化
4. 〈悪党の活動〉村の悪党Ⅱ　荘園在地武士の悪党化
5. 〈寺の悪党〉　武装する僧徒
6. 〈寺の悪党〉　預所（あずかりどころ）の僧、悪党になる
   東大寺僧快実について
7. 〈崩れる一揆の「作法」〉　中世の一揆とは
   一揆の淵源である寺僧の衆会について
8. 〈崩れる一揆の「作法」〉荘園体制の一揆的構造
   荘民の一揆の「作法」、「武」をともなわない一揆
9. 〈崩れる一揆の「作法」〉悪党の登場
   「武」をともなう悪党の行動様式が荘園制の一揆的構造を破壊
10. 〈武装の行粧〉　民間における武装の禁忌性
    甲冑を着ることの意味
11. 〈武装の行粧〉　武装すがたの異形性
    中世の祭礼と武装
12. 〈武装の行粧〉　悪党の武装……禁忌と異形との関連で武装は“悪”そのものである
13. 〈内乱の風景〉　楠木の勢力
    身体の武装の拡大したすがた……館の武装化
14. 〈内乱の風景〉　楠木の勢力
    在地に城郭がつくられることの意味
15. 〈内乱の風景〉　金剛山の攻防
    戦争を社会史的に観察すると
16. 〈内乱の風景〉　移動する大軍
    北畠顕家奥州軍長征の実相
17. 〈内乱の風景〉　戦いの日々
    内乱期武士の戦争観をみる
18. 〈内乱の風景〉　軍忠と恩賞
    武士はなぜ戦うのか
19. 〈内乱の風景〉　傭われる凡下（ぼんげ）の輩
    凡下と呼ばれる人々の生態をみる
20. 〈内乱の風景〉　戦争に疲れて
    合戦にあけくれる武士の人生、負傷・討死・没落
21. 〈内乱の風景〉　武士たちの生きるための知恵
    国人（こくじん）一揆
22. 〈悪党の美学〉　バサラをみる
23. 〈地下（じげ）の芸能と民衆〉　猿楽の形成
    伊賀の猿楽
24. 〈悪党の終焉〉　「平和」をもとめる民衆

科目名	歴史学（日本史）（94年度以降） 日本史（93年度以前）	担当者名	齊藤　博

講義の目標		地域民衆史や全体史としての社会史の立場から、日本および日本人のトータルな課題に迫る。思想・人物・地域の三つの視点から日本人像に照射を加えたい。 1．共同体、2．村落、3．天皇制、4．幕末維新期、5．英雄論、6．民衆信仰、7．民衆史、8．差別史、9．昭和十五年戦争、などが講義中のキーワードである。
講義概要		読書を通じての思索によってしか、歴史的なものの見方は身につかない。「若者の感性」やマスメディアの多数派思考やCM調流行ムード、あるいは大河ドラマの趣向によって、歴史学を水に薄めるわけにはいかないのである。きちんとした専門書、あるいはしっかりした啓蒙書を読むことが、歴史学の学習には求められている。 日本人であるからといって日本史学習が容易であり気安く分かってしまうことはない。やはり丁寧に、きちんと出席しないとわからない。
使用教材	テキスト	・齊藤　博『歴史の精神』学文社 ・齊藤　博『民衆史の構造』新評論
	参考文献	講義の間に、12冊以上を紹介する。そのうち2～3冊は是非とも通読してもらいたい。 最低限、テキストをよく読んでもらいたいと思う。割合と日本史百話的な「講談調」ではあるが、講義にでていないと無論、わからない
評価方法		前期と後期にペーパーテスト（論文形式）がある。
受講者に対する要望など		出席が良好でないと理解しにくい内容・傾向・水準にある。日本史だから日本人にはよくわかる、ということはない。とにかく、できる限り出席すること。

年間授業計画

1. 日本および日本人について。日本史の特徴Ⅰ、日本人が日本史を学ぶ困難性
2. 日本史の特徴Ⅱ、風土と歴史、日本史研究者像Ⅰ、新井白石、本居宣長、伴信友（近世史）
3. 日本史研究者像Ⅱ、津田左右吉、和辻哲郎、柳田国男、喜田貞吉、服部之総、羽仁五郎（近代、現代史）
4. 日本史研究者像Ⅲ、瀧川政次郎、渡部義通、石母田正（古代史、中世史）
5. 日本史研究者像Ⅳ、芳賀登、色川大吉、井上幸治（地域民衆史の視座と方法）
6. 「天への想い」　Ⅰ、日中歴史学の比較と対照、東洋的歴史像の構築
7. 「天への想い」　Ⅱ（天皇制論を含む）
8. アジア的共同体と差別　Ⅰ　島崎藤村『破戒』を読む
9. アジア的共同体と差別　Ⅱ　島崎藤村『破戒』を読む
10. 幕末明治期豪商家の具体像、齊藤博『大和屋物語』を読む
11. 幕末明治期豪商家の具体像、齊藤博『大和屋物語』を読む
12. 幕末明治期豪商家の具体像、齊藤博『大和屋物語』を読む
13. 近世史と近代史の問題点　Ⅰ　高橋貞樹『被差別部落一千年史』を読む
14. 近世史と近代史の問題点　Ⅱ　民衆信仰（中山みき、金光大神、出口王仁三郎）を考える
15. 明治維新論　Ⅰ（日本資本主義発展史の視座から）高杉晋作『東行詩集』を読む、吉田松陰論を含む
16. 明治維新論　Ⅱ（日本資本主義発展史の視座から）高杉晋作『東行詩集』を読む、吉田松陰論を含む
17. 明治維新論　Ⅲ（日本資本主義発展史の視座から）高杉晋作『東行詩集』を読む、吉田松陰論を含む
18. 幕末維新論　Ⅰ　島崎藤村『夜明け前』を読む
19. 幕末維新論　Ⅱ　島崎藤村『夜明け前』を読む
20. 幕末維新論　Ⅲ　島崎藤村『夜明け前』を読む
21. 幕末維新論　Ⅳ　島崎藤村『夜明け前』を読む
22. 幕末維新論　Ⅴ　島崎藤村『夜明け前』を読む
23. 日本近代化をどう考えるか（北村透谷、石川啄木、夏目漱石、永井荷風）
24. まとめ（総括）―日本および日本人論をめぐって

科目名	歴史学（東洋史）（94年度以降） 東　洋　史（93年度以前）	担当者名	熊　谷　哲　也

講義の目標	西アジアの歴史について講述する。イスラームは今日の国際情勢を読むための主要なキーワードであるが、その鍵を解くためには、現在のイスラーム諸国が成立する背景に、宗教・民族・国家といった新旧にわたる理念がどのように関係し合っているのかを知ることが大切である。そのためには、本来イスラームが何に価値を置き、何を理想として求めてきたかを考えることから始めねばならない。皆さんの視野が広がることを目標とする。	
講義概要	前半は７世紀における預言者ムハンマド（マホメット）の出現から16世紀にいたるまでの歴史を概観し、広大なイスラーム世界が形成されるまでの様相を理解する。宗教、社会、文化についての基本的な知識を学ぶ。 後期はイスラーム世界の近代化の歴史を地域別・テーマ別に考察する。今日のイスラームがかかわるさまざまな問題について、関心と理解が深められるよう留意する。	
使用教材	テキスト	使用しない
	参考文献	夏休みあけに読書レポートを提出していただくが、そのためにイスラームに関する新書程度の本を用意してもらう。詳しくは授業で指示する。
評価方法	試験とレポート。発想のオリジナリティーを重視する。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. イスラームにかんする基本事項について説明する。オリエンテーションをかねる。
2. イスラーム誕生以前の世界について考える。ユダヤ教やキリスト教に関する知識が必要である。
3. 預言者ムハンマド（マホメット）の出現と、その時代背景について考える。彼の教えと、それがアラビア半島内に広まる経過を理解する。
4. 最初の４人のカリフ（正統カリフ）の時代について考える。シーア派の出現を理解する。
5. ウマイヤ朝の歴史を考える。これがヴェルハウゼンの古典理論において「アラブ帝国」と定義される意味を検討する。
6. アッバース朝の歴史について考える。その成立と、古典理論において「アラブ帝国」から「イスラーム帝国」への移行と定義される意味を検討する。
7. イスラームの聖典であるコーラン（クルアーン）、預言者の言行録であるハディース、それらの解釈をめぐって成立・発展した初期思想と学問について考える。
8. アッバース朝時代から発達したアラビアの科学とその内容について、また、中世イスラーム社会において民衆教化の役割をはたした神秘主義教団について考える。
9. アッバース朝の弱体化に伴い、各地に出現した軍事政権とその展開について概観する。
10. エジプトのマムルーク朝について学ぶ。とくにイクター制と呼ばれる制度が西ヨーロッパの封建制と比較される点を検討する。
11. イスラーム世界とヨーロッパ世界との関係について考察する。レコンキスタ、十字軍、大航海時代、これらが形成したヨーロッパのイスラーム観について検討する。
12. 前期のまとめをおこなう。
13. オスマン朝の成立と発展について、この王朝が「完成されたイスラーム国家」と呼ばれる点について検討する。
14. 列強による帝国主義とイスラーム世界とのさまざまな関係について概述し、西アジアにおける近代化の枠組みをひとまず一般論として把握する。
15. 西洋の衝撃によってイスラーム世界の内部にあらわれた改革運動と、その内容を考察する。欧化主義や原理主義（復興主義）が成立するメカニズムを理解する。
16. さまざまなイスラーム改革運動、ネオ・スーフィズムなどについて考える。
17. エジプトの近代化とその過程について考える。
18. トルコの近代化とその過程について考える。トルコ・ナショナリズム、パン・イスラミズムを理解する。
19. 近代化がイスラーム世界の人々の生活と信仰におよぼした影響について、いくつかの点から考察する。
20. イスラーム知識人階層であるウラマーと、その役割について、広く時代を通して考える。
21. 今世紀のイスラーム世界について考える。イスラーム諸国における民族主義とそのゆくえ、マイノリティーの問題を考える。
22. パレマチナ問題について検討する。
23. 東西冷戦終結後におけるイスラーム諸国と欧米諸国との関係を考える。
24. 後期のまとめをおこなう。

科目名	歴史学（西洋史）（94年度以降） 西　洋　史（93年度以前）	担当者名	井　村　行　子

講義の目標		ウォラースタインの世界システム論に基づいて近現代世界史をヨーロッパを中心に概観する。
講義概要		近代以前の世界システム（世界体制）は「世界帝国」であり、この体制は共通の政治システムをもち、経済外的強制によって貢納の徴収と分配を行っていた。しかし「大航海時代」以降、「世界経済」というこれとは異なる世界システムが次第に世界を覆っていく。この世界体制は全世界を異なる政治体制のまま経済的に単一の体制に統一していく新たな世界システムである。この世界体制は資本主義的世界体制とも呼ばれる。近代以降の世界史はこの近代世界システムの成立、確立、崩壊(?)　＝新たな世界システムの形成の過程と捉えられる。
使用教材	テキスト	とくに使用しない
	参考文献	大江一道『世界近現代全世界史』全３巻（山川出版社、1991-97）
評価方法		前期末と後期末の筆記試験
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 15世紀末から16世紀への転換期の世界。アジア、アフリカの世界帝国。ポルトガル、スペインによる「大航海」
2. 16-17世紀のヨーロッパ。イタリア戦争から名誉革命にいたるヨーロッパの動乱の時代
3. 17-18世紀の西ヨーロッパ。名誉革命後のイギリスと絶対王政期のフランス
4. 18世紀の中・東ヨーロッパ。ドイツとロシアの絶対主義。新たな戦争の時代
5. 18世紀のアジア。東アジアの発展。インドの植民地化の始まり
6. 二重革命の時代。イギリス産業革命。アメリカ独立革命。フランス革命
7. ナポレオン独裁とヴィーン体制の成立
8. 19世紀前半のヨーロッパ。1830年代のヨーロッパ。ヨーロッパの工業化。1848革命
9. 19世紀前半のアメリカ。アメリカ合衆国の膨張。カナダとラテン・アメリカの独立
10. 19世紀前半のアジア。西アジアの近代化。東アジアの危機
11. 19世紀半ばのヨーロッパ。大英帝国の発展。フランス第二帝政の成立と発展。ドイツの統一運動とオーストリアの再編。イタリアのリソルジメント
12. 19世紀半ばのアメリカとロシア。南北戦争と再建。クリミア戦争と大改革。カナダとラテン・アメリカの近代化
13. 19世紀後半のアジア。オスマン帝国の近代化。インド大反乱。太平天国とアロー戦争。中国の近代化。日本の開国
14. 1870年代のヨーロッパ。ドイツ統一とドイツ第二帝政。露土戦争とベルリン会議。フランス第二共和制の成立。イタリア王国の発展。パクス・ブリタニカ体制
15. 帝国主義の開幕。1880年代の世界
16. 帝国主義の世界分割。1890年代の世界
17. 20世紀初頭の世界
18. 第一次世界大戦
19. ヴェルサイユ体制の成立
20. 1920年代の欧米
21. 1930年代の欧米
22. 1930年代のアジア
23. 第二次世界大戦
24. 戦後世界の成立

科　目　名	歴史学（西洋史）（94年度以降） 西洋史（93年度以前）	担当者名	小　林　登志子

講義の目標		国際化時代と言われるが、その実情は西欧化時代である。なぜ西欧文明が世界を支配したのかを、その起源である古代オリエント文明に遡って考察する。また、我々日本人にとって西欧とは何であるかを、日本人の視点から分析することで、21世紀を生きる受講生の国際社会理解の一端としたい。
講義概要		講義は平明・概説的であるが、重要事項は詳述し、あわせて最新の研究動向も紹介する。尚、講義内容の理解を深めるため適宜資料を配布する。
使用教材	テキスト	高橋正男著『年表古代オリエント史』時事通信社、1996年。
	参考文献	その都度紹介する。
評価方法		後期の筆記試験による。
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 歴史とは何か。歴史を学ぶ意味及び紀年法について
2. 先史時代　人類の誕生から新石器革命まで
3. 古代オリエント史　1　文明の誕生
4. 古代オリエント史　2　古代エジプト文明の誕生
5. 古代オリエント史　3　新王国の繁栄
6. 古代オリエント史　4　古代メソポタミア文明の興亡
7. 古代オリエント史　5　ハンムラビ大王の時代
8. 古代オリエント史　6　新アッシリア帝国
9. 古代ギリシア史　1　エーゲ文明
10. 古代ギリシア史　2　ポリス社会とペルシア戦争
11. 古代ギリシア史　3　アレクサンドロス大王の帝国
12. 古代ローマ史　1　共和制ローマ
13. 古代ローマ史　2　帝制ローマ1　元首制
14. 古代ローマ史　3　帝制ローマ2　専制君主制
15. 中世ヨーロッパ史　1　ピレンヌ・テーゼ
16. 中世ヨーロッパ史　2　フランク王国
17. 中世ヨーロッパ史　3　封建制とキリスト教の普及
18. 中世ヨーロッパ史　4　十字軍
19. 近代ヨーロッパ史　1　大航海時代
20. 近代ヨーロッパ史　2　ルネサンス
21. 近代ヨーロッパ史　3　宗教改革
22. 近代ヨーロッパ史　4　絶対主義国家
23. 近代ヨーロッパ史　5　資本主義の誕生と発展
24. 近代ヨーロッパ史　6　ヨーロッパの世界支配

科目名	歴史学（西洋史）（94年度以降） 西　洋　史（93年度以前）	担当者名	古　川　堅　治

講義の目標		本講座は「ヨーロッパの歴史」と題して、前期をその統合と分裂の側面から通観し、今日のヨーロッパ連合（EU）がどのような発展の可能性をもっているかを考え、後期をバルカン状勢がもつ意味を考えることを目標とするものである。
講義概要		講義は概説的に進めていくが、関連するテーマのビデオや映画などもできるだけ使って理解を深めるのに役立てたい。授業では細かな年代や事項を暗記してもらおうというのではなく、各テーマごとに問題を提示し、それについて考えてもらうことを主眼においているので、積極的かつ活発な質問、疑問、意見が出ることが期待されている。その意味でも自由な発言ができるようなアト・ホームな雰囲気で、小じんまりとしながら進めていく。
使用教材	テキスト	特に使用することはしない
	参考文献	その都度指摘する
評価方法		前・後期二回のレポートと数回の小レポートで評価。テーマ〆切日、枚数等については授業中に提示する
受講者に対する要望など		受身の姿勢ではなく、積極的に問題点を考え、議論する姿勢を期待する。

年間授業計画

1. 「はじめに」
(1)年間授業計画の概要　(2)ヨーロッパとは何か
2. 「第一部」「(1) 地中海世界の意義」
1．ギリシア文化の歴史的意義　・古典文化の発展とその遺産
3. 2．ローマ帝国の歴史的主義
・ローマの世界帝国　・ローマ帝国下のヨーロッパ
4. 3．ビザンティン世界と西欧世界
・東方世界と西欧世界
5. 「(2) 中世キリスト教世界」
・ヨーロッパ封建制とキリスト教の普遍化
6. 「(3) ルネサンスと新世界」
・文化の変容　・ヨーロッパの拡大
7. 「(4) 宗教改革と絶対主義」
・宗教改革とヨーロッパの分裂
8. 「(5) 啓蒙の時代と自由の思想」
・グランドツアー　・自由主義と民族主義
9. 「(6) ヨーロッパの近代化」
・都市化と工業化　・社会改革
10. 「(7) 分裂から相互理解へ」
1．統合への理念（その1）
11. 2．統合への理念（その2）
12. 3．統合への理念（その3）
13. 「第二部」「(1) バルカン状勢の現状」
・現在のバルカン状勢について概観する
14. 「(2) バルカン地域の共通の歴史体験」
・オスマン帝国の支配
15. 「(3) バルカン地域における民族意識の覚醒」
・各地の民族運動
16. 「(4) バルカン諸国の独立と各地のネットワーク」
・各地の独立運動と諸列強の関わりについて
17. 「(5) バルカン諸国の対立と領土問題」
・国家形成に成功した地域と領土を分別された地域
18. 「(6) ギリシアをめぐる諸状勢」
・ギリシア近・現代史　・バルカン諸国との諸関係
19. 「(7) アルバニアの問題」
・民族統合の問題
20. 「(8) 旧ユーゴ・マケドニア共和国の問題」
・ギリシアとの「国名」「国旗」をめぐる対立
21. 「(9) キプロス問題」
・分断国家の歴史的背景と今後の課題を考える
22. 「(10) ユーゴスラビア・ルーマニア・ブルガリアにおける諸問題」
・民族対立と市場経済化
23. 「(11) 新たなバルカン同盟へ」
・バルカン諸国の安定化と協力に向けての可能性を考える
24. 「まとめ」
一年間の総括

科　目　名	人文科学特殊講義A（現代社会と学問）1（94年度以降）	担当者名	川　村　　肇

講義の目標	学問生産の場である大学の授業はどうあるべきなのか。現代社会と学問とは、具体的には学生という国民を介してつながっているが、その授業のあり方が、今問われている。本講義では、学生が主体となって大学の授業改善を進める場合、どういう問題があるのか、どういう条件と合意が事前に必要なのかを探っていくことを目的とする。	
講義概要	本講義では、大学における授業改善のさまざまな取り組みを紹介するとともに、自分たちの学んでいる授業の実際、他大学の友人が学んでいる授業の実際などを調査しつつ、理想的な大学の授業をつくり出すことを目指して、学生に何ができるのかを含めて討議を重ねる。	
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	講義中に指示する。
評価方法	出席とレポートによる	
受講者に対する要望など	討議を中心に行うため、きちんと出席して自分の考えを率直に述べてほしい。また、聞き取りなどを含めて体験的に学ぶことを重視したい。	

年間授業計画

1. 本講義の目的と進め方について
2. 学生の求める授業とは何か　討議
3. レポート作成
4. 大学の授業改善の試み（日本で　1）　学生によるレポートと討議
5. 大学の授業改善の試み（日本で　2）　学生によるレポートと討議
6. 大学の授業改善の試み（アメリカで）　大学の授業改善の試み
7. 大学の授業改善の試み（本学で）
8. 大学の授業改善の試み（本学で）　学生によるレポートと討議
9. 面白い授業とは何か　討議
10. 出席について　討議
11. 評価（試験）について　討議
12. 予備
13. 思考と知識について　討議
14. 大学の授業改善の試み（他大学で　1）　学生によるレポートと討議
15. 大学の授業改善の試み（他大学で　2）　学生によるレポートと討議
16. 大学の授業改善の試み（他大学で　3）　学生によるレポートと討議
17. 大学の授業改善の試み（他大学で　4）　学生によるレポートと討議
18. 大学の授業改善の試み（他大学で　5）　学生によるレポートと討議
19. レポート作成
20. 理想的な大学の授業を創造してみる　1
21. 理想的な大学の授業を創造してみる　2
22. 理想的な大学の授業を創造してみる　3
23. 理想的な大学の授業を創造してみる　4
24. 予備

科目名	人文科学特殊講義A（西洋哲学史）2（94年度以降） 西洋哲学史（93年度以前）	担当者名	谷口郁夫

講義の目標		混迷の時代と言われる今日においてこそ、もう一度根本に戻って考え直すことが求められています。そこで哲学という学問になれていない学生のために、初学者にも読みやすく、なおかつ西洋哲学を代表する哲学書を読みながら、西洋哲学において「何」が「どのように」論じられてきたかについて、ともに考えます。あまり専門的になることなく、身近な問題について考える一助となるようにする予定です。
講義概要		哲学は本来、一部の専門家の学問ではなく、すべて人々が考えるべきこと（恋愛・死・善と悪、生、等々）を考えようとする学問でもあります。具体的にどのような問題を取り上げるかは、受講者の要望も容れたいと考えています。したがって、講義予定は変更がありえます。また、哲学書を読むことによって、その思想を受け入れるのではなく、批判的に受容しながら、現代社会のなかで生きていくための自分自身の考え方を確立する助けとなるように、批判的に読んでいくことにします。講義予定にあるように、哲学史といっても、時代順に進めるのでなく、ひとつのテーマを巡って何人かの思想家の書物を取り上げながら数週間にわたって論じていくというスタイルになる予定です。
使用教材	テキスト	・プラトン『饗宴』デカルト『方法序説』パスカル『パンセ』など。詳細は講義予定を参照。大半はこちらで準備する。
	参考文献	
評価方法		前期、後期とも1,200字前後の小論文を書いてもらう予定です。自分の考えを書いてもらうことになりますから、自分の考えがわかるように書けていることが必要です。
受講者に対する要望など		受講者の希望を可能な限り容れていくので、積極的に発言してもらいたい。

年間授業計画	1. プラトンの『饗宴』を読みながら、古代ギリシャにおける「エロス」的なものについて、キリスト教以前の古代社会における恋愛観について理解を深める。 2. 前回に引き続き、『饗宴』を読む。この書物を手がかりにして、プラトンのイデア論、想起説などについて。 3. 前回の続き。また、ユダヤ教・キリスト教の恋愛観についても触れたい。 4. キルケゴールの日誌からいわゆる「主体的真理」に関する箇所を読む。 5. 前回の続き。特に、キルケゴールの婚約破棄についての日誌記述、『おそれとおののき』から、キルケゴールにおける「宗教的なもの」、「伝達の問題」などについて考える。 6. 近代的自我の確立とその問題点についての考察を試みる。まず、デカルトを取り上げるが、イタリア・ルネッサンスとの関連なども考察する。 7. デカルトの『方法序説』を読み、中世的人間観から近世的人間観への転回が、どのような意味を持つのかについて。 8. 前回に引き続き、デカルトの『方法序説』を読む。さらに、デカルト以後の哲学者との関係について論じる。 9. パスカルの『パンセ』を読む。「考える葦」「気晴らし」などの言葉を手掛かりに、生と死、人間存在についてパスカルがどのように考えたか。 10. 前回の続き。 11. ロックの「宗教寛容に関する書簡」を通じて、社会的存在としての近代的人間が追求されていく過程と社会的背景について考える。 12. カント『啓蒙とは何か』を読む。ドイツがヨーロッパの後進地となったことの歴史的原因にも留意する。 13. 前回の続き。カントにおける近代的人間観について。政治的・社会的後進性を背景とするカント思想について。 14. 「歴史観」の問題に関する考察を試みる。まず、ヘーゲル『歴史哲学』を読む。特に、ヘーゲルの弁証法の特色について。 15. 前回のヘーゲルとマルクス「共産党宣言」を合わせ読みながら、さらに、歴史観について考える。ユダヤ教的歴史観、キリスト教的歴史観などについても考えたい。 16. フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を読み、ヘーゲル学派の左右分裂、時代情況などについて考える。あわせて、シュトラウスの『イエス伝』も論じたい。 17. 現代における人間のあり方について考えたい。ショーペンハウアーの『余録と補遺』に含まれるいくつかの作品を通して、彼の悲観論的哲学とその問題点について考える。 18. ニーチェの『力への意志』を読み、彼のキリスト教批判とニヒリズムの到来について考える。 19. 前回の続き。特に、現代における、あるいは我々のうちなるニヒリズムとその克服について。 20. 前回の続き。さらに、ニーチェの『ツァラトゥストラはこのように語った』から、彼の考えた新たな人間像、「自己超克」などについて。 21. 前回の続き。『この人を見よ』を併読予定。特に、ニーチェの「運命愛」について。 22. サルトル『実存主義とは何か』を手掛かりに、20世紀に流行することになった実存主義の特色について。特に、いわゆる無神論的実存主義における真理の問題を考えたい。 23. 前回に続き、現代における真理について考えたい。そもそも「真理」という言葉がまだ意味を持ちうるのかなどが考察の中心となる。 24. 予備

科目名	人文科学特殊講義A（哲学思想史）3（94年度以降）	担当者名	谷口郁夫

講義の目標		19世紀のヨーロッパにおいて、特にニーチェによって「ニヒリズムの到来」ということがいわれるようになった。このことに関連して、特にヨーロッパにおけるニヒリズムの起源について理解することを目指す。また、ニヒリズムの克服の試みについて書かれた書物も読みながら、現代日本の問題としてニヒリズムとその克服について考える。
講義概要		実際の講義はできるだけ多くの資料を読むことが中心となる。資料を読みながら、時代背景や、思想史的関連について顧慮していくことになるが、その際、キリスト教についての理解は欠かすことができないし、また時代の社会的情況についての知識も要求されることになるので、こういった要素についても常に考慮しなければならない。また現代日本の情況についても顧慮する予定である。
使用教材	テキスト	・そのつど指示するが、基本的にこちらで準備する。
	参考文献	・ニヒリズム全体に関しては、川原栄峰「ニヒリズム」（講談社現代新書）が手掛かりになる。
評価方法		思想史的な知識が要求されるが、それ以上に重要なのは、問題点を見いだす能力である。したがって、定期試験の形では行なわず、講義のなかで数回、各自の考えなどを書いてもらうことにする。
受講者に対する要望など		講義のなかで実際に読む資料を以下に挙げてあるが、受講者の希望があれば、変更もありうるので、希望があれば積極的に申し出ること。

年間授業計画	1. キリスト教について〔1〕ユダヤ教との関係・歴史的イエス・原始キリスト教などについて。 2. キリスト教について〔2〕イエスの教え・パウロの教えについて。キリスト教における罪の概念・終末思想など。 3. キリスト教について〔3〕ローマ帝国へのキリスト教の広まり・カトリック教会の成立・中世ヨーロッパについて。アウグスティヌスの思想。 4. ルター・カルヴァンの宗教改革・プロテスタンティズムの誕生。17、18世紀のキリスト教について。近代的意識の成立。 5. キルケゴール「現代の批判」(岩波文庫)を読む。キルケゴールにおける水平化、大衆化の問題としてのニヒリズムについて。 6. ツルゲーネフ「父と子」(新潮文庫)を読む。この小説は、「ニヒリスト」という言葉を大衆化した作品である。 7. ドストエフスキー「罪と罰」(新潮文庫)「悪霊」(新潮文庫)を読む。 8. 前回に続き、ドストエフスキーの作品における、超人の問題。ドストエフスキーにおけるニヒリズム克服の試みとその挫折について。 9. カミュ「シーシュポスの神話」におけるドストエフスキー解釈について。 10. ニヒリズムの背景となる19、20世紀のキリスト教会・社会思想について。フォイエルバッハ、マルクスなど。 11. ニーチェ「力への意志」を読み、このニーチェの遺稿を手がかりに、ニーチェにおいてもっとも明瞭に示された「ニヒリズム」とは何かについて。 12. 前回に引き続き、ニーチェの「力への意志」を読む。特に、ニーチェのキリスト教批判について考える。 13. ニーチェ「力への意志」を読む。ニーチェ思想のキーワードとなる「超人」「永遠回帰」「価値転換」などについて。 14. ニーチェ「悦ばしき知識」を読む。ニーチェにおける「神の死」の宣告。特に、時代情況との関連に顧慮する。 15. ニーチェ「ツァラトゥストラはこう言った」(岩波文庫)を読む。「超人」「自己超克」について。 16. 前回に引き続き、ニーチェ「ツァラトゥストラはこう言った」を読む。さまざまなエピソードからニーチェのいう「超人」のイメージについて。 17. ニーチェ「善悪の彼岸」「この人を見よ」など、ニーチェの著作のなかでニヒリズムに関する箇所の抜粋を読みます。 18. 観点を変えて、ニヒリズムを単に個人的な思想としてではなく、社会現象としてみることができる場合を取り上げ、考えてみたい。 19. エーリッヒ・フロムの「悪について」を読み、現代の大衆社会におけるニヒリビムの危険性について考える。 20. フランクル「夜と霧」を読み、フランクルの言う「ニヒリズムの克服」、「生の意味」などについて考える。 21. 前回の続き。「苦悩の存在論」などを併読予定。 22. 一年間のまとめとして、さらに広く現代社会におけるニヒリズムの問題とその克服の試みについて考える。 23. 予備 24. 予備

科目名	人文科学特殊講義A（キリスト教史Ⅱ）4（94年度以降） 西洋倫理思想史（93年度以前）	担当者名	中島文夫

講義の目標		キリスト教史の考察にはいくつかの異なる視点が可能である。教義・教理の展開を主眼とすることもあれば、教勢の伸長・衰退に焦点を合わせることもできる。また、教団・教派の生成・変化に着目するということもあろう。信仰生活の慣習や典礼の変遷を中心とする歴史も考えられるであろう。しかし、この講義では、キリスト教がヨーロッパの歴史の中で展開した歴史的宗教であるという基本的認識を基盤として、キリスト教を一般史との関わりにおいて見、キリスト教の展開を軸として一般史を見ようとする。
講義概要		—キリスト教史Ⅱ：中世後期・近代— キリスト教は初めから完成されたものとして存在したのではなく、ヨーロッパの歴史の中で形成されて来たものである上に、その歴史的展開の中に摂理を読み取ろうとする姿勢を常に持ち続けている。つまり、二重の意味で歴史的本性をもつ宗教である。前年度の「キリスト教史Ⅰ」に続いて、教皇を頂点とする「普遍的教会」の理念に基づくゲルマン的キリスト教世界が解体して「国民的教会」が形成されて行く過程を、「ヨーロッパの近代化」とからめて考察する。
使用教材	テキスト	使用しない。講義内容のレジュメのプリントを配布する。
	参考文献	必要に応じて講義中に指示する。
評価方法		前期末、後期末の筆記試験80%、出欠状況20%。ただし、甚しく欠席の多い者には単位を与えない。
受講者に対する要望など		欠席はもとより遅刻もしないように心がけ、授業中の私語を慎しむなど礼儀正しい態度を望む。

年間授業計画	1. 第1章　ローマ教皇権の隆盛 §1. 10世紀後半の西ヨーロッパ 2. §2. グレゴリウス改革とその影響 3. §3. 十字軍 4. §4. ドイツ騎士団 5. §5. 正統と異端 6. 第2章　都市文化とキリスト教 §1. 都市の発達 7. §2. ロマネスク文化とゴシック文化 8. §3. 大学の発達と学問の興隆 9. §4. トーマス・アクィナスの思想 10. 第3章　中世の秋 §1. ドイツ神秘主義と《デヴォティオ・モデルナ》 11. §2. スコラ学の変質・崩壊 12. §3. 教皇権の衰退と《スキスマ》 13. §4. ルネサンスの時代 14. 第4章　宗教改革の時代 §1. マルティン・ルターとドイツの宗教改革 15. §1. マルティン・ルターと宗教改革（続） 16. §2. スイス（ドイツ語圏）の宗教改革 17. §3. 再洗礼派 18. §4. スイス（フランス語圏）の宗教改革とジャン・カルヴァン 19. §5. ジャン・カルヴァンの思想 20. §6. カトリック改革 21. §6. カトリック改革（続） 22. §7. 宗教戦争 23. §8. イングランドの宗教改革とピューリタニズム 24. §9. オランダのプロテスタンティズム

科目名	人文科学特殊講義A（日本近代史）5（94年度以降） 日本文化特殊講義A（93年度以前）	担当者名	中村　　粲

講義の目標		どこの国の歴史にも光と影があるように、我国の近代史や、その中で起った大東亜戦争にも光と影があった。NHKや朝日新聞などの偏向反日メディアから日本と日本人の醜悪な面のみを頭に叩きこまれてきた学生諸君に、この講義はそれとは大分異なった面を取り上げて講ずることになる。南京30万人虐殺や慰安婦強制連行の有無などの問題も詳しく論ずることになるだろう。この講義は日本人学生を対象とする。
講義概要		日清・日露戦争から大東亜戦争に至る日本近代史を講じつつ、よく話題になる諸事件、諸問題についても検討する。大東亜戦争とは何だったのか？その背景、原因そして世界史的意義は？　この主題に沿いつつ、蘆溝橋事件、南京戦、真珠湾奇襲の実否、慰安婦問題等々にも触れてゆく。歴史の真実像は光と影の複雑に交錯する中にこそ求められねばならない。マスコミの戦争報道や教科書の日本悪玉論に疑問をもつ諸君の受講を期待する。
使用教材	テキスト	・中村粲著『大東亜戦争への道』（展転社） ・　同　『「韓国併合」とは何だったのか』（日本政策研究センター）
	参考文献	随時紹介。
評価方法		平素の勤怠・意欲と定期試験・レポート等。
受講者に対する要望など		早目にテキストを購入して読んでおくこと。

年間授業計画	1. 講義の目的・内容・進め方について概要説明。 2. 大東亜戦争概説 (1)。 3. 同 上 (2)。 4. VTR鑑賞 (1) 5. 同 上 (2)。 6. 日清戦争。 7. 日露戦争。 8. 韓国併合。 9. 第一次大戦と日本 10. 国際協調主義の幻想。 11. 満洲事変 (1)。 12. 同 上 (2)。 13. 満洲事変以後の北支。 14. 蘆溝橋事件 (1)。 15. 同 上 (2) 16. 南京戦 (1)。 17. 南京戦 (2)。 18. VTR鑑賞。 19. 日米関係の悪化。 20. 日米交渉。 21. 真珠湾攻撃。 22. 東南アジアの独立。 23. 日本とアジア (1)。 24. 同 上 (2)。

科目名	人文科学特殊講義A(古典古代の遺産)6(94年度以降) 西洋文化特殊講義A(93年度以前)	担当者名	古川堅治

講義の目標		本年度は「ギリシア神話—ギリシア悲劇を中心に—」と題し、ギリシア神話のもつ豊かな内容とその現代にまで通じる普遍性を考える。講義の内容は、タイトルの性格に、ギリシアの歴史、演劇とりわけ悲劇論(演劇を社会現象ととらえる)、そして悲劇作品の鑑賞などに及ぶことになる。
講義概要		テキストを中心に概説的に進めるが、ギリシアの歴史、文化にも幅広く触れていく。また、ビデオや写真なども豊富に使い、イメージを豊かにしていくことにも意を用いたい。授業はアト・ホームな雰囲気で行なうつもりであるが、積極的な議論がわきおこることを期待する。
使用教材	テキスト	『ギリシア神話—ギリシア悲劇を中心に—』(古川堅治著、学文社)
	参考文献	その都度提示する。
評価方法		前・後期二回のレポートで評価する。テーマ、〆切日、枚数等は授業中に提示する。
受講者に対する要望など		主体的積極的に授業に参加することを希望する。

年間授業計画	1. 「はじめに」 ギリシア神話と現代のわれわれの関わり方について考える。 2. 「第一部　演劇文化論」 1.ギリシア演劇とその社会：「ポリス社会」と演劇の関係について考える。 3. 2.ギリシア悲劇の構造　　：ギリシア悲劇の起源、構造について考える。 4. 3.コレギア　　：ギリシア演劇を支える財政負担について考える。 5. 4.演劇と政治的弁論：演劇がいかに社会活動の一部であるかを、当時の政治的弁論との比較から考える。 6. 5.ビデオ　(1) 古代アテナイ社会とギリシア演劇：『トロイアの女』 7. 6.ビデオ　(2) ギリシア演劇と現代（その1） ：ギリシア悲劇の今日的意義について考える 8. 7.ビデオ　(3) ギリシア悲劇と現代（その2） ：ギリシア悲劇の今日的意義について考える 9. 「第二部　テーベ伝説圏とアテナイ伝説圏の諸神話」 8.ギリシアの神々 10. 9.テーベの建国神話とディオニュソス信仰 11. 10.ラブダコス家の悲劇（その1） ：オイディプス伝説について考える 12. 11.ラブダコス家の悲劇（その2） ：オイディプスの二人の息子の王位争いについて考える 13. 12.ラブダコス家の悲劇（その3） ：オイディプス一族の末路とテーベのその後の運命について考える 14. 13.ビデオ　(4) 『アポロンの地獄』 15. 14.アッティカの説王（その1） ：アテナイの神話伝説上の王統について考える 16. 15.アッティカの諸王（その2） ：エレクテウスとパンアテナイア祭について考える 17. 16.アッティカの諸王（その3） ：アイゲウスと『メデイア』について考える 18. 17.ビデオ　(5) 『王女メディア』 19. 18.テセウス王の時代（その1） ：テセウス伝説とアテナイの歴史について考える 20. 19.テセウス王の時代（その2） ：テセウス家の悲劇について考える 21. 20.アテナイの歴史的発展とペルシア戦争 ：神話と歴史的現実について考える 22. 「第三部ギリシア神話とは何か」 21.神話と歴史的現実について考える 23. 22.ギリシア神話とは何か？ ：ギリシア神話についての総括をする 24. 一年間のまとめ

科目名	政治学	担当者名	志摩園子

講義の目標		政治学の基本的概念や構造・仕組みを考えるとともに、政治学の全体像の把握を試みる。様々なアプローチから現代社会での政治を理解してみるように検討してみたい。
講義概要		政治学には、どのような方法論でアプローチできるか、また、政治においては、その主体である人間がどのように関わっていくかを念頭において、学生それぞれが、個々の関心あるテーマを見つけ出し、実際に分析してみるという作業を通じてその方法を身につけるとともに、理解を深められるようにしたい。
使用教材	テキスト	
	参考文献	適宜示す。
評価方法		平常点及び前・後期のレポートで評価する。
受講者に対する要望など		学生自身の作業なくしては、授業はなりたたないので好奇心ある関心と意欲のある態度をもってきてほしい。

年間授業計画	1. はじめに 2. 政治と政治学 3. 政治学とは 4. 個々の関心あるテーマを見つけてみよう 5. 個々の関心あるテーマを見つけてみよう 6. 政治制度 7. 政治制度 8. イデオロギー 9. イデオロギー 10. 個々のテーマに基づいて 11. 個々のテーマに基づいて 12. 予備 13. リーダーシップ 14. リーダーシップ 15. 政治的集団 16. 政治的決定の伝達 17. 大衆の政治意識 18. 諸国政治の比較 19. 国家間の政治 20. 政治の変動 21. 個々のテーマに基づいて 22. 個々のテーマに基づいて 23. 個々のテーマに基づいて 24. 予備

科目名	経済学	担当者名	岡田　博

講義の目標	経済学の基礎理論をできるだけ理解し易いように講義する。講義では経済学の基礎知識の修得とともに、現実の経済に対する関心が深まり、その動きを洞察する力が涵養されるように意を用いたい。	
講義概要	講義の主内容は、経済学とはどのような学問か、経済体制論および資本主義経済の構造と特色について、国民所得の大きさはどのように決定されるか、貨幣と金融、財政と財政政策、消費者行動について、生産の理論、市場における価格の決定、等々。	
使用教材	テキスト	未定、最初の講義のときに指示する。
	参考文献	川口他：『経済学入門』有斐閣。
評価方法	学年末の定期試験の成績で主に評価する。場合によっては前期末の定期試験も行う。また出席もときどきとり、これも評価の参考とする。	
受講者に対する要望など	授業には欠席しないこと。	

年間授業計画

1. 経済学とはどのような学問か：経済問題の根源、経済学についての諸定義、ミクロ経済学、マクロ経済学について
2. 経済体制についてⅠ：経済体制とは、経済体制の共通課題
3. 経済体制についてⅡ：体制分類の視点、資産の所有制度、経営管理のあり方、経済活動の調整機構、経済的成果の比較
4. 資本主義市場経済の特徴について
5. 混合経済体制における政府の役割：経済政策
6. 経済循環：生産から消費への財・サービスの流れの概観
7. 国民所得の概念：ＮＧＰ、ＧＤＰ、ＮＮＰ
8. 国民所得の決定：有効需要の原理、消費関数と乗数理論
9. 国民所得の変動：景気循環、インフレーション、デフレーション
10. 貨幣と金融Ⅰ：貨幣の形態、貨幣の機能
11. 貨幣と金融Ⅱ：信用創造
12. 貨幣と金融Ⅲ：金融政策
13. 財政Ⅰ：政府の経済的機能の拡大、予算制度
14. 財政Ⅱ：租税制度
15. 財政Ⅲ：財政政策１　財政政策の目標
16. 財政Ⅳ：財政政策２　経済の安定成長と財政政策
17. 消費の理論Ⅰ　消費者の合理的選択
18. 消費の理論Ⅱ　序数的効果理論と消費均衡
19. 生産の理論Ⅰ　供給と費用
20. 生産の理論Ⅱ　利潤極大の条件
21. 市場のメカニズムⅠ　市場価格の決定
22. 市場のメカニズムⅡ　市場の構造
23. 経済政策について
24. おわりに

科目名	日本国憲法（94年度以降） 法　　学（93年度以前）	担当者名	元山　　健

講義の目標		日本国憲法の基本原理（基本的人権の尊重、国民主権、平和主義）を理解すること。それを通じて、一人一人の人間がかけがいのない存在であること、そうした自律した個人が連帯しあって良き人生を過ごしていくために、お互いに合意した「人間性の実現のための規範」が憲法であることを理解すること。そして核時代の現代では、民主主義も人権も平和なればこそ生かされることを理解すること。外国語学部生のために、諸外国との比較を交えて講義します。また教職・公務員志望の人のことも考えて講義します。
講義概要		憲法をまとまった形で学習するのははじめてだという人が多いでしょうから、憲法とはどういう法かという話から始めます。次に憲法の歴史をお話しします。近代憲法の歴史と日本の憲法の歴史が中心です。 それ以降は平和主義、基本的人権、統治の制度と作用について、順に憲法の全体像をお話しします。一応憲法の全体をお話しすることを最重点にしています。 理論ばかりでなく、具体的事例をなるべくたくさん取り入れて、法律の勉強は苦手という人にもわかりやすくするように努めます。
使用教材	テキスト	元山健・倉持孝司編『現代憲法―日本とイギリス』（敬文堂刊）
	参考文献	三省堂他各社刊『小六法』・『ポケット六法』
評価方法		前期と後期のテストが中心ですが、積極的に質問をするなど学習態度の良い人は評価します。
受講者に対する要望など		昨年度は私語も少なく、PHSもなくて良かったのですが、他方で欠席がやや多かったように思います。授業から手に入る知恵や知識を大切に。

年間授業計画

1. 憲法とは何か。ここでは近代的意味の憲法とは何かを理解します。概論になります。
2. 憲法とは何か（その２）。ここでは近代的意味の憲法についての通説的理解の仕方（権力分立と人権保障、そして違憲審査）を批判的に吟味します。
3. 近代憲法の歴史。イギリス、フランス、アメリカ、ドイツを中心に。
4. 日本憲法史（その１）。明治憲法史。
5. 日本憲法史（その２）。日本国憲法50年。
6. 平和主義（その１）。平和主義の歴史と論理。
7. 平和主義（その２）。平和主義の現状と課題。
8. 基本的人権総論。
9. 個人の尊厳・幸福追求権・自己決定権。
10. 法の下の平等。
11. 精神的自由（その１）。総論と思想・良心の自由。
12. 精神的自由（その２）。信教の自由。
13. 精神的自由（その３）。表現の自由の原理。
14. 精神的自由（その４）。表現の自由の諸問題。
15. 精神的自由（その５）。学問の自由、教育の自由。
16. 社会・経済的権利（その１）。経済的自由と人間に値する生存と。
17. 社会・経済的権利（その２）。生存・労働・教育。
18. 人身の自由と刑事手続き。
19. 民主的統治の基礎理論。
20. 政治参加の権利と制度。
21. 国民主権と象徴天皇制。
22. 議会制民主主義と議院内閣制。
23. 裁判の制度と作用。
24. 地方自治。

科目名	社会学	担当者名	有吉広介

講義の目標	現代社会の諸問題は、18世紀の産業革命に端を発し、現在も進行している産業化、そしてこれに引き続いて起こる脱産業化、そしてこれらが引き起こした社会構造の変化とおおいに関係がある。本講義では、この視点から、現代のわれわれの日常生活にみられる諸変化と、そこにあるさまざまな社会問題とを考えてみたい。	
講義概要	豊かで、ゆとりある生活の実現とか、余暇の確保とかがテーマになる時代に、現実には、企業では能率主義的管理体制のもとにサービス残業が求められたり、過労死までもがみられる。その背景には、日本社会の特殊性もあるが、市場原理に結びついた産業化の論理が社会や文化に浸透し、これらを変化させてきた事情がある。核家族化、組織の官僚制化、都市化、流動社会化、学歴主義化、高齢化と少子化、福祉化などもそうした流れのなかに起こる。講義では、産業化が職業生活を含めてわれわれの日常生活のなかで多くの社会問題をどのように生みだしているのかを説明していく。講義の進行は、講義メモを配布して理解を深めることによる。	
使用教材	テキスト	プリントを渡す。
	参考文献	随時紹介。
評価方法	評価は、前・後期の定期試験期間中に各一回おこなう試験の成績による。	
受講者に対する要望など	講義に出席し、そこで要点を把握すること	

年間授業計画

1. 社会学の先駆者サン・シモンやオーギュスト・コントなどにおける社会学のテーマ
2. 古典的社会学者F・テンニース、G・ジンメル、E・デュルケム、M・ウエーバーなどにおける近代社会の理解
3. 古典的社会学者F・テンニース、G・ジンメル、E・デュルケム、M・ウエーバーなどにおける近代社会の理解
4. 古典的社会学者F・テンニース、G・ジンメル、E・デュルケム、M・ウエーバーなどにおける近代社会の理解
5. 社会学における産業社会および脱産業社会のとらえ方
6. 社会学における産業社会および脱産業社会のとらえ方
7. 現代の職業構造の分析
8. 雇用社会と職業的キャリア
9. 産業社会における知識の性格と教育
10. 日本の近代化、教育システム、および学歴社会
11. 社会的不平等の諸次元
12. 不平等の構造化
13. 社会移動の現実
14. 日本の階層社会と社会移動
15. 管理社会の中核としての近代官僚制
16. 近代的経営の社会構造
17. 日本的組織構造
18. 都市化と地域社会
19. 家族の定義・類型、そして核家族化・少子化
20. 家族のライフサイクルの変化
21. 高齢化社会の人口学的および社会学的分析
22. 高齢化社会における社会問題
23. 生活の質を考える。
24. まとめ

科目名	国際関係論（94年度以降） 時事問題研究（93年度以前）	担当者名	阿部純一

講義の目標	現代国際関係、とりわけわが国周辺の国際環境の分析を通じて、国際社会の動態を理解するための基礎知識を習得する。	
講義概要	日本の国際化が叫ばれ、国際関係論への関心が高まっていることは、改めて指摘するまでもない。しかし、わが国にとって最も重要であるはずの東アジアの国際環境の現状について関心をもつ人はそれほど多くないのが現実である。東アジアには、わが国をはじめ、アメリカ、中国さらにはロシア、インドといった大国の利害が交錯しており、この地域の帰趨が世界全体の安定、平和と繁栄に直結している。講義では、東アジア全体の歴史的展開を第2次大戦後からポスト冷戦の現在まで整理し、さらに地域各国の状況を個別に検討していく。	
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	阿部純一編著『中国—21世紀への課題』（人と文化社、1997） 小此木政夫・小島朋之編『東アジア危機の構図』（東洋経済、1997） その他、必要に応じて適宜紹介する。
評価方法	前期：ブックレポート 後期：論述筆記試験（前期レポート提出者のみ受験可）	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 前期講義の進め方についての説明
2. 国際関係論の成立契機と問題意識
3. 東アジアを中心とした現代国際関係史(1)——新中国成立と朝鮮戦争
4. 東アジアを中心とした現代国際関係史(2)——ベトナム戦争と米中接近
5. 東アジアを中心とした現代国際関係史(3)——中ソ和解とポスト冷戦
6. 朝鮮半島の過去と現在——北朝鮮(1)　金日成の権力掌握過程
7. 朝鮮半島の過去と現在——北朝鮮(2)　「主体」の国の政治文化
8. 朝鮮半島の過去と現在——韓国(1)　開発独裁の成果と限界
9. 朝鮮半島の過去と現在——韓国(2)　「儒教文化」と政権交代の現実
10. 中国周辺の国際主体——香港(1)　植民地・香港の成立と発展
11. 中国周辺の国際主体——香港(2)　香港「返還」をめぐる政治過程
12. （予備日）
13. 後期講義の進め方についての説明
14. 中国周辺の国際主体——台湾(1)　日本の「台湾」から国民党の「台湾」へ
15. 中国周辺の国際主体——台湾(2)　民主化の進展と「独立」めぐる展望
16. 21世紀の超大国・中国(1)——建国～「大躍進」政策
17. 21世紀の超大国・中国(2)——文化大革命
18. 21世紀の超大国・中国(3)——毛沢東の死と鄧小平の台頭
19. 21世紀の超大国・中国(4)——「改革・開放」路線の展開
20. 21世紀の超大国・中国(5)——江沢民の時代へ
21. 結集する東南アジア——ASEAN の成立と発展
22. アジア太平洋の時代——APEC の成立と発展
23. 講義全体のまとめ
24. （予備日）

科目名	文化人類学（94年度以降） 人類学（93年度以前）	担当者名	井上兼行

講義の目標		文化人類学は、文明社会から最も遠い位置にある未開社会の文化を、異文化として理解し、同時にそれを通してわれわれの文化についても理解を深めようとする学問である。学問の歴史、事例を通じてそのおおよそを知る。
講義概要		文化人類学形成の歴史を通して、未開社会の文化に対するこの学問の態度を明らかにし、次いでその独特な研究方法を述べる。そのあとは、いくつかの事例を通して異文化理解の仕方を示し、またそこからわれわれの文化をどのように考えることができるかを説明してゆく。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	随時紹介する。
評価方法		試験を考えているが、登録者が極端に少ない場合はレポートもありうる。
受講者に対する要望など		以下に示す日程はあくまでも暫定的なものである（順序はこの通りである）ことを念頭に置いてほしい。

年間授業計画

1. 序――どんな学問か。
2. 学問形成の歴史――（1）スペイン人のインディオ観①
3. 〃 ――（2） 〃 ②
4. 〃 ――（3）16C後半～18C後半の西欧人の未開人観
5. 〃 ――（4）18C後半～19C後半の西欧人の未開人観
6. 19C後半　文化人類学の誕生――（1）“文化”の概念①
7. 〃 ――（2）“文化”の概念②
8. 〃 ――（3）“進化”の概念
9. 19C末～20C初　現代の文化人類学へ
10. 研究方法としての“実地調査”――（1）
11. 〃 ――（2）
12. これ以降は事例研究になる。テーマは今のところ未定。ここまでの話の脈絡から決めてゆく。
13.
14.
15.
16.
17.
18.
19.
20.
21.
22.
23.
24.

科目名	社会科学特講A（教育法）1（94年度以降） 教育法（93年度以前）	担当者名	市　川　須美子

講義の目標		教育法学の基礎理論の理解の上に、現代的問題である1980年代以降の「子どもの人権裁判」を素材に、教育法の体系的理解を目標とする。
講義概要		前期は、教育法の基本概念である教育人権の概念と、教育における国家の役割を学ぶ。教育法形成に重要な影響を及ぼした基本判例を素材とする。 後期は、現在の教育法の焦点となっている「子どもの人権裁判」を体罰裁判、いじめ裁判、校則裁判、学校教育措置訴訟、教育情報裁判に分類して、論点と課題を検討する。
使用教材	テキスト	・『教育小六法』学陽書房
	参考文献	・神田修編『教育法と教育行政の理論』三省堂、1993年 ・兼子・神田編『ホーンブック教育法』北樹出版、1995年
評価方法		前期　レポート 後期　試験
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 教育法とは何か？　教育法の機能的三種別、教育条理
2. 戦後教育法制の基本的特徴　戦前法制と比較して
3. 教育法における教育人権と一般人権、教育権力
4. 教師の教育権(1)
5. 教師の教育権(2)
6. 親の教育権(1)
7. 親の教育権(2)
8. 子どもの学習権(1)
9. 子どもの学習権(2)
10. 国家の教育権と国民の教育の自由
11. 教育の地方自治　教育委員会準公選制
12. 前期まとめ
13. 子どもの人権裁判総説
14. 体罰裁判(1)　特徴と論点
15. 体罰裁判(2)　体罰判例の展開と動向
16. いじめ裁判(1)　いわきいじめ自殺事件、中野富士見中事件
17. いじめ裁判(2)　その後のいじめ判例
18. 校則裁判(1)　二つの丸刈り訴訟
19. 校則裁判(2)　バイク退学事件・パーマ退学事件
20. 学校教育措置訴訟(1)　特徴と論点、内申書裁判
21. 学校教育措置訴訟(2)　エホバの証人生徒退学事件
22. 学校教育措置訴訟(3)　障害生徒入学不許可事件
23. 教育情報裁判　町田いじめ作文開示請求訴訟
24. まとめ　子どもの権利条約と教育法

科目名	社会科学特殊講義A(近代市民社会像の形成と批判)2(94年度以降) 社会思想史(93年度以前)	担当者名	市川達人

講義の目標	私たちの政治や経済に関する見方、考え方を支配している近代的社会観の生成を、その誕生の時点に遡って理解することを目的とする。	
講義概要	西欧近代の社会認識の発展史がテーマである。ルネッサンスから始めて、宗教改革、イギリス市民革命、フランス啓蒙期を経由し19世紀の社会主義思想までをたどることとなる。 近代という時代への懐疑が深まっている今、その近代を西欧の社会理論はどのように理解してきたのかを明らかにすることが必要である。それぞれの時代を代表する思想家に焦点をしぼりながら、自然権、所有、権力、平等、自由、労働などの概念に光を当てていく。揺らん期の経済学や政治学の思想的哲学的基礎を明らかにすることとなろう。	
使用教材	テキスト	渋谷一郎編『社会思想の歴史』八千代出版社
	参考文献	講義で適宜指示
評価方法	後期の一括試験にて評価。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 年間予定。講義の目的と課題。講師の問題意識
2. 思想史の方法。社会とは？。社会像の歴史的類型などについて。
3. 近代市民社会とは（西欧的社会観の原型と展開）
4. ルネッサンスと都市
5. マキャベリと『君主論』
6. ユートピア思想とは
7. トマス・モアと『ユートピア』
8. 中世の教会改革運動、千年王国説、後期スコラ学派
9. ルターの改革運動と神学
10. ルターの経済思想。
11. カルヴィニズムと近代化
12. モマルコマキとボダン
13. 自然法思想の歴史
14. ホッブズの人間観と自然権思想
15. ホッブズの国家論
16. ロックの市民社会論
17. ロックの所有権理論とリベラリズム
18. フランスの啓蒙思想（ヴォルテール、ディドロ、モンテスキュー）
19. ルソーの啓蒙批判と社会批判
20. アダム・スミスと経済的自由主義
21. 社会主義思想の諸潮流
22. マルクスの思想(1)
23. マルクスの思想(2)
24. 一年間のまとめ

科目名	社会科学特殊講義A（文化人類学特殊講義）3（94年度以降） 文化人類学（93年度以前）	担当者名	井上兼行

講義の目標		“未開社会の宗教”というと、一般に“迷信”及びそれに基いた行為とされ、考察の余地などないものと思われがちである。しかしここにはかれらの世界についての考え方が表明されている。したがって、われわれとは異なった人々の世界観を見ることができ、ひいてはわれわれの世界観を意識化できる面もある。こうした視点への糸口をつくりたい。
講義概要		ここでは、神話や昔話のような言語によって世界観が表明されているもの、また儀礼、祭りといった、行動からかれらの世界の見方を考えていかなければならないものを取り上げる。いくつかのテーマを選んで順次話をしてゆく。年間講義予定については第一回の講義においてその大枠を述べる。
使用教材	テキスト	なし。
	参考文献	随時紹介する。
評価方法		登録者の数による。
受講者に対する要望など		平成6年度（1994年度）以降入学の者は“文化人類学”の単位を取っていることが望ましい。私自身のやり方の問題もあるかもしれないが、全く知識のない1年生には、わからず、興味ももてずやめてしまうものが数多く出ている。

科目名	社会科学特講A(広告論)4(94年度以降) マス・コミュニケーション論特殊講義A (93年度以前)	担当者名	梶山　皓

講義の目標	現代社会における広告の機能や役割を明らかにします。また企業の広告活動を、マーケティングとコミュニケーションの視点から解説します。	
講義概要	1. 企業や団体が広告をなぜ行うか、どのように広告を計画し実施するかを学びます。 2. 社会風俗や価値観、倫理・法律の面から、現代の広告現象を考えます。 3. マスコミ、メディア、広告業界の仕組みや動向を取り上げます。 4. マーケティング活動やコミュニケーション過程の原理を明らかにします。 5. TV・CMを通じて、日米のビジネス観やコミュニケーションの違いを探ります。	
使用教材	テキスト	梶山　皓著『広告入門』日経文庫。
	参考文献	*八巻　俊雄・梶山　皓『広告読本』東洋経済新報社。 *岸井　保『直撃する広告』電通 *『広告に携わる人の総合講座』日経広告研究所。 *W. Wells : Advertising, Principles and Practice, Prentice-Hall, 1995 *S. W. Dunn : Advertising, Its Role in Modern Marketing, Dryden Press, 1994.
評価方法	*試験は通常前・後期に行いますが、後期だけの年もあります。問題は5題で、講義内容と教科書から出題します。試験時の「持ち込み」はありません。合格率は例年70%前後です。	
受講者に対する要望など	できるだけ3学年で履修して下さい。	

年間授業計画	1. 広告をなぜ学ぶか（Introduction）広告を学ぶと、社会の近未来が見えてくる。また物事をポジティブにとらえる習慣が身に付く。 2. 広告の定義（Ad.Definition）：広告という言葉の語源は、古フランス語やラテン語で「振り向かける」「注意を引く」という意味である。 3. 広告の定義（Ad.Definition）：広告という言葉は、しばしばPR、広報、宣伝、プロモーションなどと混同して間違った使われ方をしている。 4. 広告の機能（Role of Ad.）：広告には情報を伝える機能がある。このほかに人を説得する機能、広告主と受け手の関係を強化する機能がある。 5. 広告の種類（Ad.Classification）：広告を代表するのは、消費財広告、ビジネス広告のように商業目的に使われる広告である。 6. 広告の種類（Ad.Classfication）：広告には、公共広告、意見広告、政治広告のように、市民の啓蒙や世論の喚起に使われるものがある。 7. 広告主（Advertiders）：アメリカの広告費は邦貨で年間約15兆円で、世界の約半分を一国で占める。日本は世界第2位で約6兆円である。 8. 広告主（Advertisers）：広告主は、広告活動を効果的に行うために、広告計画を策定して実施する。また様々な組織を編成する。 9. 広告会社（Ad.Agency）：広告会社は、広告コミュニケーションを企画し実施する専門家集団である。日米では広告ビジネスの進め方が異なる。 10. 広告会社（Ad.Agency）：広告会社には色々な形態や組織がある。広告会社の収入源の多くは、媒体手数料という古い習慣に基づいている。 11. 広告メディア（Ad.Media）：広告メディアには、マスメディアから看板やチラシまで色々な種類があり、広く活用されている。 12. 広告メディア（Ad.Media）：マルチメディア時代を迎えて、衛星放送、双方向CATV、インターネットなどの新しいメディアが広告界を揺さぶっている。 13. マーケティングの基本理念（Marketing Principles）：マーケティングは消費者志向の概念である。最近は環境問題などの新しい価値観の影響を受けている。 14. 戦略企業計画（Strategic Planning）：戦略計画はアメリカで発達した経営理論で、マーケティングをサブシステムとする企業経営の全体計画である。 15. マーケティング・ミクス（Marketing Mix）：企業は、製品開発、価格の設定、流通チャネルの選択、プロモーションの相乗効果によって企業間競争を進める。 16. プロモーション・ミクス（Promotion Mix）：製品の販売は、広告、セールスマン、SP（セールスプロモーション）、PRなどの力を合体化させて行う。 17. 広告コミュニケーション（Communication）：広告はマスコミを手段とした社会的なコミュニケーションであり、受け手に様々な心理的影響を与える。 18. 広告コミュニケーション（Communication）：消費者には、マスコミによる新しい情報を受け入れる人と、従来の習慣に固執する人がいる。 19. DAGMARの理論（DAGMAR）：広告効果は売上高にではなくコミュニケーション効果に置くべきだという考え方があり、広告理論に大きな影響を与えている。 20. 広告階層モデル（Ad.Hierarchy Model）：人々は製品の属性を調べてから買うのか、それとも買った後に調べるのか、衝動買いはなぜ起きるのかなどを考える。 21. 広告計画（Ad.Planning）：広告活動は、広告目標の設定、予算策定、広告表現の決定、媒体選択、効果測定という一連の過程を経て進める。 22. 広告計画（Ad.Planning）：広告計画の中では、広告表現の方針を決めることと、広告を運ぶメディアを選ぶことがとくに重要である。 23. 広告規制（Ad.Regulation）：広告は、倫理や公序良俗の面と法律の両面から規制を受けている。規制の内容は時代によって、国によって異なっている。 24. 広告の将来（Ad.Future）：広告はどのような方向に進むのか、これからの広告ビジネスや広告人に何が求められるのかを考える。

科目名	社会科学特殊講義A(マス・コミュニケーション論)5(94年度以降) マス・コミュニケーション論(93年度以前)	担当者名	佐々木　輝　美

講義の目標		マス・コミュニケーションに関する基本用語、概念などを説明することができ、且つ、それらの用語を使って具体的なマス・コミュニケーション現象を分析できるようになることを目標とする。
講義概要		本講義への導入として、先ずコミュニケーションの基礎について説明する。次の数週間で、マス・コミュニケーションのモデル及び効果について解説し、マス・コミュニケーションの全体像を捉えてもらう。その後、前期の後半はマスコミと教育の問題を、そして後期は、マス・コミュニケーションの「影響研究」を中心に講義を行う予定。影響研究については、特に「メディア暴力の視聴者への影響」を中心テーマとして扱う。
使用教材	テキスト	(前期) プリント (後期) 佐々木輝美『メディアと暴力』勁草書房、1996
	参考文献	・岡崎篤郎他編著『マス・コミュニケーション効果研究の展開』北樹出版、1992 ・H.J.アイゼンク他著　岩脇三良訳　『性・暴力・メディア』新曜社、1982
評価方法		定期試験、レポート、平常点の総合評価を行う。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	（前期） 1. マス・コミュニケーションとは 2. コミュニケーションについての基礎知識 (1) —プロセスの概念について— 3. コミュニケーションについての基礎知識 (2) —意味はどこに存在するか？— 4. コミュニケーションについての基礎知識 (3) —メディア接触について— 5. マス・コミュニケーションのモデルについて (1) —モデルの長所と短所— 6. マス・コミュニケーションのモデルについて (2) —マス・コミュニケーションの要素— 7. ビデオ視聴＆解説　（レポート課題発表） （レポートは1000字程度にまとめる。） 8. マスコミ効果の概念について (1) —効果とは— 9. マスコミ効果の概念について (2) —順機能と逆機能—　（レポート提出締切り） 10. マス・コミュニケーションと教育 (1) 11. マス・コミュニケーションと教育 (2) 12. 前期のまとめ （後期） 1. マスコミの影響研究について (1) —弾丸理論— 2. マスコミの影響研究について (2) —限定効果モデル— 3. マスコミの影響研究について (3) —適度効果モデルから強力効果モデルへ— 4. メディア暴力研究について (1) —研究の背景— 5. メディア暴力研究について (2) —カタルシス理論— 6. メディア暴力研究について (3) —観察学習理論— 7. メディア暴力研究について (4) —脱感作理論— 8. メディア暴力研究について (5) —カルティベーション理論— 9. ビデオ視聴＆解説　（レポート課題発表） （レポートは1000字程度にまとめる。） 10. メディア暴力研究について (6) —４理論のまとめ（暴力番組の類型化）— 11. メディア暴力研究について (7)　（レポート提出締切り） —メディア暴力への対応— 12. 後期のまとめ

科目名	社会科学特講A（日本経済論）6（94年度以降） 日本経済論（93年度以前）	担当者名	波形昭一

講義の目標		「日本経済論」と銘打った書物は巷に氾濫しているが、学生諸君に推奨できるものは意外と少ない。もちろん、良書がないというのではない。だが、それらの多くは概して現状分析の専門書であり、難解すぎるからである。「日本経済論」としては当然それでよいのだろうが、どうも学生諸君には不向きのようだ。若い諸君は未来志向が強い反面、歴史知識に乏しいためか、現状分析の意味そのものがよく理解できないでいるように見受けられる。こうした観点から、本講義では、日本経済の歴史と現状の両者をバランスよく「総合」することを目標としたい。
講義概要		〔前期〕では、戦前における日本経済のシステムとその崩壊過程、および戦後復興から高度経済成長への発展過程を論ずる。 〔後期〕では、ドル・ショック、オイル・ショックを契機に高度経済成長のシステムが崩れ、新たなシステム再構築を迫られる現代日本経済の諸問題を論ずる。 詳細については、次頁の年間講義予定を参照のこと。
使用教材	テキスト	統計資料等のプリントを配布して授業を進める。
	参考文献	中村隆英著『昭和経済史』岩波書店、1986年 竹内宏著『昭和経済史』筑摩書房、1988年 隆旗節雄著『日本経済の構造と分析』社会評令社、1993年 柴垣和夫著『知識人の資格としての経済学』大蔵省印刷局、1995年 佐々木隆爾編『昭和史の事典』東京堂出版、1995年
評価方法		前期・後期とも試験をおこない、総合点で評価する。したがって、いずれかの試験を受け損じた場合、単位の修得はほとんど不可能であることを心得ておいてほしい。
受講者に対する要望など		講義中の「私語」と「飲食」を固く禁ずる。大学は歌舞伎座や新橋演舞場ではない。

年間授業計画	1. 日本経済の近代化とその構造(1)　産業・貿易構造 2. 日本経済の近代化とその構造(2)　金本位制の成立 3. 恐慌時代の到来、そして金本位制崩壊へ 4. 井上財政から高橋財政への転換 5. 戦時統制経済とその実態 6. 戦後経済復興(1)　4大経済改革 7. 戦後経済復興(2)　ドッジ・ラインとシャウプ勧告 8. 高度成長時代の到来とその構造 9. 高度成長の精神的土台 10. 高度成長の時代背景―大衆消費社会との関連で― 11. ドル・ショックとオイル・ショック―高度成長の終焉― 12. 日本経済の構造転換 13. レーガノミックスとプラザ合意 14. バブル景気 15. バブル崩壊、不況の長期化 16. 「複合不況」の時代 17. 日本経済の諸問題(1)　対外経済摩擦 18. 日本経済の諸問題(2)　産業空洞化 19. 日本経済の諸問題(3)　老齢化・少子化社会 20. 日本経済の諸問題(4)　行財政改革の難航 21. 日本経済の諸問題(5)　金融システムの硬直化 22. 日本経済の諸問題(6)　「法人資本主義論」 23. 日本経済の諸問題(7)　「1940年体制論」 24. 大競争時代の到来

科目名	社会科学特殊講義A（経済理論の基礎―マクロ理論を中心として）7（94年度以降） 経済原論（93年度以前）	担当者名	西村允克

講義の目標		市場経済を理解するための理論的枠組みを学習することによって、現実の経済問題を正しく理解する力を養うことが、この講義の目的である。経済現象は孤立してあるものではなく、他の経済現象と複雑な複合関係にあることをまず理解してもらいたい。講義では、経済現象を１つ１つ取り上げていくが、それは経済現象間の複雑な複合関係を解くための１つの方法であって、必らずそれは結合させて次の段階へ進むから、絶えず講義で学習した内容を復修しながら学習しなければならない。
講義概要		現実経済は極めて複雑な組織である。複雑なシステムを理解するためには、システムをそれを構成する基本的要素（供給者と需要者、家計、企業、政府）と基本的要素間の経済関係によって、理論的分析が可能となるモデルに再構築しなければならない。前期では、経済学の最も基礎的なミクロモデルとマクロモデルを学習し、経済理論の基礎的な考え方を理解し、後期の学習の基礎をかためる。前期の前半は経済分析ために必要な基礎知識を学び、後半のモデル分析理解の土台となる学習であるから、常に先に進んでももどって再学習しなければならない。後期は前期のモデル分析をヨリ現実に近いものに拡張し、さまざまな現実経済問題の理解に進む。
使用教材	テキスト	・中谷　巌　著　『入門マクロ経済学』日本評論社
	参考文献	・幸村千佳良著　『マクロ経済学事始』　多賀出版 ・R.T.ギル著　久保、長谷川訳　『マクロ経済学入門』上下　東洋経済新報社 ・藤野正三郎　著　『価格理論』　東洋経済新報社 ・スティグラー著　『価格の理論』　有斐閣 ・倉沢資成　『入門価格理論』　日本評論社
評価方法		前期と後期の定期試験の結果による。試験問題についての採点基準は講義において注意した点をよく理解して記述されているかである。
受講者に対する要望など		日々の新聞の経済面の見出しに注意し、経済の動きについての常識的理解を深める努力をしてほしい。講義は常に現実の経済の動きに対応している。

年間授業計画	1. 経済学を学ぶための基礎（Ⅰ）　基礎用語　経済主体、経済資源　経済活動　財とサービス　実物資産と金融資産　価格 2. 経済学を学ぶための基礎（Ⅱ）　分析ツール　関数と曲線　図の読み方　限界と平均　関数の変化と曲線のシフト　変数（独立変数と従属変数） 3. 経済学を学ぶための基礎（Ⅲ）　市場モデルの作り方、市場均衡と市場不均衡　短期と長期（経済与件） 4. 国民経済計算（Ⅰ）　付加価値額　国内総生産　国内総支出　グロスとネット　国民１人当り国内総生産 5. 国民経済計算（Ⅱ）　物価指数（デフレーター）　名目値と実質値　経済成長率 6. 生産関数と総費用関数　産出量と投入量　限界生産力　完全雇用と不完全雇用　等生産量曲線　総費用関数　固定費用と可変費用　限界費用と可変費用 7. 消費関数　限界消費性向と限界貯蓄性向　平均消費性向と平均貯蓄性向 8. 価格決定理論（Ⅰ）　需要関数と供給関数　市場均衡の安定分析 9. 価格決定理論（Ⅱ）　なぜ価格は変化するのか 10. 国民所得決定理論（Ⅰ）　簡単なモデル　貿易のない場合の国民所得決定理論　財政政策の国民所得に及ぼす効果 11. 国民所得決定理論（Ⅱ）　貿易を含む場合の国民所得決定理論 12. 前期のまとめ 13. 貨幣市場の問題　マネーサプライとハイパワードマネー　金融政策（公定割引歩合　公開市場操作、予金準備率）　貨幣数量説 14. 貨幣需要について　取引動機による貨幣需要と投機的動機による貨幣需要 15. IS＝LM分析（Ⅰ）——国民所得と利子率の同時決定理論IS曲線とLM曲線の導出とその意味 16. IS＝LM分析（Ⅱ）　財政政策は国民所得と利子率をどのように変化させるか　金融政策は国民所得と利子子利子率をどのように変化させるか 17. IS＝LM分析（Ⅲ）　安定分析、現実経済への応用 18. 景気変動（Ⅰ）　キッチン波動　ジュグラー波動　コンドラチェフ波動　技術革新　独立投資と従属投資 19. 景気変動（Ⅱ）　資本稼動率　バブルと平成不況 20. 経済成長論（Ⅰ）（基本概念）　投資の生産力効果　潜在的成長率と現実成長率 21. 経済成長論（Ⅱ）　なぜ日本は戦後このような高度成長を実現したのか、基本概念を用いながら説明する。 22. 国際収支　経常収支（貿易収支　貿易外収支　移転収支）と資本収支、変動相場制　交易条件 23. インフレーション　フイリップス曲線 24. まとめと平成８年の日本経済の諸問題

科目名	社会科学特講A(国際貿易と国際収支調整) 8 (94年度以降) 国際経済論 (93年度以前)	担当者名	益山光央

講義の目標		国際経済を分析する際に必要な最低限必要と思われる諸概念の修得を目標とする。
講義概要		国際経済学の基礎的な理論を中心に講義する。前期は貿易理論、後期は開放経済下の所得決定メカニズムを中心テーマとする。今日、世界で問題となっている具体的事項については直接は取り扱わない。
使用教材	テキスト	教科書 仙頭佳樹ほか、『あなたにもわかる国際経済学』多願出版、1991
	参考文献	渡辺太郎『国際経済（第四版)』春秋社、1990 Peter B. Kenen; *The International Economy (Third Edition),* Cambridge University Press, 1994
評価方法		
受講者に対する要望など		まじめに勉強してほしい。

年間授業計画	1. 講義のアウトライン 2. リカード的奉易理論Ⅰ 3. リカード的貿易理論Ⅱ 4. ヘクシャーオリーン定理Ⅰ 5. ヘクシャーオリーン定理Ⅱ 6. リプチンスキー定理 7. ストルパーサミュエルソン定理 8. 関税Ⅰ 9. 関税Ⅱ 10. 国際生産要素移動Ⅰ 11. 国際生産要素移動Ⅱ 12. まとめ 13. GNP と GDP 14. 固定収支表 15. 固定相場制下の所得決定Ⅰ 16. 固定相場制下の所得決定Ⅱ 17. 変動相場制下の所得決定Ⅰ 18. 固変動場制下の所得決定Ⅱ 19. 開放経済上の金融政策Ⅰ 20. 開放経済上の金融政策Ⅱ 21. 開放経済上の財政政策Ⅰ 22. 開放経済上の財政政策Ⅱ 23. ポリシーミックス 24. まとめ

科目名	社会科学特殊講義A（民法概論）9（94年度以降） 民法概論（93年度以前）	担当者名	松　嶋　由紀子

講義の目標	日常的な生活をめぐる社会現象に対し、客観的な評価と対応ができるように、民法学入門の研究を通し、リーガルマインドを養成することを目標とする。	
講義概要	我々の日常生活を規律する法としての民法（財産法と家族法）の仕組みとその実際を、裁判例や実例をあげながら説明する。今後の社会生活の中で、なるべく実際に役立つと思われる事項を、平易に講義し、一緒に考えたい。	
使用教材	テキスト	追って指定。
	参考文献	
評価方法	試験または研究レポート。	
受講者に対する要望など	意欲のある学生を希望する。	

年間授業計画

1. 市民法としての民法の基本原理と体系
2. 市民紛争と裁判機関（日本の裁判制度、特に家庭裁判所と調停）
3. 民法の歴史
4. 民法の解釈と適用をめぐって
5. 民法総則
6. 物をめぐる権利
7. 〃
8. 契約をめぐる権利
9. 〃
10. 不法行為と損害賠償
11. 現代社会と市民法の政策について（特別法関連）
12. 親族法総論（家族と家族法をめぐる変遷）
13. 氏と戸籍
14. 婚姻
15. 離婚
16. 親子
17. 扶養（特に高齢者の扶養と介護）
18. 相続法総論
19. 相続人と相続分・相続財産
20. 遺産分割の手続きと実際
21. 遺言
22. 遺留分
23. 現代社会と家族法の問題点
24. 家族法改正の動き（成年後見法の生成を含む）

科目名	社会科学特殊講義A(社会思想史)10(94年度以降) 社会思想史（93年度以前）	担当者名	松丸壽雄

講義の目標		歴史観、社会観を自らの判断のもとで形成することができるように、批判的なものの観方を得ること。
講義概要		それぞれの社会には、それぞれの歴史的状況、習慣などにより、異なったものの考え方が生じうる。それは社会をどう考えるかという思想までに展開することもあるし、それぞれの時代の単なる傾向に終わる場合もある。しかし、それも社会思想の一つと考えられる。本講義では、「社会思想」を上のような広い意味に捉えて、特に日本人の社会に対する考え方と、主に西洋人の社会に対する考え方を比較しながら明らかにしたい。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	講義中に指示
評価方法		受講者数が多い場合には、筆記試験も考えられる。受講者数が相応であれば、最低年二回のレポートと授業への貢献度（例えばディスカッションへの参加）により評価。
受講者に対する要望など		例年他人のレポートを写すだけで、あるいはただ調べただけのものをレポートにする人が後を絶たない。自分でものを考えようと努力する人が受講することを望む。

年間授業計画	
	1. 講義の概要説明 2. 受講者数の調整 3. 西洋中世の時代的状況 4. 同　上 5. 宗教裁判としての異端審問 6. 同　上 7. 魔女裁判と社会的背景 8. 同　上 9. 魔女裁判に見られる社会観、世界観 10. 中世から近世における、個人の「自我」観の変遷 11. できればディスカッション 12. 前期の総括 13. 錬金術の歴史的背景 14. 錬金術師たちの世界観、社会観 15. 錬金術の思想と人間の位置づけ 16. 芸術作品から窺える世界観、自然観 17. 芸術作品から分析される個人の「自我」観 18. 江戸時代から明治時代に於ける世界観、社会観 19. 江戸時代から明治時代における個人の「自我」観 20. 現代日本における世界観、社会観 21. 同　上 22. 現代日本における個人の「自我」観 23. できればディスカッション 24. 年間の総括

科目名	社会科学特殊講義A(集団と文化の社会心理学) 11 (94年度以降) 社会心理学 (93年度以前)	担当者名	三本　茂

講義の目標		一集団と文化の社会心理学一人間は、他の動物に比べて集団への依存性が極めて高い。集団の成員として生きる人間の「社会的動物」としての行動の特色を考察する。 集団の構造とその機能、および集団成員の行動様式としての文化を取り上げ、文化によって形成される集団的パーソナリティの特徴について考察する。
講義概要		まず社会集団の特質とその形成過程を取り上げ、次いで集団内の行動様式としての文化の特性について考察する。 次に、特定の文化圏で生活する人々に認められるパーソナリティの共通性を「集団的パーソナリティ」として考察する。 事例として、ネパールの高地民族であるシェルパ族の生活の様子や「シェルパ気質」を紹介したい。
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	途中でその都度指示する。
評価方法		前期に提出するレポートと後期の筆記試験の結果を併せて評価する。
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 集団の形成過程
2. 集団参加の動機
3. 集団の機能
4. 〃
5. 集団規範と同調行動
6. 集団内のコミュニケーション
7. リーダーシップ
8. 文化の特性
9. 文化とパーソナリティ
10. 〃
11. 〃
12. 〃
13. 社会化の過程
14. 〃
15. 集団的パーソナリティ
16. 〃
17. 〃
18. 〃
19. 事例研究
20. 〃
21. 〃
22. 〃
23.
24.

科目名	社会科学特殊講義A(ジャーナリズム)12(94年度以降) マスコミュニケーション論 (93年度以前)	担当者名	森 永 京 一

講義の目標	マスコミの本質・機能などについて考えるとともに、内外マスコミの当面する諸問題などについての理解を深めるのが目的。	
講義概要	講義の時点での最新のニュースや問題を積極的に採り上げていきたいと考えています。従って講義予定表には必ずしも準拠しません。	
使用教材	テキスト	
	参考文献	
評価方法	レポート	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. ニュースとは何か。その本質
3. マスコミの成立と変遷
4. 日本のマスコミの特質と歴史
5. 海外のマスコミ
6. 映像メディアと印刷メディア
7. 記者クラブの持つ意味　その功罪
8. 報道の自由　「知る権利」
9. マスコミの責任と倫理
10. 報道の客観性　「やらせ」の問題
11. マイノリティとマスコミ
12. 「差別」
13. 新聞の制作　取材と編集
14. 検閲と圧力団体
15. 自主規制はどこまで許されるか
16. プライバシーはどこまで守られるべきか
17. 暴力・セックス報道の限界
18. ヒーロー、ヒロイン、アイドル
19. 皇室報道
20. 選挙報道
21. 出版、広告、映画
22. マルチメディア
23. ビジネスとしてのマスコミ
24. マスコミの直面する諸問題

科目名	社会科学特殊講義A（世論調査）13（94年度以降） 世論調査（93年度以前）	担当者名	森 永 京 一

講義の目標	世論調査の理論や沿革、問題点についての理解を深めるとともに、実技の習熟を目指します。	
講義概要	受講学生数が多い場合は、どうしても講義中心になりがちですが、なるべく実際に自分の頭で考え、体験できるようにしたいと考えています。	
使用教材	テキスト	
	参考文献	
評価方法		
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 世論調査の基本的な考え方
3. 沿革と問題点
4. 選挙と世論調査
5. 調査の進め方
6. 調査の実施の方法　その種類
7. 調査の実施の方法　その長所・短所
8. 質問の作り方
9. 質問の形式
10. 調査票の作成(1)
11. 調査票の作成(2)
12. 調査票の作成(3)
13. 標本抽出の方法
14. 乱数表
15. 無作為抽出
16. 等間隔サンプリング、２段サンプリング
17. 層別サンプリング
18. 多段サンプリング
19. 調査の集計
20. 調査の集計（続）
21. 調査の誤差と信頼度
22. 調査の読み方
23. 調査の処理
24. まとめ

科目名	社会科学特殊講義A（貿易実務）14（94年度以降） 貿易実務（93年度以前）	担当者名	山崎静光

講義の目標		貿易の実務を引合の段階からクレームの解決まで時間的な順序に従って説明し、将来貿易に従事しない学生には一般的な知識を与え、貿易に従事することを志す学生には本格的な企業内研修への準備とする。
講義概要		取引の前段階として一般的な事項、例えば打切りと代理商商い、買越・売越、現物と先物等の知識を与え、以後引合、契約、受渡、支払、入金の段階を追ってそこに出てくる用語・取引技術を説明する。その際絶えず既知の事実に立ち帰って全体の連関を把ませ、同じ用語の理解が段階を進むにつれて深まってくるようにする。さらに簿記・会計、法律、経済学、歴史、言語等の隣接科学にも触れて興味を起させることを図る。
使用教材	テキスト	『貿易実務基礎講座』（物産研修センター）
	参考文献	・浜谷源蔵『貿易実務』（同文館） ・東京銀行『貿易と信用状』（実業之日本社） ・山崎静光『輸出入手続ハンドブック』（中央経済社）
評価方法		学年試験の成績による。 中間試験は行うが学年試験を受けなかった者には単位を与えない。
受講者に対する要望など		授業中に理解することを心掛け、質問・教師に対する批判を活発にし、双方向の通信のあるクラスにするのに寄与して下さい。

年間授業計画

1. 貿易取引の前段階
2. ——〃——
3. Ⅰ. 引合段階——値段を出す——インコタームズ
4. 運賃——海上輸送一般
5. ——〃——
6. 海上保険
7. 採算の立て方
8. 与信——荷為替
9. ——〃——
10. 信用状
11. ——〃——
12. D／P，D／A取引
13. カントリーリスク——貿易制限の諸形態
14. オファー
15. オファー条件
16. Ⅱ. 契約段階——契約書
17. 契約履行の管理
18. 為替
19. ——〃——
20. Ⅲ. 受渡段階——船積書類
21. ——〃——
22. 通関
23. 輸入
24. Ⅳ. 支払段階——経済協力
    Ⅴ. クレーム

科目名	社会科学特殊講義A（現代国際社会の統合と分裂）15（94年度以降） 国際関係論特殊講義A（93年度以前）	担当者名	若林　広

講義の目標	本講では、冷戦後の現代世界が直面する複雑な種々の問題（地域紛争、南北格差、先進国間摩擦、環境破壊、国連の強化、経済統合の進展等）の理解を目標に、その根本には、近代国民国家とは何かとの理解が必須と考え、国家論の理論的・歴史的理解の後、個々の地域に関しても、その歴史的側面に常に言及しながら、検討を加えていく。	
講義概要	冷戦後の現代世界は、核の脅威こそ大幅に減じたものの、旧ソ連地域、ユーゴ等、世界各地で発生する地域紛争や、アルジェリア等におけるイスラム原理主義運動といった文明的・宗教的対立の問題、さらには、南北格差、先進国間貿易・経済摩擦、地球環境破壊等、多くの経済問題をいまだ抱えている。世界には現在、このように世界を分裂的、破壊的方向へ導く力が存在する一方、安全保障、環境問題等における国連中心主義への移行、WTOの発足が象徴する国際貿易体制の強化、さらには、EU等の統合の進展といった、全地球及び地域レベルでの種々の問題解決への模索もなされている。本講では、これら諸問題の根本には、国民国家に対する種々の方向からの挑戦があると考え、まず、国民国家概念の理論的側面に検討を加え、現代世界の動きを理解するうえで重要な、これら分裂・破壊的、及び統合・協力的な動きを、諸地域の例に即して検討を加えていく。講義の性格上、以下にあげる年間予定に加え、その時々のアップ・トゥ・デートな問題も積極的に取り上げて行く。また受講者数にもよるが、可能であれば、後期はゼミ形式で種々の雑誌論文を読んで行きたい。	
使用教材	テキスト	未定
	参考文献	細谷千博・監修『国際政治の21世紀像』有信堂高文社　1996年
評価方法	受講者数多数の場合は、学年度末の試験になるか、又は各自の関心のあるテーマに関する自由研究レポートの提出による場合もある。またゼミ形式となった場合は、各自の発表、及び日常の授業中の議論への参加度による。	
受講者に対する要望など	授業の理解と積極的な参加のため、新聞の国際面と経済面には、常に目を通しておく事。	

年間授業計画

1. 序論　国際関係論とは何か。国民国家とはなにか。
2. 第二次大戦後の国際体系(1)
3. 第二次大戦後の国際体系(2)
4. グローバル・イシュー(1)　核兵器―軍拡競争から軍縮へ
5. グローバル・イシュー(2)　国際貿易体制と南北問題(1)
6. グローバル・イシュー(3)　国際貿易体制と南北問題(2)
7. グローバル・イシュー(4)　地球環境と人口
8. 西ヨーロッパ(1)　欧州連合の統合(1)
9. 西ヨーロッパ(2)　欧州連合の統合(2)
10. 西ヨーロッパ(3)　ベルギー、フランス等における分権化(1)
11. 西ヨーロッパ(4)　ベルギー、フランス等における分権化(2)
12. 旧ソ連・東欧地域(1)　ユーゴ、ソ連の分裂(1)
13. 旧ソ連・東欧地域(2)　ユーゴ、ソ連の分裂(2)
14. アジア(1)　ＡＰＥＣ・ＡＳＥＡＮの進展(1)
15. アジア(2)　ＡＰＥＣ・ＡＳＥＡＮの進展(2)
16. 北アメリカ(1)　日米経済摩擦
17. 北アメリカ(2)　ＮＡＦＴＡ
18. ラテン・アメリカ(1)　経済リージョナリズム(1)
19. ラテン・アメリカ(2)　経済リージョナリズム(2)
20. 中東(1)　イスラエル・パレスチナ問題
21. 中東(2)　多極共存型民主主義とレバノン問題
22. アフリカ(1)　アフリカの独立とパン・アフリカニズム
23. 予備
24. まとめ

科目名	数　　学（94年度以降） 数学概論（93年度以前）	担当者名	福井尚生

講義の目標		数学は、一見複雑に見えるいくつかの現象の奥底に流れる本質的な法則を抽出し、その法則を客観的に処理し、普遍的なモデルを作る際に威力を発揮します。 物騒な話ですが、『殺人事件の被害者の死体が、ある夜11時に発見された。警察医が呼ばれて午後11時30分に到着し、直ちに体温を計ったところ34.8℃であった。１時間後にもう一度計ってみたら34.1℃で、室温は21.1℃で一定であった。』微分方程式はこれ等のデータから死亡時刻を推定します。 現象を数学的に解析することを念頭に、目標は「使える数学」です。
講義概要		1.簡単な関数と逆関数 2.微分（関数の変化のようす）：１変数関数の微分 ：多変数関数の微分 3.積分（微分の逆演算、微分方程式への助走として）：不定積分 4.微分方程式（数学モデル作り）：変数分離形 ：１階線形微分方程式 ：２階線形微分方程式
使用教材	テキスト	プリント
	参考文献	『微分積分概論』南部徳盛著、近代科学社
評価方法		1.演習（授業の際に配布する用紙にその日の授業内容に関する演習をし、用紙を提出。） 2.レポート（前期・夏休み及び後期・冬休みに問題を数題解き、提出。）
受講者に対する要望など		『大学は学問を通じての人間形成の場である』を肝に銘じ、講義の多少のしんどさにへこたれず、十分に予習・復習をしながら授業に出席し、真面目に主体的に取組んで下さい。

科目名	物理学	担当者名	東　孝博

講義の目標	現代物理学の基礎である相対性理論と量子力学を通して、人間の自然に対する認識の方法について考える。とくに、科学と非科学の違いに留意し、科学の果たす役割と限界についても考えていきたい。	
講義概要	今年度も相対論を中心に講義を行っていく。前期を特殊相対論（光の速度、同時概念の相対性、時間・空間概念の変更）、後期を一般相対論（等価原理、重力の幾何学化、ブラックホール、宇宙論）にあてる。量子論についても簡単に紹介するつもりである。	
使用教材	テキスト	テキストはとくになし。参考書は適宜紹介する。授業では視聴覚教材も使用する。
	参考文献	
評価方法	前・後期各２、３回の課題と学年末試験で評価を付ける予定。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. プロローグ―現代物理学を学ぶ意味
2. 飛行機中でもワインが注げるわけ―相対性原理
3. 〃
4. 光の速度で走りながら光を見たら―光速一定の原理
5. 〃
6. 時間は遅れ、空間は縮む―時間・空間の相対性
7. 〃
8. 〃
9. 18歳の少女に恋した4?歳の科学者の戦略―「浦島効果」
10. 〃
11. $E=mc^2$―原子爆弾！
12. 〃
13. エレベータの綱が切れたら―等価原理
14. 〃
15. 空間も曲がる―重力の幾何学化
16. 〃
17. 光も出られない蟻地獄―ブラックホール
18. 宇宙の将来はどうなるの？―膨張宇宙
19. 始めに光ありき―ビックバン宇宙
20. 暗黒物質・銀河の種・インフレ宇宙―現代宇宙論の諸問題
21. 宇宙人さん、こんにちわ―地球外文明探査
22. 量子論の世界
23. 〃
24. エピローグ―再び、現代物理学を学ぶ意味

科目名	地　　学	担当者名	福井尚生

講義の目標		地学は「地球科学」自然科学の一分野、地球を研究する自然科学なら全部地学です。本講義では地球を広大な宇宙に浮かぶ天体の一つと見て、天文学を話題にします。天文とは「天」から届けられた「文」のこと、天文学とはその手紙を解読する学問で、対象は勿論天体です。 天文学を通して、人間も他の生き物と共に自然に育まれ、自然の法則に支配されていることの自覚を持ってもらうことが目的です。しし座流星群大出現？（1998年11月18日早朝）に胸をワクワクさせると同時に、天体についての自然科学的説明で脳細胞を刺激しておくことも大切です。
講義概要		宇宙の階層に従って話を広げて行きます。 1.恒星：太陽（系） 連星：ミザール 散開星団：プレアデス（すばる） 球状星団：M13 2.銀河：銀河系（天の川） 銀河群：局部銀河群 銀河団：おとめ座銀河団 超銀河団：局所超銀河団 3.見える限りの宇宙：ビッグバン宇宙
使用教材	テキスト	プリント 視聴覚教材
	参考文献	・『現代天文学要説』内海和彦、他著、朝倉書店 ・『宇宙科学入門』尾崎洋二著、東京大学出版会
評価方法		受講者数にも依りますが、「出席」、「宿題・レポート」、「試験」等を考えています。
受講者に対する要望など		『大学は学問を通じての人間形成の場である』を肝に銘じ、講義の多少のしんどさにへこたれず、十分に予習・復習をしながら授業に出席し、真面目に主体的に取組んで下さい。 受講希望者は本「講義の目標」を読み、各自の意見と決意とを100字以内にまとめたメモを本講義初日の17時までに、教室又はオフィス（中央棟702）で直接・福井に提出して下さい。

科目名	生物学A	担当者名	加藤 僖重

講義の目標		近年、生態系を乱す種種の問題が身近かに起こっている。普段の何気ない我々の行動が世界の環境を左右することもまれではない。 今世界的な重要な課題となっている問題を取り上げ、生物学の立場からそれらを説明し、将来の環境悪化を食い止めるために、我々は何をすべきかを論じる。
講義概要		現在、起こっている環境問題を知るために、新聞・雑誌等の記事を利用しながら講義を進める。
使用教材	テキスト	教科書：使用しない。
	参考文献	参考書：講義中に必要に応じてコピー配布をする。
評価方法		出席回数、通常のレポート、夏期休暇のレポート、定期試験の結果を総合して決定する。
受講者に対する要望など		最初の講義で年鑑スケジュールを説明するので、必ず出席すること。 問題意識を持って講義に出席すること。

年間授業計画	1．序論　一年間の講義の進め方を説明。特に現在問題を授業に取り入れるために、各自が意識的に新聞・雑誌和読む必要があること、またそれについてのレポート提出が多いことを説明する。 2．人口問題についての英語や日本語の新聞・雑誌記事を読みながら、人口増加の仕組みを説明。 3．地球全体の生物現存量と動植物の数量のバランスの関連を説明。 4．現在、世界各地で問題になっている飢餓問題と生態系の破壊の関係を説明。 5．1935年にA. G. Tansleyが提唱した生態系の概念を説明し、現在、問題になっている環境破壊との関連を考える。 6．生産者の現存量と減少による環境悪化を説明。 7．消費者の現存量増加が環境の悪化につながるメカニズムを説明。 8．分解者の正体は何かを説明。 9．生態系を乱す例1大気汚染の実態やその要因についての英語や日本語の新聞・雑誌を読む。 10．生態系を乱す例2水質汚染の実態やその要因についての英語や日本語の新聞・雑誌を読む。 11．生態系を乱す例3土壌汚染の実態やその要因についての英語や日本語の新聞・雑誌を読む。 12．地球上には様々な環境があるが、その分布を決めている温度条件と湿度条件を表す温量指数と乾湿指数を説明。 13．身近な自然を守る意義とその観察法を説明。 14．イギリスと日本の自然保護の歴史を説明。 15．日本の様々な森林の分布とその特徴を説明。 16．森林の特性が文化の違いとなることを実例で説明。 17．植物分布　プラントハンターにとって魅惑の地「日本」の重要性を古赤道分布説で説明。 18．日本には独特固有植物が多数分布しているが、その理由を隔離分布種を例に説明。 19．ワシントン条約とは　絶滅の危機に瀕している生物とその保護問題を説明。 20．ラムサール条約とは　水鳥の保護の意味と日本の役割を説明。 21．種の多様性保全条約とは　生態系を守るためには様々な生物の存在が不可欠であるが、貿易立国である日本の役割をを説明。 22．豊かな自然を恒久的に残すためのナショナルトラスト制度を説明。 23．アメリカから始まった国立公園制度を説明。 24．一年のまとめ

科目名	生物学B	担当者名	加藤 僖重

講義の目標		身近な自然を注意深く観察出来るようになることを目指す。
講義概要		普段、見過ごしている普通の種類を材料に、現代の生物学が抱える問題にスポットを当てて講義を進めたい。そのためにも新聞・雑誌等に目を通すことが肝要である。原則として毎回特定のテーマについてのレポートを提出してもらう。
使用教材	テキスト	使用しない。
	参考文献	講義中に必要に応じてコピー配布をする。
評価方法		出席回数、通常のレポート、夏期休暇のレポート、定期試験の結果を総合して決定する。
受講者に対する要望など		生物観察に関心があること。

年間授業計画

1. 序論　一年間の講義の進め方を説明し、レポート提出が多いことを理解してもらった後、抽選によって受講生の確定、実験室での座席の決定を行う。
2. 実験室内における心得　実験室の器具等の扱い方を説明。
3. キャンパス・ウオッチング①　種を区別するポイントを説明。
4. 身近な植物の観察①　見慣れた花の降造を観察。
5. 顕微鏡の使用法①　実際の顕微鏡に慣れてもらう。
6. 顕微鏡の使用法②　ミクロメーターの使用法。
7. 顕微鏡の使用法③　単位面積当りの細胞数を数える。
8. キャンパス・ウォッチング②　五感を働かせる。
9. 身近な植物の観察②　見慣れた果実の解剖。
10. トピックス①　新聞・雑誌等の記事を読む。
11. 身近な植物の観察④　見慣れた種の葉の形態を観察する。
12. 身近な自然　夏期休暇のレポートを書くための説明。
13. 種の多様性保全条約　なぜ他の生物を守らなければならないか。
14. 身近な植物の観察⑤　スイカズラ科の特殊な形態を観察する。
15. 身近な植物の観察⑥　身近なブナ科植物を観察する。
16. ワシントン条約　身近な“絶滅の危機に瀕している動植物”を観察する。
17. 身近な植物の学察⑦　秋の果実を観済する。
18. 身近な植物の観察⑧　生産構造図を描く。
19. 身近な植物の観察⑨　紅葉・黄葉の観察。
20. 分類に使われるキー・キャラクターとは　デンドログラムを描く。
21. 分類に使われるキー・キャラクターとは　ブナ科植物の場合。
22. レポートの整理　観察結果をより良いレポートにする方法を説明する。
23. トピックス②　新聞・雑誌の記事を読む。
24. まとめ　一年間のまとめと試験の説明。

科　目　名	自然科学概論	担当者名	福　井　尚　生

講義の目標		自然科学とは自然事象（人間の存否に無関係に起こる事象）に見出される普遍的な法則を探求する学問です。人為が及ばず、遠くまで思考が伸ばせる世界の方が自然が見えてきます。ですから「宇宙」は自然科学の格好の学問対象です。 これまでの自然科学に於ける成果を元に、我が銀河系にある地球と同じような天体の数の推定値は少くとも10。観測でも太陽系外で惑星が存在すると考えられる天体が、いくつか報告されています。この問題に対する自然科学者の取り組み方を学び、今後の問題に我々がどう対処すべきかを考えます。
講義概要		地球外文明の 1.存在：「多数世界論」対「唯一世界論」 2.探査哲学：平凡性の原理、人間原理 3.進化：Ⅰ型文明“地球”（ドレーク方程式） Ⅱ型文明“ダイソン球”（赤外線源） Ⅲ型文明“カルダシェフ球”（CTA-102騒動） 4.探査の現段階：オズマ計画、SET1 5.探査効能：階層的（夢→実現→進歩）循環図
使用教材	テキスト	プリント、視聴覚教材
	参考文献	『地球外文明の思想史』横尾広光著、恒星社厚生閣
評価方法		受講者数にも依りますが、「出席」、「宿題・レポート」、「試験」等を考えています。
受講者に対する要望など		『大学は学問を通じての人間形成の場である』を肝に銘じ、講義の多少のしんどさにへこたれず、十分に予習・復習をしながら授業に出席し、真面目に主体的に取組んで下さい。 受講希望者は本「講義の目標」を読み、各自の意見と決意とを100字以内にまとめたメモを本講義初日の17時までに、教室又はオフィス（中央棟702）で直接・福井に提出して下さい。

科　目　名	自然科学特殊講義A（東洋の健康論）1（94年度以降）	担当者名	青　柳　多恵子

講義の目標		東洋の健康の考え方には、人間が本来もっている自然治癒力、抵抗力、生命力を大切にして、体の回復をはかることを重視している。東洋の多くの古典的文献に見られる「健康観」「養生訓」は、現代の我々が抱えている個人的・社会的な問題である「いかに健康に生涯を送るか」の解決策の多くをその考え方に学びとることができると思われる。先人の残していった言行の含む意味の解析と理解とによって、真の健康とは何か、又その真の健康であるためのライフスタイルを模索することを目的とする。
講義概要		文化遺産である古書（日本・中国）や健康について記された文献の中から、健康であるための心のあり方について検証し、文献に記載されている時代の社会情勢や生活様式・食文化といった基本的な生活状況に加えて、当時の教育の状態や生活習慣・しきたり・行事・式典・祭り等に現れている健康への望みや、祈りが意味するものを解明しつつ、現代人の置かれている環境（自然・社会）や生活・考え方がどのような変遷をしたのか、また、21世紀における健康の意味を問いただすことである。生物としての人間の真の健康を自己に問いかけ、先人が残した文化遺産に健康の普遍性を見いだすことができる。東洋のロマンに触れ、今の健康のあり方を考えることとする。
使用教材	テキスト	
	参考文献	・吉川幸次郎著　『支那人の古典とその生活』『論語について』 ・青柳洋次郎著　『論語からみたビジネス生活の方法』 ・森　　隆夫著　『生涯教育と学校教育』 ・松尾　芭蕉著　『奥の細道』 ・蜂谷　邦夫著　『孔子』 ・品川　嘉也著　『気功の科学』 ・丸山　敏秋著　『気』
評価方法		レポート提出と出席による。
受講者に対する要望など		真面目に自分の生活や健康を考える学生。

年間授業計画	1. 西洋的なものの考え方と東洋的なものの考え方の違い。 2. 今なぜ「気」の概念が問題なのか。 3. 論語のなかの人生哲学と日本人との繋がりについて。 4. 中国に行き続ける宇宙観と健康観。 5. 中国の「気」の概念トニ本の「気」の概念の違い。 6. 指導理念としての古典の価値の意味するもの。 7. 現代ビジネスと健康意識。 8. 普遍的・究極的な健康は存在するのか。 9. 人生に関する生きた知恵としての「論語」の解釈。 10. 幸福に関する価値連鎖体系の崩壊とは。 11. 健康に関する価値連鎖体系の崩壊とは。 12. まとめ 13. 現代日本の「健康観」について。 14. 心の様相と「老い」について。 15. 世界の健康意識の変化とその心の在りよう。 16. 健康を阻害する要因と歴史と歴史的な流れ。 17. 。自然の意味するもの。 18. 現代文明と健康意識の功罪について。 19. 「論語」に見られる超現代感覚とは。 20. 原始生活と現代生活 21. 東洋的健康観とは。 22. 健康への関心と配慮について。 23. 幼児の時からの健康教育の必要性。 24. まとめ

科　目　名	自然科学特殊講義A（植物と人間）2（94年度以降）	担当者名	加　藤　僖　重

講義の目標	普段、あまりに見慣れた種類のために虫意深く観察することのない植物を材料として人類の交流を想像してみたい。	
講義概要	身近な生物を理解するためにも、幅広く種類を選び、様々な文献を参考に講義を進めたい。読書に無関心な学生の受講はお断りする。 必要に応じて一定のテーマについてのレポートを提出してもらう。	
使用教材	テキスト	使用しない。
	参考文献	講義中に必要に応じてコピー配布をする。
評価方法	出席回数、通常のレポート、夏期休暇のレポート、定期試験の結果を総合して決定する。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 序論　一年間の講義の進め方を説明。特に現在の諸問題を授業に取り入れるために、各自が意識的に新聞・雑誌を読み、それについてのレポート提出が多いことを理解してもらう。
2. 遺跡から出た植物遺骸　ヒトが利用した植物を地域ごとに紹介すれ。
3. 万葉集に出てくる春の植物　梅と人々のくらし。
4. 万葉集に出てくる春の植物　桜と人々のくらし。
5. 万葉集に出てくる春の植物　水仙と人々のくらし。
6. スプリングエフェメル　アネモネ、メイフラワーと人々のくらし。
7. トピックス①　英語や日本語の新聞・雑誌記事を読み、レポートを提出。
8. 栽培植物の起源①　何を植栽したか、民族による違いを説明する。
9. 栽培植物の起源②　何を植栽したか、民族による違いを説明する。
10. 日本文化の基盤をなす植物①　縄文時代を特徴づける植物は。
11. 日本文化の基盤をなす植物②　弥生時代を特徴づける植物は。
12. 日本文化の基盤をなす植物③　古墳時代を特徴づける植物は。
13. 日本文化の基盤をなす植物④　奈良・平安時代を彩る植物は。
14. トピックス③　自然環境に関する新聞・雑誌記事を朝み、レポートぢ提出。
15. 日本文化の基盤をなす植物⑤　鎌倉時代を特徴づける植物は。
16. 日本文化の基盤をなす植物⑥　南蛮人の持ってきた植物。
17. トピックス④　新聞・雑誌記事を読み、レポートを提出。
18. 日本文化の基盤をなす植物⑦　日光御成道沿いの植木村。
19. 日本文化の基盤をなす植物⑧　菊人形。
20. 日本文化の基盤をなす植物⑨　朝顔。
21. トピックス⑤　新聞・雑誌記事を読み、レポートを提出。
22. 日本文化の基盤をなす植物⑩　ケンペル、ツュンベリーが紹介した日本。
23. 日本文化の基盤をなす植物⑪　シーボルトが収集した日本の植物。
24. まとめ　一年間のまとめと試験の説明。

科目名	自然科学特殊講義A（化学）3（94年度以降） 化学（93年度以前）	担当者名	和田浩志

講義の目標		人間の生活や健康をはじめ環境などに関係する物質や現象を、化学的に理解するとともに、ものごとを科学的にもらえ、判断できることを目的とする。
講義概要		本講義では、甘味料、香辛料、香料、薬草、毒草、有毒物質、麻薬、医薬品、食品、水質・大気汚染物質など、我々の身近にある物質を中心に、なるべく実体験を通して、これらに興味が持てるようにわかりやすく話をする。また、最近の新聞や雑誌などで話題になっている化学物質などについても、取り上げる予定である。 講義内容の性格上、多くの天然物の複雑な構造式を提示するが、あくまでも、自然界の不思議さや共通性を理解することに主眼があり、初めて化学を学ぶもの、亀の甲が不得意なものも、授業のレベルを落とさずに十分理解できるように工夫する。
使用教材	テキスト	必要に応じて、プリントを配布する。
	参考文献	講義の中で、適宜紹介する。
評価方法		知識よりも基本的な考え方を身につけるのが目的なので、出席と受講態度を重視する。そのほか、レポート、定期試験を加味して総合評価する。
受講者に対する要望など		なるべく実験を取り入れる予定なので、興味を持って積極的に参加してほしい。

年間授業計画	1. はじめに。年間予定と講義概要。化学的なものの見方について。 2. 毒の化学　Ⅰ 3. 毒の化学　Ⅱ 4. 麻薬の化学 5. 香りの化学 6. 香辛料の化学 7. 苦味の化学 8. 甘味の化学　Ⅰ 9. 甘味の化学　Ⅱ 10. 環境の化学　Ⅰ 11. 環境の化学　Ⅱ 12. 環境の化学　Ⅲ 13. 色素の化学　Ⅰ 14. 色素の化学　Ⅱ 15. 茶の化学 16. 水の化学 17. 栄養の化学 18. 洗剤の化学 19. 薬の化学　Ⅰ 20. 薬の化学　Ⅱ 21. 自然と生命の化学　Ⅰ 22. 自然と生命の化学　Ⅱ 23. 自然と生命の化学　Ⅲ 24. まとめ

科　目　名	自然科学特殊講義A（宇宙論）4（94年度以降）	担当者名	福　井　尚　生

講義の目標	「特殊講義」では“特殊”な話題について、“教養として”の制限付きではありますが、“専門”の導具で少し深く学ぶ事を目標にすべきだと思います。そこで本講義では、私の専門である一般相対論的宇宙論からの話題について少し深く学びます。 広大な宇宙を支配する力は重力、その重力に仕える物理学が一般相対性理論です。localな存在の人間が、宇宙全体を貫いている普遍的な法則の発見に挑戦している姿についても学びます。	
講義概要	1.光（光の実速度の測定） 2.空間・時間（「絶対」対「相対」） 3.相対性理論：特殊相対性理論（特殊相対性原理、光速度不変の原理） ：一般相対性理論（一般相対性原理、等価原理） 4.一般相対論的宇宙論：構造論（宇宙モデル） ：起源論（宇宙のはじまり） 5.宇宙論、最新の話題から（宇宙年齢の矛盾）	
使用教材	テキスト	プリント 視聴覚教材
	参考文献	
評価方法	1.演習（授業の際に配布する用紙に授業内容に関する演習をし、用紙を提出） 2.レポート（前期・夏休み及び後期・冬休みに出す課題に対するレポート提出）	
受講者に対する要望など	『大学は学問を通じての人間形成の場である』を肝に銘じ、講義の多少のしんどさにへこたれず、十分に予習・復習をしながら授業に出席し、真面目に主体的に取組んで下さい。	

科目名	自然科学特殊講義A(体力トレーニング論)5(94年度以降)	担当者名	松原　裕

講義の目標		生涯、健康で文化的な生活をおくるために、身体運動とトレーニングに関する様々な科学的知識をもつことを目標とする。 注：身体運動にはスポーツ活動や身体トレーニングをはじめ、日常生活動作、労働活動、健康の維持増進、運動機能回復や障害予防のための運動等が含まれる。
講義概要		前期は、身体運動とトレーニングに関する概論を講義し、体力テストを実施し、結果について考察する。 後期は、受講学生各自が、身体運動とトレーニングに関してテーマを設定し、研究発表、討論を行なう。発表原稿集を作成する。
使用教材	テキスト	そのつど紹介する。
	参考文献	そのつど紹介する。
評価方法		毎時間の出欠席、レポート、研究発表、発表原稿集を総合して評価する。定期試験は実施しない。
受講者に対する要望など		1対1および集団の一員としてコミュニケーションができること。

年間授業計画	1. オリエンテーション　○個人票の作成（写真添付） 2. 講義・スポーツ活動について 3. 講義：身体トレーニングについて 4. 講義：日常生活動作について 5. 講義：労働活動について 6. 講義：健康の維持増進について 7. 講義：運動機能回復について 8. 講義：障害予防について 9. 実習：体力テスト（パワーマックスV） 10. 分析：パワーマックスVによる測定の評価 11. 実習：心拍数の測定（持久性運動） 12. 分析：心拍数の測定の評価 13. 研究：各自のテーマの検討 14. 研究：研究方法・計画の検討 15. 研究：中間発表 16. 研究：発表原稿の作成 17. 研究：発表原稿の完成 18. 発表：各自発表と討論 19. 発表：各自発表と討論 20. 発表：各自発表と討論 21. 発表：各自発表と討論 22. 研究：発表原稿集の作成 23. 研究：発表原稿集の作成 24. 講義：年間のまとめと発表原稿集の配布

科目名	コンピュータ概論（97年度以前）	担当者名	各担当教員

講義の目標		現在、膨大な情報の中から「自らに必要なもの」を探し出し、「効率的かつ効果的」に活用する場合の中心となるのはコンピュータである。 この科目では、コンピュータの基本操作や各種のアプリケーションソフトの利用、および情報処理の考え方や人間とコンピュータの関係を学んでいく。 とくに大学生活（広くは社会生活）で実際に必要で、かつ役に立つコンピュータ活用法を習得することを目的とする。
講義概要		コンピュータ初心者を対象に、１人で１台のパーソナルコンピュータを使い、主として実習を中心として授業を進める。 内容は、日本語および英文ワープロ、表計算、データベース操作、コンピュータネットワーク（通信）、情報倫理についてである。
使用教材	テキスト	本学情報センター発行のもの。タイプ練習用ソフト。
	参考文献	授業中、随時紹介する。
評価方法		授業中に指示する課題の作成と平常点で総合評価する。
受講者に対する要望など		実習を中心とした授業なので、欠席や遅刻は厳禁とする。止むを得ず欠席した場合には、必ず自習して遅れを取り戻すこと。 第１回目の授業で、使用教材や授業に必要なものを指示する。欠席した場合にはその後の受講は認めない。

年間授業計画	1. ガイダンスとコンピュータの基本操作 2. windows 入門―ウィンドウ操作とフロッピィディスクの取り扱い 3. タイピングと日本語入力 4. インターネットⅠ―ブラウザ・メール・図書検索（1） 5. インターネットⅠ―ブラウザ・メール・図書検索（2） 6. ワープロ入門―文書の編集と印刷（1） 7. ワープロ入門―文書の編集と印刷（2） 8. ワープロ入門―文書の編集と印刷（3） 9. ワープロ入門―文書の編集と印刷（4） 10. ワープロ入門―文書の編集と印刷（5） 11. ワープロ入門―英文ワープロ（1） 12. ワープロ入門―英文ワープロ（2） 13. 表計算入門―表の作成・編集と表計算、グラフの作成・装飾・印刷（1） 14. 表計算入門―表の作成・編集と表計算、グラフの作成・装飾・印刷（2） 15. 表計算入門―表の作成・編集と表計算、グラフの作成・装飾・印刷（3） 16. データーベースの操作―データーベースの作成・整備、データの検索・抽出（1） 17. データーベースの操作―データーベースの作成・整備、データの検索・抽出（2） 18. データーベースの操作―データーベースの作成・整備、データの検索・抽出（3） 19. インターネットⅡ―情報の収集と活用（1） 20. インターネットⅡ―情報の収集と活用（2） 21. インターネットⅡ―情報の収集と活用（3） 22. 情報倫理 23. 総合演習（1） 24. 総合演習（2）

科　目　名	コンピュータ入門（98年度）	担当者名	各担当教員

（半期完結）

講義の目標		現在、膨大な情報の中から「自らに必要なもの」を探し出し、「効率的かつ効果的」に活用する場合の中心となるのはコンピュータである。 この科目では、コンピュータの基本操作を中心に、アプリケーションソフトの利用、およびコンピュータネットワークについて学んでいく。 とくに大学生活（広くは社会生活）で実際に必要で、かつ役に立つコンピュータ活用法を習得することを目的とする。
講義概要		コンピュータ初心者を対象に、１人で１台のパーソナルコンピュータを使い、主として実習を中心として授業を進める。 内容は、日本語および英文ワープロ、コンピュータネットワーク（通信）、情報倫理についてである。
使用教材	テキスト	本学情報センター発行のもの。タイプ練習用ソフト。
	参考文献	授業中、随時紹介する。
評価方法		授業中に指示する課題の作成と平常点で総合評価する。
受講者に対する要望など		実習を中心とした授業なので、欠席や遅刻は厳禁とする。止むを得ず欠席した場合には、必ず自習して遅れを取り戻すこと。 第１回目の授業で、使用教材や授業に必要なものを指示する。欠席した場合にはその後の受講は認めない。

年間授業計画	1. ガイダンスとコンピュータの基本操作 2. windows 入門―ウィンドウ操作とフロッピィディスクの取り扱い 3. タイピングと日本語入力 4. インターネット―ブラウザ・メール・図書検索（1） 5. インターネット―ブラウザ・メール・図書検索（2） 6. ワープロ入門―文書の編集と印刷（1） 7. ワープロ入門―文書の編集と印刷（2） 8. ワープロ入門―文書の編集と印刷（3） 9. ワープロ入門―文書の編集と印刷（4） 10. ワープロ入門―英文ワープロ（1） 11. ワープロ入門―英文ワープロ（2） 12. 情報倫理

科目名	情報論	担当者名	前田功雄

講義の目標		情報および情報量の概念を明らかにするとともに、パソコン通信やコンピュータ・ネットワーク上の情報伝達の仕組みと信頼性の高い情報システムの構築について解説する。
講義概要		上記目標のためにコンピュータ・ネットワークの積極的な利用をしながら講義を進める。電子掲示板、電子メール、ファイル転送などが最初に説明されると同時に、それらの利活用をとうして情報伝達の効率や信頼性の問題が述べられる。特に、リポートの提出等に学内のコンピュータ・ネットワークを使うこと。そのために最初の2～3回ぐらいはコンピュータ・ネットワークのデモンストレーションを行なう。 キー・ワード：パソコン通信、コンピュータ・ネットワーク、LAN、Internet、プロトコル、電子メール、電子掲示板、ファイル転送、エントロピー、誤り検出符号、誤り訂正符号、情報の圧縮、高信頼性情報システム、獨協大学学籍番号システム
使用教材	テキスト	必要な都度プリント配布。
	参考文献	授業中に述べる。
評価方法		評価は授業中に課する課題のコンピュータ通信によるレポート提出。
受講者に対する要望など		コンピュータ概論あるいは情報処理概論あるいはC言語を含むプログラミング論を既修または平行履修のこと。

年間授業計画

1. パソコン通信とは　パソコン通信とは？どんなことができるのか？どんな機械が必要か？
キー・ワード：パソコン、モデム、通信ソフト、通信速度
2. パソコン通信のデモンストレーション　具体的な幾つかのBBS局に接続して実演。
キー・ワード：BBS局、サインオン、ログオン、ログオフ、電子メール
3. コンピュータ・ネットワークとは　コンピュータ・ネットワークの種類と仕組み。
キー・ワード：ホスト－端末、LAN、コンピュータ間通信、Internet
4. Internetの仕組みと実演　コンピュータ間通信の代表であるInternetの仕組みと実演。
キー・ワード：ノード、ユーザID、パスワード、電子メールの送受信
5. Internetの実習　ログオン、ログオフ、電子メールの送受信等の実習。
6. Internetによるファイル転送　ユーザ間でのテキスト・ファイルやバイナリー・ファイルの転送法の解説。
キー・ワード：TEXT FILE、BINARY FILE
7. パソコン上のファイルのInternet上での転送　FDのファイルをInternet経由で転送する方法を解説。
キー・ワード：アップロード、ダウンロード
8. 前期中間レポート　パソコンによるファイルのアップロードを含むレポート提出。課題は授業中に説明。
9. 情報管理とデータベース（ファイルとディレクトリ）　情報を管理する場合のファイルの扱い方法。
キー・ワード：ファイル、（ルート、サブ）ディレクトリ、ツリー
10. 情報管理とデータベース（情報検索と抽出）　データベースから必要な情報の検索・抽出の方法について解説。
キー・ワード：データベース、レコード、フィールド、検索・抽出条件
11. 情報管理とデータベース（データベースの作り方）　パソコン通信やネットワークによるデータベースの構築。
キー・ワード：ダウンロード、エディター
12. 前期レポート　パソコン通信やコンピュータ・ネットワークによるデータベースの構築に関するレポート課題の説明。
13. 自然言語と情報理論　自然言語（英語）の生成メカニズムと確率モデル。
キー・ワード：文字の出現頻度、単語長の分布、文章長の分布、文章発機
14. 情報の種類　情報の種類とそれらを伝達する媒体について解説。
キー・ワード：アナログ情報、ディジタル情報、標本化、量子化、マルチメディア
15. 情報量の測りかた（確率入門1）　情報量の定義とその尺度について解説するために、確率論の初歩を学習。
キー・ワード：確率、基本公式、独立な確率変数
16. 情報量の測りかた（確率入門2）　情報理論によく出てくる確率概念の解説。
キー・ワード：条件付確率、ベイズの定理、事前確率、事後確率
17. 情報量の測りかた（エントロピーの導入）　情報量の定義とその尺度の導入。
キーシワード：不確実さ、自己情報量、相互情報量、条件付情報量、エントロピー
18. エントロピーの社会科学的解釈　エントロピー概念の経済学上の問題への応用。
キー・ワード：所得の均衡とエントロピー
19. 情報伝達システム（誤りの無い場合）　効率のよい伝達システムと符号化について解説。
キー・ワード：情報源、通信経路、受信点、符号器、復号器、符号化
20. 情報伝達システム（誤りのある場合）　情報伝達システンはどこまで信頼性を高められるか。
キー・ワード：雑音、誤り訂正符号、パリティチェック方式
21. Hamming符号とHuffman符号　代表的な誤り訂正符号の紹介と情報圧縮への応用について解説。
キー・ワード：誤り訂正符号、情報圧縮
22. 10進系符号における誤り検出符号　10進系での誤り検出符号について解説。
キー・ワード：誤り検出符号、パリティチェック方程式
23. 獨協大学学籍番号システム　本学の学籍番号システムは誤り検出符号を採用している。
キー・ワード：置換、パリティチェック方程式
24. 後期最終レポートについて　後期最終レポートの課題と作成要領について述べる。

科目名	言語学（94年度以降） 一般言語学（93年度以前）	担当者名	新里博樹

講義の目標		本講義では、言語の一般的特性を探る研究法を研究史の流れに沿って概観するとともに、その研究成果として得られた一般的特性の諸点、および言語観を概説していく。その中で、言語に対する多様なまなざしを涵養し、言語について考える姿勢を養うことを目標とする。
講義概要		前期は主として講義が中心となる。古代から現代にいたる言語学の発展の軌跡をたどりつつ、言語学における問題意識の推移を跡付け、"言語学の父" と呼ばれるフェルディナン・ド・ソシュールの言語観を学ぶ。後期は、討論形式を導入して、ソシュールの言語理論を出発点に、二十世紀における言語学を概観しながら、言語の一般的性質や役割などを考察する。
使用教材	テキスト	言語学入門／田中春美・五十嵐康男他著／大修館書店
	参考文献	話題が多岐にわたるので、その都度、提示・紹介する。
評価方法		前期・後期のレポートが中心となる。また、随時、授業時に出欠代わりの小レポートを課すこともある。出席すればよいということではなく、授業への参加（質問したり、意見を述べるなど）の度合いを加味する。
受講者に対する要望など		特別な予習は必要としないが、真剣な思考と討議とを求める。また、参考文献は入手しやすいものを、その都度、提示紹介するので、できるだけ目を通して講義内容の理解に役立てて欲しい。

年間授業計画	1. ガイダンスとして、年間の講義概要の解説、および、評価の方法と基準の説明を行い、導入として、「言語学」とはどういう学問か、について論じる。 2. 言語学にはどのような研究分野があるかということ、および、その研究方法を概観するとともに、隣接領域との関わりについて考える。 3. 言語学の歴史と発展（第一回）／「言語学以前） 人間の言語に対する関心の在り方の始源の段階について考察する。 4. 言語学の歴史と発展（第二回）／「古代の言語研究Ⅰ」 古代における言語研究を、ギリシア・ローマについて概観する。 5. 言語学の歴史と発展（第三回）／「古代の言語研究Ⅱ」 古代における言語研究を、インド・中国について概観する。 6. 言語学の歴史と発展（第四回）／「中世の言語研究Ⅰ」 中世前期（ルネッサンス以前）における言語研究を概観する。 7. 言語学の歴史と発展（第五回）／「中世の言語研究Ⅱ」 中世後期（ルネッサンス以後）における言語研究を概観する。 8. 言語学の歴史と発展（第六回）／「近世の言語研究Ⅰ」―言語起源論 近代前期（17～18世紀）における言語研究を概観する。 9. 言語学の歴史と発展（第七回）／「近代の言語研究Ⅱ」―比較・歴史言語学 近代後期（19世紀）における言語研究を概観する。 10. ソシュールの言語理論Ⅰ／現代言語学の夜明け 通時論と共時論・ラングとパロール・記号観など基礎的な概念を解説する。 11. ソシュールの言語理論Ⅱ／恣意性・分節性・線状性 etc. 言語の記号としての特質についてソシュールの理論を整理し、理解を深める。 12. 前期の総括と後期への展望 13. 前期のレポートの返却、および講評 後期の予定の確認 14. ソシュールの言語理論Ⅲ／ソシュールの位置と影響 ソシュールの言語理論の背景と、その後への影響について整理し、理解を深める。 15. 言語の一般的特性Ⅰ／記号性・体系性 etc. 前期のソシュールの言語理論Ⅱをもとに、言語の一般的特性を考察する。 16. 言語の一般的特性Ⅱ／言語の単位とその構造 構造主義言語学の立場から見た、言語の一般的特性を考察する。 17. 言語の一般的特性Ⅲ／言語の生産性と定型性 生成論の立場から見た、言語の一般的特性を整理考察する。 18. 言語の機能Ⅰ／伝達機能 言語の機能のうち、伝達に関わる働きの種々相について論議する。 19. 言語の機能Ⅱ／非伝達機能 言語の機能のうち、直接的に伝達に関わらない働きの種々相について論議する。 20. 言語の機能Ⅲ／認識機能 言語の機能のうち、認識に関わる働きの種々相について論議する。 21. 言語と生活 言語の一般的特性・機能を生活という観点から見直し、論議する。 22. 言語と社会 言語と社会との関わりについて、その基本的な問題を整理し、論議する。 23. 言語と文化 言語と文化との関わりについて、その基本的な問題を整理し、論議する。 24. 総括／年間の講義・論議を振り返り、まとめる。

科目名	言語学（94年度以降） 一般言語学（93年度以前）	担当者名	城田　俊

講義の目標		我々人間は言語使用者である。言語は我々の内にある。しかし、この内にある言語に関する知見を我々は通常意識しない。講義の過程でこの意識されざる知見を意識化するように努めたい。
講義概要		人間は太古から言語を観察してきたが、科学的研究の対象としたのは比較的新しい。言語学は新しく成立した学問分野と言ってもよい。しかし、新しいとはいえ、今や人文科学を一部で主導する。本講義では、言語に関するいかなる知見がいかにして得られたか、その手段・思考方法等に関し具体的に語っていく。テキストとしては下記のものを用いる。シラバスに記したものと実際の講義では一部で前後することがある。
使用教材	テキスト	田中春美・樋口時弘等著『入門ことばの科学』　大修館書店
	参考文献	・ジョージ・ユール著　今井邦彦訳『現代言語学20章』大修館書店 ・R・ヤーコブソン著　田村すゞ子等訳『一般言語学』みすず書房 ・ヤーコブソン選集（米重等訳）Ⅰ・Ⅱ　大修館書店 ・中島平三等編集　『言語学への招待』　大修館書店 ・G・ムーナン著　福井芳男等訳『言語学とは何か』大修館書店 ・マルティネ編著　三宅徳嘉監訳『言語学事典』　大修館書店
評価方法		前期・後期共定期試験期間中に試験を行う。
受講者に対する要望など		言語を考慮するに当たっては、自分の学ぶ外国語と日本語を常に対比しつつ観察を進める態度を身につけるよう望みたい。

年間授業計画	1. 言語の起源、人間の言語（テキスト、３—17頁） 2. 失語症と言語学、隠喩 metaphor と換喩 metonymy—シュールレアリズムの絵画とキュービズムの絵画 3. ジェスチャーと言語学—首の振り方とハイ・イイエ 4. 見る記号と聞く記号 5. 言語の構造(I) 6. 言語の構造(II)（テキスト、５・６併せて53—66頁） 7. 言語の習得（テキスト　32—52頁） 8. 発音記号の役割—音声学入門(I) 9. 発音記号の役割—音声学入門(II) 10. 文法カテゴリーの研究(I) 11. 文法カテゴリーの研究(II) 12. 文法カテゴリーの研究(III) 13. 発話の意味(I) 14. 発話の意味(II)（テキスト、１・２併せて91—110頁） 15. 言語の多様性(I) 16. 言語の多様性(II)（テキスト、１・２併せて111—129頁） 17. 言語と社会（テキスト、130—160頁） 18. 言語と文化 19. 言語接触、言語同盟（テキスト、161—182頁） 20. ピジンとクレオール（テキスト、183—202頁） 21. 言語の系統(I) 22. 言語の系統(II)（テキスト、９・10併せて203—222頁） 23. 世界の言語(I) 24. 世界の言語(II)（テキスト、11・12併せて223—236頁）

科目名	情報科学特講A(コンピュータ・プログラミング論)1(94年度以降) コンピュータ・プログラミング論(93年度以前)	担当者名	高柳敏子

講義の目標		本講義では、初めにコンピュータの歴史を、ハードウェアおよびソフトウェアの両面から概観し、続いてコンピュータに情報処理をさせるとはどのようなことかを理解するために、単純なコンピュータをシミュレートするソフトを使って、コンピュータの構造、動作の仕組みおよびコンピュータ内部における情報の表現等、コンピュータの原理を学習する。 コンピュータの原理が理解できたところで、高級言語によるプログラミングを通じて、コンピュータによる問題解決の手順や方法を学習する。
講義概要		前期は、初めにコンピュータの歴史を、ハードウェアおよびソフトウェアの両面かは簡単に概観する。続いて、CASL シミュレータを利用して、アセンブラの学習用に想定されているコンピュータ COMET とそのアセンブラ言語 CASL のプログラミングおよび実習を通して、ノイマン型コンピュータの構造と動作の仕組み、またコンピュータ内部での情報の表現、そして基本的なプログラムの仕組み等コンピュータの原理を学ぶ。 後期は、初めに CASL のより応用的なところをみたところで、現実の一般的なパソコン言語の1つとしてコンパイラ言語のC^{++}を取り上げ、CASL プログラムと対応させながらC^{++}によるプログラミングを、Turbo $C^{++}$for Windows を使用して実習しながら勉学する。
使用教材	テキスト	随時必要な資料をファイルで配布する。
	参考文献	田中武二著『コンピュータと社会』サイエンス社、1993. 『CASL Programming』ITEC(情報処理技術者教育センター)、1994. Jamsa 著、春木・佐藤共訳『C^{++}超入門』アスキー出版局、1997. ストラウストラップ著、斎藤・三次・追川・宇佐美共訳『プログラミング言語C^{++}』第2版、アジソンウェスレイ・トッパン、情報科学シリーズ—40、1993. 『岩波情報科学辞典』岩波書店、1990.
評価方法		前・後期各1度のテストと、前・後期各2～3回程度のレポートの提出および出席を加味して評価する。
受講者に対する要望など		情報処理概論(経済学部)、情報処理(法学部)、コンピュータ概論(外国学部)、または言語情報処理Ⅰ(英語学科)を既修あるいは同程度の知識経験があること。

年間授業計画	1．コンピュータの歴史(1)：ハードウェア。 ノイマン型電子計算機、電子計算機の世代論と記憶素子。 2．コンピュータの歴史(2)：ソフトウェア。 コンピュータ言語、オペレーティングシステム。 3．ノイマン型コンピュータの構成： 中央処理装置、演算装置、記憶装置、入力装置、出力装置、補助記憶装置。 4．COMET の処理装置(1)： 語構成とビット構成、アドレスとアドレッシング、命令語、制御方式、プログラムカウンタ（PC)。 5．COMET の処理装置(2)：レジス。 汎用レジスタ（GR)、指標レジスタ（XR)、フラグレジスタ（FR)。 6．情報の表現(1)：数値の内部表現。 整数と２の補数表記、16進表現。 7．CASL プログラミング(1)： CASL の命令、疑似命令、マクロ命令、機械語命令、命令の形式、ラベル、命令コード、オペランド、注釈。 8．CASL プログラミング(2)： ロード命令とストア命令、加算命令と減算命令、定数定義と領域の確保。 9．CASL シュミレータとその実行： プログラムの入力、編集、アセンブル、１命令毎の実行、プログラムのディスクへの記憶、ディスクからの呼出し。 10．CASL プログラミング(3)：乗除算処理(1) シフト演算命令。 11．CASL プログラミング(4)：乗除算処理(2) 比較演算命令および分岐命令とフラグレジスタ。 12．CASL プログラミング(5)：繰り返し処理。 指標レジスタの使用。 13．CASL プログラミング(6)：情報の表現(2) 文字の内部表現、PSCII コード。 14．CASL プログラミング(7)：入出力命令。 コード変換と論理演算。 15．CASL プログラミング(8)：サブプログラム(1) 汎用レジスタによるデータの受け渡し。 16．CASL プログラミング(9)：サブプログラム(2) スタッフを利用したデータの受け渡し。 17．アセンブラとコンパイラ：プログラムの翻訳と実行。 例題と Turbo C++ for Winsows の操作。 18．C++プログラミング(1)：C++言語とは。 C++言語の基本事項。 19．C++プログラミング(2)：出力処理。 四則演算と演算子、シフト演算。 20．C++プログラミング(3)：判断・分岐演算。 関係演算子、論理演算子。 21．C++プログラミング(4)：くり返し演算。 配列。 22．C++プログラミング(5)：入力処理。 文字と文字列の扱い。 23．C++プログラミング(6)：関数(1) メインプログラムとサブプログラム、サブプログラムにデータの値を渡す。 24．C++プログラミング(7)：関数(2) サブプログラムにデータのアドレスを渡す。

科目名	情報科学特講A(コンピュータ・プログラミング論)1(94年度以降) コンピュータ・プログラミング論(93年度以前)	担当者名	立田ルミ

講義の目標		現在、ワープロや表計算ソフトや学習用ソフトウェアの様に、様々なソフトウェアが開発されている。それらがどのように開発されているかを講義し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。そのために、実際にプログラミングを行う。また、現在どのようなプログラミング言語があり、どのような言語で現在のソフトウェアが開発されているかを知る事も目標とする。
講義概要		現在コンピュータがどのような使われ方をしているかを概説し、最新のソフトウェアを知ってもらうために、ビデオまたはコンピュータを用いて紹介する。さらに基本的な情報処理の手順について概説し、それらをどのようにプログラミングすれば良いかを、イベントドリブン型の言語の1つであるVisual Basicを用いて例を挙げて解説し、実習を行う。さらに最近話題になっているインターネットやマルチメディアについても、解説およびデモンストレーションを行う。この講義は実習を伴うので、人数に制限があることに留意されたい。また、情報処理概論を既習またはWindowsに関する基礎知識のあることを前提として講義を行う。
使用教材	テキスト	立田ルミ　"教育システム情報とVisal Basic" 朝倉書店
	参考文献	天笠美知雄編　"情報処理の基礎" 朝倉書店
評価方法		前期、後期の試験：50% レポート　：40% 出席　：10%
受講者に対する要望など		情報処理概論を既習または同程度の知識のある学生に限る。人数が多い場合は、抽選を行なう。

年間授業計画	1. 授業のガイダンスとコンピュータの概説 ハードウェアの概略と獨協大学におけるコンピュータの構成 2. ソフトウェアの歴史と概略 ソフトウェアの分類、オペレーティングシステム、Windows95 の概略 3. 教育におけるコンピュータの役割、プログラム開発手順 システム開発の手順と機械化、プログラム開発の手順 4. Visual Basic の概略 イベント、フォーム、プロジェクト、プロパティ、ツールボックス、プロジェクトウインド 5. 簡単なプログラム作成 (1) アプリケーション開発手順、Visual Basic の開発環境、文字の入出力 6. 簡単なプログラム作成 (2) 四則演算、変数のまとめ 7. 選択のあるプログラム作成 (1) アプリケーションの設計、コントロールの扱い方 8. 選択のあるプログラム作成 (2) 選択ステートメントのまとめ 9. 選択のあるプログラム作成 (3) オプションボタンの利用、チェックボタンの利用 10. 選択のあるプログラム作成 (4) リストボックスの利用、ドラッグアンドドロップの利用 11. 繰り返しのあるプログラム作成 (1) If と Go To を用いた繰り返し、For Next を用いた繰り返し 12. 繰り返しのあるプログラム作成 (2) ラストデータの処理、条件を満たすまで繰り返す、ネスティング 13. 図形の処理 (1) 直線を描く、曲線を描く 14. 図形の処理 (2) 円を描く、色を塗る 15. 図形の処理 (3) Windows の画像処理ソフトを使う、タイマーを使って絵を動かす 16. 図形の処理 (4) ドラッグアンドドロップを使う 17. 音声の処理 音声を録音する、音声を再生する 18. 配列とコントロール配列 一次元配列、コントロール配列、二次元配列 19. プルダウンメニュー コンボボックスを使う、プルダウンメニューの作成、プルダウンメニューの利用 20. ファイルの利用 (1) コントロールの利用、シーケンスファイルの利用 21. ファイルの利用 (2) ランダムファイルの利用 22. 教育用ソフトの制作 (1) システム設計、詳細設計 23. 教育用ソフトの制作 (2) 作成とデバッグ 24. 教育用ソフトの制作 (3) 作成とデバッグ

科目名	情報科学特殊講義A(コンピュータサイエンスと自然言語処理)2(94年度以降) 情報論特殊講義A (93年度以前)	担当者名	工藤育男

講義の目標		コンピュータの初級をマスターした外国語学部の学生を対象に、コンピュータへのより深い理解を与えることを目的として開講する。
講義概要		教材には、インターネット、機械翻訳、統計言語を主な教材にとりあげ、卒業研究や大学院、社会へ出てからも役立ちそうな実用的なテーマを取り上げる。
使用教材	テキスト	用いない。
	参考文献	必要に応じて、著書、ホームページなどを紹介する。
評価方法		前期後期2回のレポートにより評価する。
受講者に対する要望など		コンピュータの初級コースをマスターしていることが望ましい。

年間授業計画

1. 講義：授業の狙い、年間計画など本講義の概略を紹介する
2. 実習：ネットスケープナビゲータ：操作方法、サーチ
3. 実習：ホームページの考察
4. 実習：ホームページの作成(1)：記述言語ＨＴＭＬについて
5. 実習：ホームページの作成(2)：ホームページの構造
6. 実習：ホームページの作成(3)：写真、絵を扱う
7. 実習：ホームページの作成(4)：音声、音楽を扱う
8. 実習：ホームページの作成(5)：ホームページを飾る
9. 実習：ホームページの作成(6)：電子メイル
10. 講義：コンピュータとマルチメディア
11. 講義：インターネット
12. 討論：作成したホームページについて
13. 講義：後期の授業について概説する
14. 実習：言語の統計処理(1)：ソート
15. 実習：言語の統計処理(2)：頻度
16. 実習：言語の統計処理(3)：Zipf の法則
17. 講義：機械翻訳(1)：形態素解析と辞書
18. 講義：機械翻訳(2)：構文解析、格解析と言語理論
19. 講義：機械翻訳(3)：機械翻訳
20. 実習：機械翻訳(1)：操作になれる
21. 実習：機械翻訳(2)：機械翻訳の評価
22. 実習：機械翻訳(3)：機械翻訳のメリット、デメリット
23. 講義：コーパスと言語データベース
24. 講義：自然言語処理に関するホットな話

科　目　名	情報科学特殊講義A（情報処理）3（94年度以降）	担当者名	東　　孝　博

講義の目標	この授業は、コンピュータ初心者向け授業「コンピュータ概論」の直上に位置する上位科目です。コンピュータの基本操作を習得した人たちが、その活用に向けて、一歩踏み出すために設けられているものです。	
講義概要	今年はまず、インターネット上の様々なサービスの概要を学びます。そして、その中でとくにWWWサービスを利用して、実際にいろいろな情報を見て回り、特定の情報を探し出し、取り込みそれを整理することなどを行います。また、WWW上の情報の単位である「ページ」の構造と、それを記述する「HTML」(Hyper- Text Markup Language) を学び、簡単な自分自身のホームページの試作もしてみます。 そのあとは、やはりHTMLと同じ非WYSIWYG (What You See Is What You Get) 系の文書作成方式であり、印刷・出版用の標準言語と言われているT_EXについて学ぶ予定です。	
使用教材	テキスト	とくにありません。
	参考文献	適宜紹介します。
評価方法	数回の課題と日常の宿題等授業への参加態度で決めます。	
受講者に対する要望など	「コンピュータ概論」成績優秀者か、または、それと同等程度のものを対象とします。教室のコンピュータの台数に合わせて受講者を選抜します。	

科目名	言語学特殊講義A（音の構造）（94年度以降） 一般音声学（93年度以前）	担当者名	伊豆山　敦　子

講義の目標		人間の言語音の調音機構を観察し、その調音・聴取の訓練を行う。そしてその表記の方法を習得する。 一般的に、人間の言語音にはどんなものがあり、どのような構造をなしているかを学ぶ。それは言語研究の基礎である。 さらに、音声がその言語で果たしている機能はどういうものか、日本語を例として考える。 この講義により、無意識に習得した自国語の音声に対する、客観的認識が得られることを期待する。そして外国語習得・教育などに役立てることを期待する。
講義概要		国際音声字母表を用いながら、調音音声学的訓練を行う。個々の単音の調音を説明し、発音し分け、それを聞き分けることを教える。当然、自国語の音声面に対して観察をすることになる。 さらに、そのことから、音声の果たす機能に着目するようになり、音韻論の基礎を自国語・日本語で学ぶ。各人が音声学的知識を身につけ、音声を観察することができるように、訓練を中心とした授業である。
使用教材	テキスト	小泉保「音声学入門」（1996）　大学書林
	参考文献	・服部四郎「音声学」（1984）　岩波書店 ・川上秦「日本語音声概説」（1977）　おうふう ・風間喜代三 et al.「音声学」（1993）　東京大学出版会 ・城生伯太郎「音声学」アポロン工業社
評価方法		授業中に随時行う単音聴取テストへの参加。前期・後期各１回の聴取テスト。後期末の筆記試験。以上の総合により評価する。
受講者に対する要望など		音を聴き取り発音するのだから、自分自身ができるようになることが肝要である。授業で聴き、教われば分かるものも、一人で教科書など読むだけでは分かり難い。休まず出席することを要望する。

年間授業計画	1. 音声学とは。 2. 気流と発声（P.5-23） 3. 調音器官（P.23-30） 4. 母音　　（P.85-96） 5. 有声・無声。鼻腔・口腔 6. 両唇閉鎖音 7. 両唇摩擦音 8. 唇歯音 9. 歯・歯茎閉鎖音 10. 歯・歯茎摩擦音 11. 破擦音 12. 聴取テスト 13. テスト講評と復習 14. 硬口蓋音 15. 軟口蓋音 16. 口蓋垂音 17. 側面音 18. ふるえ音・はじき音 19. 接近音 20. 副次調音（P.70-83） 21. 鼻母音（P.100-101） 22. 日本語の音素（P.142-146） 23. 日本語の音素（P.147-148） 24. テスト

科目名	地域文化研究(現代英米社会研究)1(94年度以降)	担当者名	有吉広介

講義の目標		英国社会を支えるミドルクラスの社会学的分析を通して、現代英国の社会構造および文化を理解する。
講義概要		かつてミドルクラスは英国資本主義社会をつくりだした歴史的主体・ブルジョアジーであった。そしてこの国の伝統と革新とを独特な方法で調和させて近代の英国社会を生みだした。現代英国のミドルクラスは、19世紀末における経営者革命や官僚機構の発達に起源をおく専門経営者層、中間管理者層、専門技術者層、および大量の事務員層からなるホワイトカラー階級である。この階級の中核をなす人びとは、家庭生活のなかでミドルクラスの文化を体得したうえで、英国の独特な教育システムを通して社会に送りだされて、英国の社会と文化とを支えている。本講義では、英国人の生活と文化とを読み取ってもらいたい。
使用教材	テキスト	プリントを渡す。
	参考文献	随時指示する。
評価方法		前・後期の終りに求めるレポートにて評価する。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 英国におけるミドルクラスの現状 2. 産業革命前後のミドルクラス 3. 古典的ミドルクラスの性格 4. 前回に続く 5. 古典的ミドルクラスの文化 6. 新しいミドルクラスの出現 7. 現代におけるブルジョア階級の衰退 8. 専門経営層の確立 9. 前回に続く 10. 中間管理者層の出現と社会的地位 11. 前回に続く 12. 新旧の専門家層 13. 前回から続く 14. 実業家層の現状 15. 事務労働者の階級状況 16. 前回に続く 17. ミドルクラスの家庭生活 18. 前回に続く 19. ミドルクラスと教育 20. 前回に続く 21. ミドルクラスと余暇 22. ミドルクラスの政治的関心 23. ミドルクラスと政治リーダー 24. まとめ

科目名	地域文化研究(日本の民俗藝能) 2 (94年度以降) 日本文化特殊講義A (93年度以前)	担当者名	飯島一彦

講義の目標		日本人の生活の中に息づく藝能、すなわち民俗藝能は、現在でも日本の各地で伝承され演じられている。そこでは、長い年月の中で培われた日本の民衆の生活感覚や価値観が、現在でも濃厚に感じ取れる。表面的にはアメリカナイズされたごとくに見えて、モダーンな我々日本人の生活は、実は、一皮めくれば千数百年以前の日本人の精神生活と同質の原理によって、多くは支配されているのだが、それを体感的知識として手に入れ、考えることを目標とする。
講義概要		私が現地で取材し、実写したビデオを中心にして、民俗芸能の映像を見ながら、それを題材とした講義を進める、常日頃のフィールドワークの成果をもとにするので、扱う民俗芸能自体は未定である。前期中に、クラスでフィールドワークを行なう。また夏期休暇中には各自のフィールドワークを課する。後期は、それをもとに発表形式の授業をする。
使用教材	テキスト	・『日本の伝統芸能』錦正社
	参考文献	・『日本歴史と芸能』平凡社 ・『芸能の原風景』みづき書房 ・その他、教室で指示する。
評価方法		夏期休暇中のフィールドワークのレポート、及び冬期休暇中の課題レポート。提出しない者は評価の対象としない。
受講者に対する要望など		授業の一環として行なうクラスのフィールドワークに必ず参加すること。もちろん各自のフィールドワークもしなければならないので、手間暇を惜しまず身体を動かし、文献を読み、調査する根気と体力が必要。

年間授業計画	1.　授業ガイダンス、民俗芸能とは① 2.　民俗芸能とは② 3. 4. 5. 6. 7.　時宜に応じて、ビデオを用いて講義。 8. 9. 10. 11. 12. 13.　前期中に１回、課外でフィールドワークを行なう。 14.　夏期課題（各自のフィールドワーク）について、各自報告。 15. 16. 17. 18. 19.　時宜に応じて、ビデオ等を用いて、講義又は発表。 20. 21. 22. 23. 24.　一年間のまとめ。

科目名	地域文化研究（ラテンアメリカ）3（94年度以降）	担当者名	佐藤勘治

講義の目標		ラテンアメリカ・カリブ海地域入門の授業である。私たちのラテンアメリカに関する認識は、高校までの教育の欧米偏重から、きわめて乏しい。この講義では、多様な側面から現代ラテンアメリカの特質に光をあて私たちの世界認識を広げることを第一の目的にする。さらに、単なる一地域理解にとどまることなく、現代世界が直面している諸問題（文化共存、民族共存など）について、ラテンアメリカを通して考えたいと思う。
講義概要		前期ではラテンアメリカの歴史を現代的問題関心から論じ、現代ラテンアメリカの成立の特質を明らかにする。後期では、現代の文化・社会・経済・政治の各分野についての概説と特定テーマをきめて論じる授業を交互におこないたい。授業では、映像、音楽、新聞記事をふんだんに使って、受講者の知識の補強をはかるほか、参加型の授業も何回か試みたいと思う。一カ国の専門家になることのおもしろさと大変さを体験的にしることができるよう、たとえば、何人かの学生に個別の国をわりあて、一年間にわたって動向を追ってもらう。
使用教材	テキスト	プリントを用意する。
	参考文献	
評価方法		授業中の発言、授業での発表およびレポート
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 「ラテンアメリカ」はいつ形成されたのか？：ラテンアメリカ主義（導入１） 2. アジアとラテンアメリカ（導入２）：私たちとラテンアメリカはどのように関係しているのかを、フィリピンあるいは移民という問題から考える。 3. 1492年の世界史的意味 4. 先住民の征服は終わったか？：カリブの征服、アステカの征服、インカの征服 5. 先住民の征服は終わったか？：19世紀、20世紀の征服事業 6. グアダルーペの聖母：聖母出現の物語から、インディオがどのようにキリスト教を受容していったかを考える。／ラテンアメリカ・バロック 7. 19世紀初頭の独立：ハイチの独立／ボリバル・イダルゴ・サンマルティン 20世紀における独立をめぐる問題：プエルトリコとフランス海外県 8. 欧米とラテンアメリカ　19世紀：メキシコ・アメリカ戦争／ファレス／マキシミリアン皇帝 9. 欧米とラテンアメリカ：黒人奴隷の導入とカリブ海域史 10. パナマ建国と運河建設／キューバ革命：ゲバラの問いかけていること 11. 米国とラテンアメリカ（米西戦争百年記念） 12. 現代のラテンアメリカ：チリ革命・ニカラグア革命とその後 13. 予備 14. ラテンアメリカの民族問題：インディオとメスティーソ（リゴベルタ・メンチュウの望み） 15. ラテンアメリカの音楽：ボブ・マーリーとレゲー／タンゴ／新しい歌運動など 16. ラテンアメリカの文学：ガルシア・マルケスなど 17. ラテンアメリカ政治：権威主義体制論を中心に 18. ラテンアメリカの政治：ペロニズム（エビータ） 19. ラテンアメリカの政治：メキシコ制度的革命党 20. ラテンアメリカの経済：自由貿易帝国主義論、従属論、世界システム論など 21. ラテンアメリカの経済：NAFTA 22. 米国のなかのラテンアメリカ：ラティーノ 23. ラテンアメリカ研究のすすめ 24. 予備

科　目　名	地域文化研究(スペイン：歴史と文化) 4 (94年度以降)	担当者名	野々山　ミチコ

講義の目標		スペインの実像を、さまざまなトピックを通し、現代とその歴史的背景を交互に解説することによって、理解させる。その為に前期はビデオ教材を用いる。
講義概要		前期はスペイン人の特性をライフスタイル、言語表現などに依って、解説する。現代を基点とするが、その様な特性を育んできた歴史的歩みにも触れる。 後期はフランコ以後の価値観の変遷を政治・宗教・女性、家庭などの側面から考察する。
使用教材	テキスト	野々山真輝帆著『すがおのスペイン文化史』(東洋書店)
	参考文献	・若松隆『スペイン現代史』　岩波新書 ・斉藤孝編『スペイン・ポルトガル現代史』　山川出版社 ・野々山真輝帆『スペイン辛口案内』　晶文社
評価方法		前期は講義と教科書にもとづくテスト（ノート・教科書持ち込み可） 後期は講義に基づくテスト（ノート持ち込み可）
受講者に対する要望など		講義に出席し日本の問題と比較しまじめに考えてほしい。

年間授業計画	1. ビデオ（スペインの歴史と文化） スペイン人の宿命観 2. ビデオ（スペインの歴史と文化） スペイン人の宿命観 3. ビデオ（スペイン全土） スペイン人と労働 4. ビデオ（スペイン全土） スペイン人と労働 5. ビデオ（マドリッド） スペイン人と時間 6. ビデオ（バルセロナ） スペインの女性 7. ビデオ（テレビのコマーシャル） スペインの女性 8. ビデオ（テレビのコマーシャル） スペインの若者 9. ビデオ（テレビのコマーシャル） スペインの若者 10. ビデオ（スペインの若者） スペイン人のライフスタイル　冠婚葬祭、クリスマス 11. ビデオ（スペインの若者） スペイン人のライフスタイル　挨拶、名前、入浴 12. フランコ後の価値観の変遷　政治 13. 〃　宗教 14. 〃　家庭 15. 〃　教育 16. 〃　ラテンアメリカとの関係 17. 社会問題　ホームレス 18. 〃　麻薬 19. 〃　老人 20. 〃　ジプシー 21. ナショナリズム　バスク 22. 〃　カタルニア 23. 映画　トリスターナ 24. 〃　〃

科目名	地域文化研究（イスラム(原理)主義過激思想）5（94年度以降） 比較文化論特講A（93年度以前）	担当者名	藤原和彦

講義の目標		いま中東世界では「イスラム原理主義」と呼ばれる文化（宗教）・政治運動が目立つ。イラン、アフガニスタン、スーダンでは、原理主義信奉者が政権を構成し、アルジェリア、エジプト、サウジアラビア、バーレーンなどでは原理主義勢力が既存政権打倒を狙って闘争を続けている。本講義では、これら原理主義運動の動向を具体的に分析しながら、同運動が拠って立つ思想・文化、つまり「イスラム主義」過激思想の把握を目指す。
講義概要		前期は、主としてエジプトの原理主義運動に取り組む。エジプトの近代原理主義運動は主流の「ムスリム同胞団」と、その分派ともいうべき、さまざまな過激組織から構成される。1997年11月ルクソールで観光客襲撃テロを起こした「イスラム集団」が、その代表的な組織だ。これら過激組織の具体的な動向を分析するとともに、これら組織が共通して掲げるクトゥビズム（ムスリム同胞団60年代のイデオローグ、サイイド・クトゥブの思想）の理解に努める。後期では、中東他地域の原理主義運動の現状を取り上げ、とくにアルジェリアにおけるクトゥビズムの急進化に焦点を当てる。
使用教材	テキスト	とくに指定しないが、『現代用語の基礎知識』（自由国民社）内『国際情勢・中東』の『イスラム諸相』を奨める。
	参考文献	・GILLES KEPEL, MUSLIM EXTREMISM IN EGYPT-THE PROPHET AND PHARAOH-, 1985 ・立花亮『イスラム主義の真実』（勁草書房）1996
評価方法		評価は、後期提出のレポートによる。
受講者に対する要望など		とくになし。

年間授業計画	1. ［イントロダクション］イスラム教とキリスト教、ユダヤ教との関係。預言者と予言者の違いなど。 2. ［アラビア語］イスラム教とアラビア語の関係。アッラーのアラビア語による啓示など。 3. ［ムハンマド］イスラム教の創始者ムハンマドと、その生涯。 4. ［ジャーヒリーヤ論］ムハンマドのスンナ（社会習慣）革命。とくに、後の原理主義運動の基本思想となるジャーヒリーヤ（無明）論について。 5. ［神秘主義］ナクシュバンディ教団などイスラム神秘主義の概要。 6. ［原理主義の出発］エジプトの近代原理主義主流組織「ムスリム同胞団」の創設と時代背景について。 7. ［クトゥブの登場］現代原理主義過激思想の祖とされるムスリム同胞団のイデオローグ、サイイド・クトゥブの生涯と思想について。 8. ［タクフィール団］クトゥブ主義に影響されて輩出したエジプトのさまざまな過激原理主義組織の活動と思想。 9. ［サダト暗殺］現在のエジプト過激原理主義運動の「原点」とされるサダト前大統領暗殺事件（1981年10月）の経緯。 10. ［アフガン戦争］アフガニスタンでソ連軍と戦ったアラブ人義勇兵をアフガーニーと言う。帰国後の彼らの活動と各国原理主義運動の過激化を取り上げる。 11. ［ネットワーク］アフガニスタン、ボスニアを拠点とした原理主義運動のネットワークを取り上げる。 12. ［観光客テロ］エジプトの過激原理主義最大組織「イスラム集団」が採用する新戦術とその影響。 13. ［アルジェリア１］アルジェリア原理主義運動の中核「イスラム救済戦線（FIS)」について。 14. ［アルジェリア２］クトゥブ主義の急進化。「タクフィール・ル・ジュムフール（大衆の処刑)」理論について。 15. ［サウジアラビア１］保守的な原理主義体制サウジ王政の歴史。 16. ［サウジ２］サウジの新原理主義運動。オサマ・ビン・ラーデンの活動を取り上げる。 17. ［バーレーン］バーレーンで続く原理主義運動の経緯とサウジ、イランなど周辺諸国との関係。 18. ［トルコ１］トルコ原理主義政党「繁栄党」の現状とエルバカン同党党首の原理主義思想について。 19. ［トルコ２］トルコの原理主義運動とイスラム神秘主義ナクシュバンディ教団との関係。 20. ［トルコ３］中央アジアにおけるイスラム教徒トルコ族の宗教活動。中国のナクシュバンディ教団の動向など。 21. ［イラン１］イラン・イスラム革命（1979年）の経緯。ペルシャ湾「力の空白」問題など。 22. ［イラン２］シーア派におけるホメイニ主義の革新性。とくにベラヤティ・ファギー（イスラム法学者による支配）論の革命性を取り上げる。 23. ［アフガニスタン］原理主義政治組織タリバンの政権樹立の経緯とタリバン原理主義思想の保守性を取り上げる。 24. ［スーダン］スーダン原理主義政権の現状。

科　目　名	地域文化研究(エピソードから考える韓国の歴史)6(94年度以降)	担当者名	朴　　聖　雨

講義の目標		韓国人の生活や文化には5千年に近い歳月にわたる大陸諸国家や南方の日本との交流の中で育まれてきた奥深く秘められた独特の知恵とアイディアとパワーがある。本講義では韓国の国家成立時代から今日にいたる歴史を人物や事件等の具体的な実例やエピソードを紹介することで秘められた知恵やアイディアやパワーを体得させることを目的とします。
講義概要		古朝鮮時代から三国時代、統一新羅時代、高麗時代、朝鮮時代、日本の植民地時代、大韓民国時代において、それぞれの時代を象徴する人物の事績や事件、発明、発見、国難克服物語等を中心にビデオ等映像資料を用いながら学習します。
使用教材	テキスト	ソンミョンホ著『物語韓国史』(ソウル芸林堂)、1990、を翻訳しプリント配布
	参考文献	『韓国人の情緒構造』、李圭泰著、尹淑姫他訳　新潮社、1996
評価方法		毎時間の学習過程評価、出席状況、期末テストを総合して判定します。
受講者に対する要望など		隣国である韓国の長い歴史は様々な卓越した人物を輩出して来ました。その人物の知恵や意気をぜひ学んでいただきたいです。

年間授業計画	1. 天神（ファンウン）の降臨と熊女との結婚による檀君始祖の誕生と朝鮮の開国。 2. 古朝鮮の八条の禁法（掟・おきて）と天を祭る行事 3. 中国漢の７代皇帝武帝の侵略に対する抗戦と楽浪文化の浸透 4. 高句麗始祖朱蒙の名弓と魚の群れが橋をなして軍隊を渡してくれる。乙支文徳将軍が隋の大軍を破る。 5. 百済の始祖温祚王の誕生と開国、近肖古王時代の日本への文化伝承 6. 新羅の始祖朴赫居世の卵生物語と新羅の「花郎道」の世俗五戒花郎官昌の壮烈な最期と三国統一、太宗武烈王の海中陵 7. 新羅の詩文学「郷歌」の作品鑑賞 8. 新羅の巨人、元暁大僧正と黄巣の反乱を檄文で声討した崔致遠 9. 高麗太祖王建の人間的度量の大きさと仏教による国家の鎮護 契丹、蒙古の侵略撃退と八万大蔵経、高麗磁器の秘密 10. 〃 11. 李成桂による近世朝鮮建国と無学大師の風水観でのソウル開都 12. 世宗大王の国家安保の拡充政策とハングル創製をはじめとする文化の高揚 13. 死をもって忠誠をつくす、死六臣の壮烈な最期と儒教の教え 14. 朝鮮の儒教の文化と家庭道徳の基本となる「三綱五倫」 李朝白磁の優秀さ 15. 壬辰倭乱を克服した義兵の忠節 16. 清の侵略に対抗した儒士の心意気 17. 実学者群の出現と「実事求是」の活性化運動 18. 東学民衆革命運動と甲午更張 19. 日本の侵略と植民地下の解放闘争 大韓民国臨時政府（上海）の樹立と安重根の活躍 20. 3.1独立運動の展開 21. 8.15の民族解放と大韓民国政府樹立 22. 朝鮮戦争の勃発と民族再生の努力 23. 朴正熙の祖国中興と近代化政策 24. 1988年のオリンピック開催とそれ以後の韓国

科　目　名	地域文化研究（西洋美術史）7（94年度以降） 西洋美術史（93年度以前）	担当者名	前　川　久美子

講義の目標		14、5世紀のイタリアとアルプス以北の絵画作品の分析を通して、西洋美術史の諸問題を概観する。
講義概要		1～4週で完結するテーマごとに、スライドを使い講義形式で進める。
使用教材	テキスト	プリント。
	参考文献	授業時間中に話す。
評価方法		テスト。
受講者に対する要望など		次ページに記す計画が実際に期日どおりに進むことは保証の限りではない。

年間授業計画	1. イントロダクション 2. 14世紀前半のイタリア美術：ルネッサンスと中世 3. ジオット作『アレーナ礼拝堂壁画』：キリスト教図像学の伝統と展望 4. 〃 5. 〃 6. 7. 絵画の物語叙述：絵画表現の様々な可能性 8. 〃 9. 14世紀後半のイタリア美術：ペスト後のイタリア絵画 10. 〃 11. 14世紀の北方美術：写本装飾の展開 12. 〃 13. 絵画ジャンルと技法 14. 芸術家と社会 15. 〃 16. 15世紀始めのイタリア美術：新たな表現の成立 17. マザッチオ他作『ブランカッチ礼拝堂壁画』 18. 〃 19. 遠近法 20. 15世紀前半の北方美術：細密描写と風景 21. 〃 22. 隠された象徴主義 23. 鑑賞者と絵画 24. 15世紀の北方とイタリア

科目名	地域文化研究(中洋ーネパール・インド・チベットーの社会と文化) 8 (94年度以降)	担当者名	三本　茂

講義の目標	よく世界の文化を「西洋」と「東洋」の二つの地域に分け比較したりするが、両者の間には「中洋」と呼ばれるべき特有の文化を持つ広大な地域が広がっている。 中洋はほぼトルコからバングラディシュあたりまでの地域を含んでいるが、担当者が訪れたことのあるネパール、インド、チベットの社会と文化の特徴を紹介し、各地域を結ぶ要因についても触れたい。 また、地域文化間の交流のあり方についても考えてみたい。出来るだけ日本の社会と文化に関連付けながら述べたいと考えている。	
講義概要	ネパール、インド、チベットの歴史を辿り、各地域の社会構造や日常生活の様子を出来るだけ映像を通して紹介する。 また、地域間の交流のひとつの形としての探検の事例についても触れる予定である。	
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	必要に応じて紹介する。
評価方法	原則的には前期のレポートと後期の筆記試験の結果を併せて評価するが、そのほかにレポートの提出を求めることもある。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 中洋の国々で出会ったこと、考えさせられたこと 2. ネパールの歴史 3. ネパールの社会構造 4. ネパールの文化 5. ネパールの宗教 6. インドの歴史 7. インドの社会構造 8. インドの文化 9. 〃 10. インドの宗教 11. チベットの歴史 12. チベットの社会構造 13. チベットの宗教 14. チベットの文化 15. 〃 16. 〃 17. 三つの地域文化を結ぶもの 18. 〃 19. 〃 20. 〃 21. 文化交流としての探検 22. 23. 24.

科目名	比較文化論特殊講義A（カリブ海域の民族と文化）1（94年度以降）	担当者名	井上兼行

講義の目標		日本からは、政治・経済・文化などあらゆる面で最も遠い位置にあるカリブ海域の民族と文化について、その特質をおおよそ知る。
講義概要		カリブ海域は他に類を見ない独特の歴史をもち、それを基礎に民族と文化が築かれている。そこで歴史をある程度時間をかけて明らかにし、その上に築かれた民族及び、文化の一つである言語について述べ、さらに他の文化についても言及して、その特徴や現代における問題点を探ってゆく。
使用教材	テキスト	なし。
	参考文献	随時紹介する。
評価方法		登録者の数による。
受講者に対する要望など		なるべく２年生以上、また文化人類学の単位を取っていることが望ましい。

年間授業計画	
	1. 序——カリブ海域概観
	2. 歴史——（1）コロンブス到来。スペイン人による支配。
	3. 〃　（2）16C後半、英・仏などの新興勢力の侵入、植民地化。
	4. 〃　（3）17C～18C後半、砂糖きびプランテーションを通じての植民地の繁栄。
	5. 〃　（4）砂糖貿易衰退、奴隷勢力の伸長。その一つの象徴としてのハイチ独立。
	6. 〃　（5）19C前半からの奴隷制廃止。外国からの労働力輸入。そして複雑な民族社会へ。
	7. 民族構成からみたカリブ海域社会（1）
	8. 〃（2）
	9. 〃（3）
	10. 〃（4）
	11. 〃（5）
	12. 複雑な言語、また複雑な言語構成（1）
	13. 〃（2）
	14. 〃（3）
	15. 〃（4）
	16. 以降は文化の各論である。テーマは未定。これまでの話の脈絡から決めてゆく。
	17.
	18.
	19.
	20.
	21.
	22.
	23.
	24.

科目名	比較文化論特殊講義A（東西文化比較）2（94年度以降） 西洋文化特殊講義A（93年度以前）	担当者名	近衛秀健

講義の目標	情報過剰だと判断経験の未熟な人は事物の真相を見極めることが難しい。しかし今日の様に社会の変革期にあるとヴェテランでも今までの尺度が現在の指標にならない。人間は直接体験できる身辺生活以外の事柄をどの程度正格に認識し得るものだろうか。我々の情報源はTVであり、新聞雑誌である。しかしそこには売らんかな興味本位の事象が踊っている。情報選択の技術が今日程必要な時代はない。そのための個人の判断力の養成の一助となさんとするものである。	
講義概要	情報は個々の現象の現在状況について語られる。しかしその原因は過去の人間の事績の集積にある。われわれは日本にいるが、その生活様式、法制、経済、交通、流通のすべてにおいて西洋と関係ないものがない。今や日本文化も東洋的要素より西欧的なものの方が多くなって来ている。しかし日本人の心情はこの島の住民らしく非常に閉鎖的である。このわれわれが如何に外部事象を理解して行くかを、その日その日の情報を材に分析していく。	
使用教材	テキスト	毎日の新聞等
	参考文献	
評価方法	前期後期にそれぞれリポートを課す。	
受講者に対する要望など	自分は自分であり自分達の一部ではない。集団授業でなく、一個人として個人の講義に向き合ってもらいたい。	

年間授業計画	1. 原則としてその日のニュースを分析する。 2. 原則としてその日のニュースを分析する。 3. 原則としてその日のニュースを分析する。 4. 原則としてその日のニュースを分析する。 5. 原則としてその日のニュースを分析する。 6. 原則としてその日のニュースを分析する。 7. 原則としてその日のニュースを分析する。 8. 原則としてその日のニュースを分析する。 9. 原則としてその日のニュースを分析する。 10. 原則としてその日のニュースを分析する。 11. 原則としてその日のニュースを分析する。 12. 原則としてその日のニュースを分析する。 13. 原則としてその日のニュースを分析する。 14. 原則としてその日のニュースを分析する。 15. 原則としてその日のニュースを分析する。 16. 原則としてその日のニュースを分析する。 17. 原則としてその日のニュースを分析する。 18. 原則としてその日のニュースを分析する。 19. 原則としてその日のニュースを分析する。 20. 原則としてその日のニュースを分析する。 21. 原則としてその日のニュースを分析する。 22. 原則としてその日のニュースを分析する。 23. 原則としてその日のニュースを分析する。 24. 原則としてその日のニュースを分析する。

科目名	比較文化論特殊講義A(能楽における中世武士の諸像)3(94年度以降) 日本文化特殊講義A(93年度以前)	担当者名	瀬尾菊次

講義の目標		古典とか伝統とかの言葉を冠して難解な芸術とみなされ、とかく敬遠されている。「能楽」を楽しんで鑑賞する舞台芸術であると理解すること。「能楽」の全体像を学問的にのみ解釈するのではなく、上演されたビデオを鑑賞しながら、現役の能役者の体験を通じた講義をする。
講義概要		三百曲近くある作品の中から、中世の武士を主人公とした作品を選曲し、一曲の構成を解釈し、上演されたビデオを参考に能楽の全体像を解明し、主人公の生き方から日本歴史との接点をはかり、昔からの生活習慣・年中の行事など日本人の風習をも考察する。 本年度は「木曽義仲」、「源頼政」、「斉藤実盛」を取り上げる。
使用教材	テキスト	関連資料のコピーを配布する。
	参考文献	授業時に紹介する。
評価方法		前・後期レポート。能楽鑑賞レポート。
受講者に対する要望など		参考文献丸写しのレポートは採用しない。講義内容からレポートすること。年一回の能舞台での鑑賞を義務とする。

年間授業計画	
	1. 年間講義のあらまし。時代背景など。 2. 能楽を演じる各役。流儀について。 3. 能の現行曲。前期レポートとの関連。 4. 五節句のはなし。 5. 能舞台について。 6. 源頼朝の生涯。 7. 能『頼政』の解説・鑑賞。 8. 能の作品構成。夢幻能と現在能。 9. 各役の登場・退場。『井筒』を題材として。 10. 舞事について。『井筒』を題材として。 11. 現代の能役者。薪能について。 12. 現代の能の活動について。 13. 木曽義仲の生い立ち。 14. 能『木曽』を題材として、時代背景。 15. 「更衣」について、日本人の服装。 16. 冠婚葬祭のしきたり。 17. 人生儀礼について。 18. 斉藤実盛の人生。能『実盛』を題材にとして。 19. 能装束について。 20. 能の歴史について。 21. 能の題材について。 22. 十干十二支のはなし。 23. 舞台鑑賞するにあたって。 24. まとめ。

科目名	比較文化論特殊講義A（神話・説話の世界）4（94年度以降） 日本文化特殊講義A（93年度以前）	担当者名	肥田野　昌之

講義の目標	『古事記』『日本書紀』『風土記』『日本霊異記』などの古文献を読みながら、古代の神話や説話について概観する。そして古代人の豊かな心をさぐるとともに、その文学的特質を考える。また日本周辺の神話からさらにギリシア神話など世界各地の神話との類似性や世界大拡布の説話との関連性についても言及したい。	
講義概要	前期は主として、黄泉国訪問・天の石屋戸・ヤマタノオロチ退治・海幸山幸などの神話について、古代祭式や氏族伝承の問題などと関係させて解説したい。 後期には、昔話「蛇聟入」「鳥女房」と親近な関連にある三輪山型説話や羽衣説話など、いわゆる異類婚姻譚といわれるものを中心にして広く伝説や仏教説話について考察してみたい。	
使用教材	テキスト	阿蘇瑞枝他『古代説話』笠間書院
	参考文献	西郷信綱『古事記の世界』（岩波新書）
評価方法	授業への出席および年度末試験によって決定する。	
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 文献以前の歴史を概観するとともに、年間の講義概要を説明する。—特に魏志倭人伝を中心に 2. 天地創造の神話—記・紀を中心として、世界の創成神話についても言及する。 3. 黄泉国訪問—オルペウス型との比較や呪的逃亡譚について 4. 天の石屋戸神話—特に鎮魂の祭儀礼との関連について 5. 八俣大蛇退治—ペルセウス・アンドロメダ型との比較や生贄伝説について 6. 大国主神の神話—通過儀礼および死と復活・ジェソン型についても考える。 7. 天若日子神話—ニムロドの矢との関連および招魂の歌舞など 8. 国譲りと天孫降臨—神々と神社について述べ、大嘗祭儀礼との関連についてもふれる。 9. 木花之佐久夜毘売—聖婚儀礼について考え、また世界各地の死の起源譚について述べる。 10. 海佐知毘古と山佐知毘古そのⅠ—失われた釣針型との比較や隼人舞の起源について 11. 海佐知毘古と山佐知毘古そのⅡ—蛇女房・竜女説話との関連について考える。 12. 日本神話のまとめとして、その構造・特色や北方系・南方系および天孫系・出雲系などについて考察する。 13. 異類婚姻譚について、そのⅠ—三輪山型と昔話「蛇聟入」について 14. 異類婚姻譚について、そのⅡ—丹塗矢型（加茂社縁起）および蟹満寺縁起など 15. 異類婚姻譚について、そのⅢ—羽衣説話（白鳥処女説話）と天人女房・鶴女房など 16. 異類婚姻譚について、そのⅣ—浦島説話（仙境滞留譚）と竜宮女房や亀女房について 17. 異類婚姻譚について、そのⅤ—信田妻・女化稲荷と狐女房・芦屋道満大内鑑など 18. 沙本毘古と沙本毘売—ヒメヒコ制やヲナリ信仰についても説明する。 19. 倭建命—異常誕生・怪力・クマソ退治・悲劇的末路・神に転生など貴種流離譚との関連でも考える。 20. 天之日矛—日光感精説話や卵生説話について述べ、百済・新羅・高句麗および中国説話との関連についても考える。 21. 赤猪子—赤猪子説話と皿々山説話について述べ、さらにその歌謡についても考える。 22. まとめとしてプリント四枚を配り、年度末試験についての出題傾向とその対策を説明する。 23. 筑波と富士・蘇民将来—祖神巡行説話・外来者歓待譚および祇園社縁起について 24. 道場法師譚および力女譚—異常出産・異常な怪力・鬼退治など金太郎譚・桃太郎譚との関連についても考える。

科目名	比較文化論特殊講義A（古代ギリシャ社会における日常生活）5（94年度以降） 西洋文化特殊講義A（93年度以前）	担当者名	古川堅治

講義の目標		本年度は、「古代ギリシアの市民生活」と題し、都市国家（ポリス）アテナイの人々の日常生活、マケドニアの宮廷での人々の生活、オリエント各地のギリシア人都市の人々と農村住民の生活などを具体的に追うことによって、古代ギリシア・ヘレニズム文化の特質を考えてみたい。そのことはとりもなおさず、現代社会の特質をもその相違性において把え返すことにもつながる。その様なパースペクティブの中で歴史を考えることが本講座の目的である。
講義概要		講義は、阿刀田高『アレクサンドロス大王』（講談社）の歴史小説を素材にしながら概説的に進めていくが、関連するテーマについては、ビデオなど映像資料も駆使して理解を深める一助にしたい。毎回できるだけテーマごとに課題を設定して考えていくようにする。記憶するとか、暗記してもらうとかというものではないので、アト・ホームな雰囲気の中で自らの考え、感想なりがわきあがるように期待する。
使用教材	テキスト	特に使用することはしない
	参考文献	阿刀田高『アレクサンドロス大王』（講談社） その他は、その都度指示する。
評価方法		前・後期二回のレポートと数回の小レポートで評価する。テーマ、枚数、〆切日等については授業中に指示。
受講者に対する要望など		積極的な姿勢で参加することを望む

年間授業計画	1. 「はじめに」 ① 年間授業計画の概要　② 「日常生活史」の意義 2. 「1．ポリスの構造」 ① 空間構造　② 社会構造 3. 「2．アゴラの市民生活」 ① 弁論術と裁判：市民生活を支える「弁論術」と裁判の関係を扱う 4. ② 市民の一生：平均的市民の一生をあとづける。 5. ③ 「結婚」の社会的意味：アテナイ市民にとって「結婚」とはどのような社会的意味をもつのかを考える。 6. ④ 女性と子供：古代社会の中に占める女性の位置と子供の扱いについて考える。 7. ⑤ 宗教と祭典（その1） ディオニュシア祭：春の祭典ディオニュシア祭と演劇の関係について考える。 8. ⑥ 宗教と祭典（その2） パンアテナイ祭：夏の祭典パンアテナイ祭と市民の国家意識について考える。 9. ⑦ アテナイ民主政とその限界（その1） 民主政の成立について考える。 10. ⑧ アテナイ民主政とその限界（その2） 民主政の構造とその限界について考える。 11. 「3. マケドニア王国とギリシア世界」 領域国家とポリス国家の特質について考える。 12. 「4. アレクサンドロスの誕生と成長」 アレクサンドロスの若き日の実像について考える。 13. 「5. カイロネイアの戦い」 ポリス国家の自治の終焉について考える。 14. 「6. アレクサンドロスの東方遠征（その1）」 アレクサンドロスのペルシアの遠征をあとづける。 15. 「7. アレクサンドロスの東方遠征（その2）」 アレクサンドロスのインド、中央アジアへの遠征をあとづける。 16. 「8. ヘレニズムの文化変容（その1）」 アレクサンドロスの東方遠征によって、ギリシア文化がどのように普及したかを考える。 17. 「9. ヘレニズムの文化変容（その2）」 アレクサンドロスの東方遠征によって、現地文化がどのような影響を受けたか考える。 18. 「10. アレクサンドロスの死と伝説化」 アレクサンドロスの死後、その伝説化がいかにしてなされたかをあとづける。 19. 「11. マケドニアによるギリシア支配」 アレクサンドロスの死後のギリシア本土、オリエント各地の状況について考える。 20. 「12. 「ヘレニズム」の歴史的意義」 ヘレニズム文化の世界史的意義について考える。 21. 「13. 古代ギリシア文化の歴史的意義」 古代ギリシアの古典文化の世界史的意義について考える。 22. 「14. ビデオ：アレクサンドロスの事蹟を訪ねて（その1）」 23. 「15. ビデオ：アレクサンドロスの事蹟を訪ねて（その2）」 24. 「16. まとめ」 一年間の総括

科目名	比較文化論特殊講義A(日韓文化事例の比較)6(94年度以降)	担当者名	朴　聖雨

講義の目標		異文化の相互理解は国際社会の平和と安全保障に欠かせない要件であります。ただ異文化の正しい「理解」や「知識」はなによりもまず自文化（日本）を相対化し異文化（外国）と対等に比較・分析することを通じて得られるものです。 本科目では日本文化（自文化）と韓国文化（異文化）の具体的事例を比較・考察することを中心に、相互依存の深まるグローバル社会をより深く理解する方法を身につけ、日本と韓国の文化の真のあり方を明らかにします。
講義概要		日韓両国の古代から現在にいたる次の共通事例をとりあげ対照吟味します。(1)日韓の神話の特徴の比較、(2)外来文化の受け入れ方の違い、(3)民話や伝説の相違、(4)詩歌・文芸・娯楽、(5)武士道と花郎道、(6)家、学校、会社、社会、国家のあり方、(7)衣・食・住、(8)経営と経済、(9)村八分と郷約、(10)対外交渉、(11)政治のしくみなどについて比較文化的手法で考察します。
使用教材	テキスト	日韓間の文化比較の諸資料をプリントにして配布する。
	参考文献	・李瑜煥著『韓国から見た日本文化』　五月書房、1991年 ・新田義之編『文化の諸相―比較文化を学ぶために』　大学教育出版、1997年 ・奥野弘著『カンヌマリコワヤ』　幻想社、1988年 ・種村完司他著『豊かな日本の病理』　青木書店、1996年 ・日本と韓国の習俗や行事に関するビデオ集
評価方法		毎時間の過程評価、出席状況、期末テスト等を総合して判定します。
受講者に対する要望など		具体的な事例を中心に考察をすすめて行くが、とくに日本人や日本社会の古くからの習俗やタブー、月並みな言動やしぐさなどについてその意義や意味を考え直してほしい。

年間授業計画	1. 文化は人間形成の「鋳型（いがた）」であり、生れ育った社会の文化が異なると必然的に「人となり」や「考え方や」や「行為のスタイル」が異なることを実例によって確かめます。 2. 中国からの儒教や仏教のうけ入れ方でも、文化の異なる日本と韓国では異なることを僧侶の私生活、仏寺の世代継承、信者との交流の有様、儒教の生活化で確かめる。 3. 自文化と異文化間の衝突や葛藤が普通考えられているより多様かつ深刻であることを個人間、社会や国家間の実例をたしかめながら学習します。 4. 以上のような日韓間の文化比較による諸事例からして異文化への相互理解が相互の安全保障や共生に不可欠であることをユネスコ憲章などを考察しつつ学習する。 5. 異なる社会や国家の文化を比較考察する方法論や技法、その主な代表的成果等を紹介します。 6. 日本と韓国の開国神話を「古事記」と「三国遺事」の翻訳文を比較、考察しながらそこからうかがえる人間観、来世観、倫理観、社会統治思想などをたしかめます。 7. 日本の「武士道」とそれに見あう韓国の「花郎道」の成立過程と編成教育理念、活躍の実態、武勇伝、エピソードなどをとりあげ比較考察します。 8. 日本と韓国の道徳規範の相違や軽重を「忠」と「孝」の徳目にまつわるエピソードをとりあげ、比較、考察します。 9. いくつかの民話や伝説をとりあげ、そのストーリーの筋や結末等を分析比較することで日本と韓国の発想や考え方の特徴を学習します。 10. 日本のコミュニティにはかつて「村八分」という制裁規範があったが、韓国のばあいにも「郷約」というこまかい行動制裁規範があり両者を比較考察します。 11. それぞれの歳時暦にそって日韓の民俗行事をとりあげ、その由来や背景、行事の進行過程などを調べ、共通点や相違点を確かめます。 12. 正月と端午、寒食、秋夕（お盆）などは韓国での大事な年中行事であるが、日本との比較でその特質を明らかにします。 13. 日韓両国における冠婚葬祭の基本的スタイルとその背後にある考え方や習俗、祭り、先祖に対する忌祭などを相互比較し違いを理解する。 14. コミュニティが春季、秋季に村のトーテムと言える巨樹や山の神に捧げる祭祀である「山神祭」について、日本の「村祭り」と比較考察します。 15. 韓国の先祖に対する年例の忌祭は、家族のあり方や‘きずな’をたしかめるきわめて重要な行事であるが、その実例をビデオで視聴し考察します。 16. 韓国と日本のそれぞれに伝わる民間の娯楽の様々について調べその特徴や由来を比較、考察します。 17. 日韓両国における教育制度の古くから現代までの変遷をたどり比較考察します。 18. 現代の教育とくに学校教育や入試準備教育を中心に日韓両国の教育文化の特徴を比較・分析します。 19. 現代の日韓の若者文化の多様な分野の事例について考察します。関心分野、生活モデル、交友、異性交際、ファッション観、人生観等。 20. 〃 21. 日韓の政治文化の比較を統治形態、政治家の日常、政治活動の諸相、選挙の実態、疑獄事件等について比較・分析します。 22. 企業経営の日韓比較、すなわち日韓における会社文化の共通点や相違点をたしかめ理解します。 23. 日本と韓国の文化比較を通じてとくに興味ある事項について受講者が学習の成果や感想をレポートに作成し発表し討論します。 24. 学習過程をふりかえり今後への課題を語り合います。

科目名	比較文化論特殊講義A（アラブ文化・芸術）7（94年度以降）	担当者名	本田孝一

講義の目標		本講義ではアラブの文化、特にアラブの芸術についていろいろな側面に焦点を当ててその特性について考えます。またある意味で両極端にあるようなアラブ文化と日本文化との対比を通して、21世紀の国際化時代に向けわれわれはどのように生きるべきかを考えます。
講義概要		講師の長年にわたるアラブとの関わりを通して得た体験を中心にお話しします。また授業は映像（映画、ビデオ、スライド等）を多用し、進行させる予定。
使用教材	テキスト	特にありません。
	参考文献	
評価方法		はじめに題を出し、簡単な作文を書いてもらいます。（できたらそれを受講生全員参加の作文集として一冊の本にまとめて印刷する予定。有料。）
受講者に対する要望など		本講座は人数的に多いことを望みません。具体的にはオリエンテーションの最初の時間に教室（中教室）の席に座れる人数だけを原則とします。受講したい人は早めに来て下さい。

年間授業計画	1. Introduction 2. アラブ全体について、「アラブとは何か」ということを考えます。またアラブの風土的特性、彼らのものの考え方にも触れます。 3. アラブの言語であり、イスラム教の言語でもあるアラビア語について、周辺の言語なども紹介しながら考えていきます。 4. アラブの衣食住研究 (1) 5. アラブの衣食住研究 (2) 6. アラブの衣食住研究 (3) 7. アラブ文化の源である砂漠的文化について、その担い手であるベドウィンの生活を紹介し、その特性を考察します。 8. 講評のサウジアラビアにおける砂漠での体験をお話しします。 9. アラブでの芸術全体について、エジプト、カイロにある「イスラム芸術博物館」のビデオを観ながら紹介します。 10. 「アラビアのロレンス」の映画を観ながら、アラブと西欧について考えます。 11. 「アラビアのロレンス」の中で彼の現代的個性に焦点を当てて、なぜ彼が近代史のヒーローにまつり上げられたかを検討します。 12. 「アラビアのロレンス」の「アウトサイダー」としての側面を、彼の自伝『知恵の七柱』から考察します。 13. アラブの宗教である「イスラム教」について全般的に紹介し、その誕生の意味や教義を講師の実体験から探ります。 14. イスラム教の聖典『コーラン』を取り上げ、他の世界宗教との違い、イスラム教徒の考え方などを考えます。 15. アラブの芸術の中で最も際立った位置を占めているアラビア書道芸術について、その名品を鑑賞します。 16. アラビア書道芸術を通してアラブ人の美意識を探ります。 17. エジプト映画「バイナル・カスライン」(エジプトのノーベル文学賞作家の小説)を観ながら、アラブ社会のあり方を考察します。 18. 同映画を通して、アラブ社会の家族や男女の問題について考えます。 19. 同映画をはじめとするアラブの文学について、その全体像を紹介します。 20. 今世紀が生んだアラブ文学の異色作家、詩人であるハリール・ジブラーンについて、彼の代表作『プロフェット』(預言者)を通して考察します。 21. 同作家・詩人の『プロフェット』(預言者)は現代の聖書といわれています。その一部を読みながら、現代に我々が生きる意味を探ります。 22. アラブと関わりの深かった『星の王子さま』の著者、サン・テグジュペリを取り上げ、彼の生き方を見ていきます。 23. サン・テグジュペリの代表作『人間の大地』の一部、特に彼が砂漠で遭難し九死に一生を得た部分を読み、ひるがえって我々のこれからの生き方を考えます。 24. まとめ、講師自身の、アラブとの書道芸術を通しての将来的関わりをお話しします。

科目名	比較文化論特殊講義A（比較思想）8（94年度以降）	担当者名	松丸壽雄

講義の目標	「西洋」と「東洋」、さらに「中近東」文化の思想的基礎の究明とその比較。	
講義概要	現在の世界の危機的状況をどのように考えることができるのか、という問題と取り組む時、西洋と東洋の歴史的・文化的基礎を理解することは必須のこと思われる。この二つの文化圏は異なった思想的基礎の上に立っているので、両者の文化現象を比較検討することによって、その思想的基盤を明らかにしたい。しかし、このような旧来の区分だけては、現在世界が直面している問題を理解する手がかりとしては不十分である。ことに中近東を中心としたイスラム文化圏の世界に与えている影響は無視できない。従って、イスラム文化の思想的基礎にも光を当てたい。	
使用教材	テキスト	なし
	参考文献	講義中に指示
評価方法	受講者が多い場合には、筆記試験も考えられる。受講者数が相応であれば、最低年二回のレポートと授業への貢献度（たとえばディスカッションへの参加）により評価。	
受講者に対する要望など	受講者数いかんに依るが、ディスカッションの時間を設けることを考えている。そこで、積極的にそれに参加する用意のある人（自分勝手にでなく、確かな根拠を持って発言すること）が望ましい。	

年間授業計画	1. 講義の概要説明と補足説明。 2. 「東洋」文化圏とは何か。 3. 中国文化と日本文化 4. 中国文化と日本文化 5. 中国文化と日本文化 6. 儒教文化と仏教文化 7. 儒教文化と仏教文化 8. ディスカッション 9. インド文化と日本文化 10. インド文化と日本文化 11. 仏教文化・儒教文化・ヒンズー文化 12. ディスカッション 13. 「西洋」文化とは何か 14. 西欧・東欧・南欧・北欧 15. ヨーロッパとアメリカ 16. 西洋文化と日本文化 17. 西洋文化と日本文化 18. ディスカッション 19. イスラム文化とは何か 20. イスラム文化 21. イスラム文化 22. イスラム・キリスト教・ユダヤ教・仏教・儒教 23. イスラム・キリスト教・ユダヤ教・仏教・儒教 24. ディスカッション

科目名	日本語学概論	担当者名	金田一　秀　穂

講義の目標		母語である日本語を客観化するための視座を提供すること。日本語は、私たちの思考や感情を決定しているものかもしれない。その可能性や限界を少しでも明らかにしたい。
講義概要		音声、語彙、文法を中心に各外国語との対照も適宜行う。豊かな好奇心と柔軟な発想を持った学生の、物怖じしない活発な発言を期待する。
使用教材	テキスト	使用せず
	参考文献	玉村文郎編　日本語を学ぶ人のために　世界思想社 工藤浩ほか　日本語要説　ひつじ書房 林大編　図説日本語　角川書店（古書）
評価方法		前期試験・後期レポートを予定。
受講者に対する要望など		

年間授業計画

1. 日本語学の領域	国語学・言語学・共時態・通時態
2. 音声	シニフィアン・シニフィエ・拍（モーラ）の種類、数
3. 音声	モーラの構成・アクセントと弁別素
4. 音声	音声と意味・実現形
5. 語彙	一語意識・語彙の分類・出自
6. 語彙	外来語
7. 語彙	相対名詞・指示詞
8. 語彙	語構成・派生語
9. 語彙	数と語彙
10. 語彙	基本語彙・基礎語彙
11. 語彙	造語法・固有名詞
12. 語彙から文法へ	シンタックスと品詞
13. 文法	命題とモダリティー・コトとムード
14. 文法	格。ヴォイス　　可能・受け身・使役
15. 文法	アスペクトモダリティー
16. 文法	文の種類
17. 意味	意味の分類
18. 意味	比喩
19. 意味	構造主義と認知意味論
20. 意味	発話の意味
21. 社会言語学	言語行動論の方法
22. 社会言語学	コードと発信者
23. 社会言語学	受信者と話題
24. 日本語教育	日本語教育の現在

科　目　名	日本語教育概論	担当者名	井　口　厚　夫

（前期完結）

講義の目標	日本語教育とは何か、今日本語教育に何が起きているかを理解する。	
講義概要	このコースでは、日本語教育がどのようなものなのかを紹介し、概観する。併せて日本語教育に関連した諸々の問題にも触れる。 なお、週２回前期完結科目として行うので時間割をよく確認して履修してもらいたい。	
使用教材	テキスト	『日本語教育概論』水谷信子　放送大学教育振興会　¥1,680
	参考文献	
評価方法	前期試験	
受講者に対する要望など	『日本語教授法』の前にこのコースを取ることが望ましい。日本語を外国人に教えることに興味を持つ人は、まずこの授業から入ること。	

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 日本語教育とは何か・日本語教育と国語教育
3. 日本人なら日本語が教えられるか
4. 君の日本語は大丈夫か/日本語教育能力検定試験について
5. 辞書の話/日本語学習者の姿
6. 日本語授業の実際
7. 日本語教育の歴史１
8. 日本語教育の歴史２
9. 教授法あれこれ――その歴史的発展と特長
10. 教授法あれこれ２
11. 新しい教授法とコミュニティブアプローチ
12. 日本語教育と外国語１
13. 日本語教育と外国語２
14. 外国人の日本語
15. 日本語教育の現状１
16. 日本語教育の現状２
17. 海外で教える１
18. 海外で教える２
19. 日本語教師論１
20. 日本語教師論２
21. 日本語教育の将来１
22. 日本語教育の将来２
23. 予備
24. 予備

科　目　名	日本語教授法Ⅰ（94年度以降） 日本語教授法（93年度以前）	担当者名	中　西　家栄子

講義の目標	言語理論及び言語学習理論の理解を深めた上で、日本語教育に当たって必要とされる日本語の知識と具体的な日本語の教授法を習得する。	
講義概要	言語学習・習得理論、それに基づくさまざまな外国語教授法を紹介したのち、日本語教育に関し、教材開発、教案の書き方、教室活動のマネージメント、４技能のレベル別指導方法、評価方法、テストの作り方等、具体的に例を見せながら指導する。特に、言語教育には言語伝達能力の育成が重要であることを強調し、学生には言語運用能力の教育を重視した教案・教材を作成させ、グループワークを通じて言語教育の方法を理解且つ習得させる。文法・語彙指導は特に重視する点で、日本語の文型を言語機能として捉え、それをどのように学習者に紹介・導入するか、導入した後、それをどのような練習を通して習得させるか等、段階的に様々な活動を積み上げていき、最終的には、発話場面や文脈に沿った言語運用ができるように指導することを狙う。	
使用教材	テキスト	中西家栄子・茅野直子『実践日本語教授法』バベル出版 プリントのハンドアウト
	参考文献	・D. スタインバーグ　『言語心理学』　研究社 ・A. C. Omaggio　*"Teaching Language in Context"* ・名柄迪・茅野直子・中西家栄子『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』アルク出版 ・『にほんごのきそ　Ⅰ、Ⅱ―教師用指導書』財団法人海外技術研修協会 ・ビビアン・クック　米山朝二訳『第２言語の学習と教授』研究社
評価方法	１）中間・期末テスト　30％＋30％　２）課題提出　20％　３）出席　20％	
受講者に対する要望など	本クラスを取るまえに日本語教育概論又は日本語学概論を履修していること。また、日本語文法論・音声学等も履修していることが望ましい。実践的な内容の科目なので、出席を非常に重視する。従って６回以上の欠席は認めない。	

年間授業計画	1. オリエンテーション 2. コースデザインの概要・ニーズ分析とシラバス・学習者の Variables 3. 言語教育の基礎理論・第一言語習得・第二言語習得の違い 4. 教材——1。教科書の分析・教材　初級・中級の文型と語彙　2。その他の専門教材 5. 同上 6. 教室活動と授業分析・教案の書き方 7. 同上 8. 音声の指導法（Video）と教材の作成 9. 聴解の教材作成と指導　1。初級　2。中級　3。上級 10. 文字表記の指導と教材　1。平仮名・片仮名の導入　2。漢字圏・非漢字圏の学習者の指導 11. 同上 12. 同上 13. 読解力の養成——精読・スキャニングと教材作成　1。初級　2。中級　3。上級 14. 同上 15. 文法の指導と教材——意味と文型の導入　1。ドリルから応用へ　2。絵教材・その他の教材の作成と検討 16. 同上 17. 同上 18. 会話指導と教材（上級のディベート教材の作成） 19. 同上 20. Video 教材の紹介とその使用方法 21. 同上 22. 作文の指導法と評価の方法 23. 同上 24. 評価とテストの作成法

科目名	日本語教授法Ⅱ（94年度以降） 日本語学特殊講義Ａ（93年度以前）	担当者名	井口厚夫

講義の目標	模擬授業及び授業見学を通して、日本語教育の実践的知識と技能の育成を図る。	
講義概要	前期目標は日本語教育実習への準備として、導入から練習までの教案を作成し、模擬授業をする。集中授業形式で行われる後半は外国語としての日本語表現・文法の導入・説明を行うための方法をふまえた上での模擬授業とする。 前期週１＋夏期集中授業という形態に注意して履修してもらいたい。	
使用教材	テキスト	『しんにほんごのきそⅠ』・『しんにほんごのきそⅠ・教師用書』（スリーエーネットワーク）中級については未定。
	参考文献	授業中に紹介する。
評価方法	教案提出･模擬授業･教材発表 ①模擬授業(2回) ②教材の提出 ③模擬授業の反省と自己分析 ④テストは無し ⑤出席	
受講者に対する要望など	自分に与えられた課題をきちんと果たすこと。教授法のⅠは既習又は履習中であること。実習をする学生は是非履習してほしい。欠席5回以上は認めない。発表者が当日予告なく欠席した場合、単位はあげられません。	

年間授業計画

1. オリエンテーション
2. 教材の研究・検討
3. 教案の書き方とオブザベーション
4. 模擬授業
5. 同上
6. 同上
7. 同上
8. 同上
9. 同上
10. 同上
11. 同上
12. 同上
13. 中級における文法・表現項目
14. 教材の研究、検討
15. 模擬授業
16. 同上
17. 同上
18. 同上
19. 同上
20. 同上
21. 同上
22. 同上
23. 同上
24. 同上

科　目　名	日本語文法論	担当者名	城　田　　俊

講義の目標		伝統的な「助詞・助動詞論」に立って日本語の文法を把握しようとすると江戸時代に開発された「活用」という概念に大きく頼らざるを得ない。そうなると、「未然形」という統一的理解が不可能な形態と「終止形」「命令形」という明確な語形を混在させる「活用」とは一体何かという問題にぶつかる。しかし、この理解しにくい「活用」の概念なくしても日本文法の記述は可能である。可能というばかりではない。より明快な文法が現出する。
講義概要		下記のテキストに基本的に従い、日本文法の常識的知識を整理する。その上で、語のかたちという観点から、その意味・機能・用法をとらえるよう努める。特に、タベロのような語尾のかたち、タベサセ（ル）のような語幹のかたち、読ンデイルのような結合的なかたちの区別を学び、文法カテゴリー・テンス・アスペクト・ヴォイス、ムード、やり・もらい等の理解を深める。日本語の語尾形による体系、語幹の拡大によって示される文法形態の体系、語尾形と補助動詞との結合によって示される文法形態の体系をしっかり把握する。
使用教材	テキスト	吉川武時『日本語文法入門』　アルク（NAFL 選書 6）
	参考文献	①寺村秀夫『日本語のシンタクシスと意味』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ　くろしお出版 ②鈴木重幸『日本語文法形態論』　むぎ書房 ③井口厚夫・井口裕子『日本語文法整理読本』　バベル・プレス
評価方法		前期・後期定期試験期間中に一回試験を行う。
受講者に対する要望など		シラバスに記したものと授業とでは多少前後することがある。授業中受講者に質問することがある。積極的参加が望まれる。

年間授業計画	1. 序論：形態と形態論、文法的形態、文法形態の展望、ダロウと推量形、語の活用と文の活用、語尾活用と語幹活用—語尾形と語幹形、基本語幹活用と二次語幹活用、語的つらなり 2. 文法的内容をとらえるめやす：ヒトと構成者—行為者・対象等、話とその構成者—話し手・聞き手・第三者、語形：動詞と名詞、語彙語幹と助辞、語尾助辞と語幹助辞、子音語幹と母音語幹、結合子音と結合母音等 3. 語尾形、語幹形、語幹形の語尾活用、語尾形：終止形—伝達話法と呼掛け話法、伝達話法—叙述語法と推量話法、叙述語法—現在形と過去形、推量話法 4. 呼掛け話法—命令話法と意志・勧誘話法、命令話法（形成・意味・用法）、意志・勧誘話法（形成・意味・用法）、連用形：接続形（形成・意味・用法）、条件形（形成・意味・用法）、例示形（形成・意味・用法） 5. 汎用形〔いわゆる連用形〕（形成・意味・接続形との競合、移動の目的表示、強調表現、二次語幹形のもととなる汎用形、語的つらなりのもととなる汎用形、語形成を行う汎用形—複合動詞、名詞形成、否定汎用形 6. 語幹形：基本語幹形（受身態の形成・意味・用法、使役態の形成・意味・用法、いわゆる自発、尊敬、肯定と否定）、複合語幹（否定語幹の後行特性、使役・受身態、使役・可能態、受身・可能態） 7. 二次語幹形：動詞語幹—過剰相スギル（形成・意味・用法）、尊敬ナサル、オ＋汎用形＋ナサル等、願望態形容詞タイ（形成・意味・用法）、願望態動詞タガル（形成・意味・用法）、傾向・容易態形容詞ヤスイ 8. 傾向態状詞ガチ・ギミ（形成・意味・用法）、可能態動詞エル・カネル（意味・用法）、動作相—段階相動詞の形成・意味・用法（始メル・始マル・ダス等、カエル、カカル、オエル、オワル、ヤメル、ヤム、サス等） 9. 様態相動詞の形成・意味・用法（続ケル・続ク・ツケル、ナレル・ナラワス、オボエル、タテル、マクル、チラス、マワル、アルク、ツメル、ハテル、シメル、スエル、返ス、タス、加エル、タリル、ツカレル等） 10. 将前相状詞の形成・意味・用法（ソウダ）、関連〔タクシス〕：ナガラ、ツツ、ツイデニ、ガテラ、カタガタ、シダイ等 11. 語的つらなり、汎用形ベースの語的つらなり—形成・意味・用法、尊敬汎用形ベースの語的つらなり、接続形ベースの語的つらなり：テシマク（形成・意味・用法）、テイル（形成・意味・用法）、テイク/クル、テミル等 12. 復習・整理・まとめ 13. 文形、文の活用、話法文尾助辞と待遇文尾助辞、文形変化、かわり文形、文のパラダイム、文形の語形変化、話法体系、話法—叙述話法と推量話法、叙述話法—平叙話法と既定話法（いわゆるノダ文） 14. 平叙話法（形成・意味・用法・待遇）、既定話法（形成・意味・用法、語話用、ノダッタ、ノデ、ノデ＋主文とカラ＋主文、ノデの共起制限、ニとは何か、状態汎用形、語的つらなり—ノデアル、ノデナイ、スコープ） 15. 推量話法、無確信話法—無準拠無確信話法と準拠無確信話法、無準拠無確信（カモシレナイ）文形（形成・意味・用法・語活用、他の文形の無準拠無確信文形化）、準拠無確信（ソウダ）文形（形成・意味・用法等） 16. 確信話法、無準拠話法、無準拠弱確信（ダロウ）文形（形成・意味・用法、他の文形のダロウ文形化）、無準拠強確信（ニチガイナイ）文形（形成・意味・用法、他の文形のニチガイナイ文形化、語活用、語的つらなり） 17. 準拠話法、内在準拠確信（ヨウダ）文形（形成・意味・用法・語活用、語的つらなり、他の文形の内在準拠確信文形化）、外在準拠確信（ラシイ）文形（形成・意味・用法、語活用、語的つらなり等） 18. 待遇—通常待遇と丁寧待遇（形成、動詞文＋デスの使用制限、デスとマス、語活用、デシタとタデス、ナイデスとマセンとシマセン、ダ・ダロウ、デス・デショウ等の二重性、デ・ニ・ナラ等の諸問題） 19. 主語撲滅論について、主語と述語、ガ格の優位性、文法格と副詞格、一次機能と二次機能、ヲ、ガ、ニ、デ、カラ、ト(1)、ト(2)、ヘ、マデ、ヨリカ、ノ、連用補語と連用修飾語の区別、不定格 20. 副助詞、完全副助詞、不完全副助詞 21. 体言とは、正常体言、名詞とは、ダナニ状詞、ダノニ状詞、ダノゼロ状詞、不完全体言、ダナ状詞、ダノ状詞、タルト状詞、純副詞、連体詞 22. 日本文法への形態音素論的注解 23. 文法論（語論と文論）、形態素論の可能性、国文法における「活用」の概念、語幹変化か語形変化か、 24. 復習・整理・まとめ

科　目　名	日本語音声学	担当者名	城　田　　俊

講義の目標		日本語音声の実践的・構造的把握をめざす。それは正しい日本語をみずから話すためばかりでなく、外国人に正しい標準的日本語を教え、発音上の誤りを矯正するのに役立つ。また、事象を構造的に、理論的にとらえるためにも音声の理論的把握は必要である。哲学的・思想的立場としてある構造主義も、また、現在人文科学で広く用いられる構造主義的手法も言語音声の研究成果を出発点としていることを忘れてはならない。
講義概要		調音音声学の基礎を講じ、それを基盤にして日本語の子音・母音を調音面から解説する（講義の形態をとるが、時に受講者を指名して、発音練習を行うことがある）。次に音節に話しを進め、それがなす体系には基本体系と第二体系が併存し、その異なりと発展のメカニズムを明らかにする。アクセントの正しい学び方・教え方に話しを及ぼす。 第二部としてある音素論では、位置の差に著目しながら子音体系・母音体系をとらえ、日本語にはいかなる子音音素・母音音素があるかを論じる。
使用教材	テキスト	城田俊　『日本語の音（おと）―音声学と音韻論』ひつじ書房（トテスト版）
	参考文献	・服部四郎　『音声学』　岩波書店 ・川上秦　『日本語音声概説』　桜楓社 ・猪塚元・猪塚恵美子　『日本語の音声入門』　バベル・プレス ・マリンベル・大橋保夫訳『音声学』　白水社（文庫クセジュ） ・城生伯太郎　「現代日本語の音韻」『岩波講座日本語』5『音韻』　岩波書店
評価方法		前期・後期共定期試験期間中に試験を行う。 受講態度も考慮する。
受講者に対する要望など		授業への積極的参加を望みたい。

年間授業計画

1. 第Ⅰ部　音声学、単音　ことばの音（おと）、1単音か2単音か、発音記号、調音器官
2. 子音と母音（テキスト1・2併せて1—25頁）
3. 子音の分類、調音点による分類、調音方法による分類、無音子音・有声子音、非口蓋化子音、口蓋化子音、有気音、無気音、重ね子音
4. 子音の調音、閉鎖音
5. 弱い閉鎖音、摩擦音（テキスト3・4・5併せて26—52頁）
6. 弱い摩擦音、破擦音
7. 鼻音、はじき音、ふるえ音、側面音（テキスト6・7併せて52—64頁）
8. 母音、母音の分類、舌の位置、唇の丸め、ジョーンズの「基本母音」
9. 母音の調音、長母音、無声化母音、鼻音化母音（テキスト8・9併せて65—79頁）
10. 日本語の音節、基本体系（伝承された体系、閉鎖体系）、〔e〕〔i〕に関する規制、〔t〕〔ts〕〔d〕に関する規制、〔h〕〔Φ〕に関する規制、〔w〕に関する規制、第二体系（革新体系、開放体系）、両体系の差
11. 結合表、基本体系における結合則、第二体系における結合則、長音節、促音付き音節、撥音付き音節、引き音付音節、イ音付音節、拡大長音節、拍、日本語音節の特徴（テキスト　5・6併せて80—112頁）
12. アクセント、共通語のアクセント、他言語との対照、高さアクセント・強さアクセント、統語機能、固定アクセントと自由アクセント、意味機能、アクセント核（テキスト　113—124頁）
13. 第Ⅱ部　音韻論、音素論(Ⅰ)、母音音素、音素の定義、母音の分布、母音音素、第二体系の母音の分布、第二体系の母音音素（テキスト　127—146頁）
14. 音素論(Ⅱ)、子音の分布と子音音素、1.〔a〕位置、2.〔o〕位置（テキスト　146—155頁）
15. 音素論(Ⅲ)、3.〔ω〕位置、4.〔e〕〔i〕位置、子音音素まとめ（テキスト　156—163頁）
16. 音素論(Ⅳ)、第二体系の子音の分布と子音音素、1.〔a〕位置、2.〔o〕位置、3.〔ω〕位置（テキスト　163—169頁）
17. 音素論(Ⅴ)、4.〔e〕位置、5.〔i〕位置、第二体系の子音音素まとめ、基本体系と第二体系の比較、第二体系が目指すもの（テキスト　169—181頁）
18. 音素論(Ⅵ)、特殊音素（テキスト　182—192頁）
19. 弁別要素（素性）(Ⅰ)、音素から弁別要素へ、／j／の仮構、同じ音素か違う音素か、音素より小さな単位、弁別要素の簡単な解説
20. 弁別要素(Ⅱ)、弁別要素の簡単な解説（続き）、音声の弁別要素による特徴づけ（テキスト　2・3併せて193—206頁）
21. 弁別要素(Ⅲ)、音節の各部分における弁別要素（テキスト　206—216頁）
22. 音節図素、特殊音の図表化（テキスト　217—226頁）
23. 第二体系の一般音節（テキスト　226—233頁）
24. 無声化母音、基本体系と第二体系、文化の問題、「開れた受容性」と「同化による閉鎖性」

科　目　名	対照言語学	担当者名	中　西　家栄子

講義の目標		二言語間（日本語と他の言語―基本的には英語）の様相を体系的に比較対照することによって、次のことについて理解を深める。　1）それぞれの言語についての体系的知識　2）言語の背景にある発想法　3）第二言語としての日本語習得への干渉　4）日本語教育への応用
講義概要		対照言語学の目標は二つの言語（この場合は日本語と英語）の共時的な比較対照を行い、そこでの結果をいかに日本語教育に応用するかを考えて行くことと捉える。その一方で二言語の体系的な知識を得るといういう目的も達成するように指導していく。日本語を教える場合、学習者の母語と日本語の相違をみることによっていろいろな問題が予測できる。また、日本語の誤用の原因もその相違によって説明できることが多い。誤用の原因としては中間言語的なものも多くあるが、それも母語からの干渉とはどのように異なるのか、この講義を通じて理解させていく。従って、講義の具体的な方法としては、まず誤用の資料を検討・分析し、次に検討した事柄についていろいろな角度から比較対照を試みる。
使用教材	テキスト	無し。但しテーマごとにプリントの配布があり、それが最終的にはテキストとなる。
	参考文献	安藤貞雄『英語の論理・日本語の論理』大修館書店 森田良行『日本語の視点』創拓社 水谷信子『日英比較話し言葉の文法』くろしお出版 国広哲弥編『日英語比較講座　1―4巻』大修館書店 吉川千鶴子『日英比較動詞の文法』くろしお出版 『講座日本語学』外国語との対照10、11、12　くろしお出版
評価方法		1）中間・期末テスト　30%＋30%　2）レポートの発表と提出　30%　3）出席　10% 欠席6回以上は認めない。
受講者に対する要望など		テキストはなく毎回の配布プリントがテキストになる。従って、きちんと出席しないと授業についていけなくなることに注意。レポート発表は全員する。どのテーマで発表するか早くから考えをまとめておくこと。すくなくとも日本語学概論・日本語学は履修していることが望ましい。

年間授業計画	1. オリエンテーション	・語順（説明）
	2. 語順	・無生物主語の構文（説明）
		・所有格（説明）
	3. 無生物主語の構文　所有格	・人称代婦詞・指示代名詞（説明）
	4. 人称代名詞・指示代名詞	・Of＋名詞　（説明）
	5. Of＋名詞	・形容詞・副詞　（説明）
		・比較級・最上級（説明）
	6. 比較級・最上級　形容詞・副詞	・自動詞文・他動詞文（説明）
	7. 自動詞文・他動詞文	・否定（説明）
	8. 否定	・受動態（説明）
	9. 受動態	・連体修飾（説明）
	10. 連体修飾	
	11. 連体修飾	・仮定法（説明）
		・話法　（説明）
	12. 仮定法	・時制・接続詞
	13. ・課題発表	
	14. ・各テーマについての誤用分析	
	15.	
	16.	
	17.	
	18.	
	19.	
	20.	
	21.	
	22.	
	23.	
	24.	

科目名	日本語史	担当者名	小島幸枝

講義の目標		日本語は、まだ日本民族が文字をもたなかった文献以前の時代から現代まで、日本列島に行われてきた言語である。海洋の島国という地理的条件から、古来日本人には外来文化を消化・吸収する能力が培われてきた。このことは、日本語の歴史においてどのような面に成果があらわれ、どのように日本語を生成発展させてきただろうか。今年度も語彙をとりあげ、その史的変遷を辿ることを目的とする。
講義概要		講述にあたって時代を日本の政治区分に従い、上代・中古・中世・近世・近代・現代に分けて、主として古辞書、各種文献資料によって、各時代ごとの語彙の特徴を知り、その変遷の要因を考察する。
使用教材	テキスト	山口明穂他編『日本語の歴史』（東大出版会）
	参考文献	・亀井孝他編『日本語の歴史』１～７　（平凡社） ・永山勇『国語史概説』（風間書房） ・国語学会編『国語の歴史』（改訂版）（刀江書院） ・講座解釈と文法１～７（明治書院） ・山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』（宝文館） ・土井忠生編『日本語の歴史』（至文堂）　その他
評価方法		前期・後期にレポート各１本
受講者に対する要望など		日本史の基礎知識をもっていること。および国語学を受講した上で受講することがのぞましい。

年間授業計画	1. 国語史のための時代区分 2. 国語史の資料 3. 国語史の概要　音韻史(1) 4. 国語史の概要　音韻史(2) 5. 国語史の概要　文字史(1) 6. 国語史の概要　文字史(2) 7. 国語史の概要　文字史(3) 8. 国語史の概要　文法史(1) 9. 国語史の概要　文法史(2) 10. 国語史の概要　外来語 11. 語彙史概要 12. 上代の語彙(1) 13. 上代の語彙(2) 14. 中古の語彙(1) 15. 中古の語彙(2) 16. 中古の語彙(3) 17. 中世の語彙(1) 18. 中世の語彙(2) 19. 中世の語彙(3) 20. 中世の語彙(4) 21. 近世の語彙(1) 22. 近世の語彙(2) 23. 近代の語彙(1) 24. 現代語の展望

科目名	ドイツ語Ⅰ	担当者名	大串 紀代子

講義の目標		1．ドイツ語の基本的学習、文法、語彙、言いまわしなど。 2．ドイツ語圏の文化、時事問題等への興味を喚起する。 3．ドイツ語でのコミュニケーションが出来るようにする。
講義概要		1．上記目的のため、テキストだけでなく、テープ、CD、ビデオなどを用いながら、学生達が積極的、能動的に参加する形をとる。 2．様々な状況設定をしながら、コミュニケーションの練習を行う。
使用教材	テキスト	Dialog―ドイツ語へのキックオフ　Ver. 3　近藤、小林、新倉、松尾著、郁文堂
	参考文献	
評価方法		授業中の発表及び定期試験との総合
受講者に対する要望など		1．必ず出席する 2．授業中発言する

年間授業計画	1. ドイツ語への導入 2. 動詞の現在変化とその応用 3. 冠詞、名詞の変化 4. 様々の状況下での会話練習 5. 前置詞とその応用 6. 〃 7. 分離動詞、再帰動詞の変化とその応用 8. 〃 9. 現在完了形と様々の言いまわし 10. 〃 11. 過去の練習とその応用 12. 〃 13. 副文の練習 14. 〃 15. 形容詞の変化と比較の練習 16. 〃 17. 関係文の練習 18. 〃 19. 受動態の練習 20. 〃 21. 接続法の習得とその応用 22. 〃 23. ビデオによる練習 24. 〃

科目名	ドイツ語Ⅱ	担当者名	山中康子

講義の目標		独Ⅰですでにやさしい文法を学んでいると思うので独Ⅱではやさしいよくしられたお話を読んで見たい。文法的に正確に読むことも大切だがこのクラスは逐語訳よりもドイツ語で書かれていることの内容を日本語でいかに表現するかを考えたい。
講義概要		„Münchhausen“（ほら男爵の冒険）の教科書を用いてテープもつかって読み方の訓練もしたい。
使用教材	テキスト	„Münchhausen“（Nacherzählt von Erich Kästner）朝日出版
	参考文献	
評価方法		前後期の定期試験による。
受講者に対する要望など		人数が少ないと思うのでドイツ語のビデオなども用い日常会話にも触れたいと思う。出席を重視。遅刻三回欠席一回とみなす。

年間授業計画	1. 最初の授業でどのくらい一回に進むことが出来るか見極めてからその後をきめたい。 2. あらかじめ日本語で『ほら男爵の冒険』を読んでおくとわかりやすい。 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24.

科　目　名	フランス語Ⅰ	担当者名	松　橋　麻　利

講義の目標		綴り字の発音を完全に習得するところから始め、文章の正確な読みと意味の理解がバランスよく平行するようにして随時文法的な説明を加えます。そして最終的に初級文法と読解力が身につくようにします。
講義概要		テキストのテープを聞きながら、正確な音読ができるまで繰返し練習したあと、まず受講者にできるだけ意味を考えてもらいます。それから意味と文法の解説をし、関連問題を解いていきます。そして、それらのことがどれだけ習得できたかをみるために随時書き取りの小テストを行います。
使用教材	テキスト	未定
	参考文献	ガイダンス時に紹介します。
評価方法		前期・後期各１回の期末試験と授業時の評価・小テストの結果によります。
受講者に対する要望など		授業には必ず音読の練習や綿密な予習をして臨むこと。

科目名	フランス語Ⅱ	担当者名	柴田芳幸

講義の目標		本講義は、すでにフランス語を第２（第３）外国語として１年間学んだ学生諸君のための初～中級講座である。 この授業は一方では初等文法の復習に、他方では読解力の養成と異文化理解に充てられる。また相補的に、外国語による自己表現をめざして、他者との対話の場で体験する発話行為をテーマとし、慣用表現になじみ、ボキャブラリーをふやす訓練をする。
講義概要		使用テキストは、６つの笑い話が12章にわけて構成され、各章に実用表現と練習問題のついた、斬新で愉快な教材なので、講義は、基本文法の復習を伴った「読解からコミュニケーションへ」の応用を、テープを多用しながら試みる。
使用教材	テキスト	『小さなコント――読解からコミュニケーションへ』（駿河台出版社）
	参考文献	必要なし。
評価方法		評価は、２～３週に１度ほどの「書き取り」を平常点とし、それと期末試験の成績とを総合して行なう。
受講者に対する要望など		フランス語Ⅰか初級フランス語を既習していること。

年間授業計画	1. あまりに細かい計画は、かえって無意味と判断し、省略致します。悪しからず。 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24.

科目名	スペイン語Ⅰ（総）	担当者名	北岸　団 J. L. Velasco

講義の目標		スペイン語を初めて学ぶ学生を対象として、口頭練習を中心にしながら、スペイン語文法の基礎と基礎的会話の習得を目的とする。具体的には、あいさつや自己紹介、所在に関する表現、数に関する表現、現在形での質問と依頼ができ、その答えについても話し、聞き取れることを目的にする。
講義概要		この授業で学ぶ文法項目は、直説法現在、命令の用法、疑問詞、形容詞、名詞、代名詞、数などである。点過去まで進みたい。日常的によく使う会話文については、順次練習をおこなう。受講生の積極的口頭練習が求められる。テキストでは第1課から第6課までである。
使用教材	テキスト	*¡Hola, amigos!*（芸林書房）
	参考文献	
評価方法		出席状況、年2回の定期試験によって評価する。担当者によっては小テストをおこなう場合がある。
受講者に対する要望など		スペイン語Ⅰ総の進行にあわせて口頭練習をおこなうスペイン語ⅠLが用意されているので、同時履習を要望する。

科目名	スペイン語Ⅰ（L）	担当者名	高松朋子

講義の目標		スペイン語Ⅰ総を補う授業である。テープおよびビデオ教材を使って、自然なスペイン語会話力（聞き取りと話す能力）を養うことを目的とする。
講義概要		スペイン語Ⅰ総と同じテキストとテープ、およびビデオ教材などを使い、スペイン語Ⅰ総の進度にあわせて口頭練習をおこなう。文法についての解説などはスペイン語Ⅰ総で主におこない、この授業では練習を中心にする。ビデオ教材も使って、耳からだけではなく映像を通してテキストを補いたい。進度については、スペイン語Ⅰ総のシラバスを参照のこと。
使用教材	テキスト	*¡Hola, amigos!*（芸林書房）
	参考文献	
評価方法		出席状況、年２回の定期試験によって評価する。担当者によっては小テストをおこなう場合がある。
受講者に対する要望など		スペイン語Ⅰ総との組み合わせで受講すること。

科目名	スペイン語Ⅱ（総）	担当者名	佐藤勘治

講義の目標		スペイン語Ⅰ総の続きの授業である。スペイン語Ⅰ総の既習者を対象として、より進んだ文法の習得と、その文法内容をつかうより進んだ聴取力、理解力、口述能力の習得を目的とする。
講義概要		主な文法項目は、線過去、命令、動詞の原形の使い方、現在分詞、過去分詞および接続法である。また形容詞、冠詞、前置詞など既習事項についてより高度な使い方の練習をおこなう。テキストの第７課から第12課を予定している。
使用教材	テキスト	*¡Hola, amigos!*
	参考文献	
評価方法		出席状況、年２回の定期試験によって評価する。担当者によっては小テストをおこなう場合がある。
受講者に対する要望など		スペイン語ⅡＬとの組み合わせで受講することを要望する。

科目名	スペイン語Ⅱ（L）	担当者名	霞　洋子

講義の目標		スペイン語ＩＬの続きの授業である。スペイン語Ｉ総の既習者を対象にして、スペイン語Ⅱ総の進度に合わせてより高度なスペイン語会話力（聞き取りと話す能力）を養うことを目的とする。
講義概要		スペイン語Ⅱ総と同じテキストとそれに準拠したテープ教材を使い、スペイン語Ⅱ総の進度に合わせて口頭練習をおこなう。文法についての解説などはスペイン語Ⅱ総で主におこない、この授業では練習を中心にする。また別のビデオ教材も使って、耳からだけでなく映像を通してテキストを補いたい。進度については、スペイン語Ⅱ総のシラバスを参照のこと。
使用教材	テキスト	*¡ Hola, amigos !*
	参考文献	
評価方法		出席状況、授業への積極的参加、および小テストによって評価する。
受講者に対する要望など		スペイン語Ⅱ総との組み合わせで受講すること。

科　目　名	スペイン語Ⅱ（読）	担当者名	北　岸　　団

講義の目標		スペイン語の比較的簡単な読み物をできるだけたくさん読むことで、入門的な総合授業では扱いきれなかったスペイン語の文章構造に対するより深い理解や語彙の不足を補うことを目的とする。
講義概要		受講者には、随時スペインや中南米に関するプリントを配布し、それをもとに授業を進める。教材用テキストではなく一般の出版物を使用するため、入門的な授業では扱わなかった文法事項がでてくるが、必要に応じて既修・未修の文法説明を行いながら授業を進める。授業の性格上、ただ出席しているだけではほとんど成果はあがらないので、原則として受講者は毎回訳読をすることになる。
使用教材	テキスト	プリントを使用する。
	参考文献	
評価方法		出席および訳読発表状況、年２回の定期試験結果によって判定する。
受講者に対する要望など		自主的・積極的な姿勢で授業に臨むこと。最初はあまり解からない者でも、継続して予習・発表を繰り返すうち、必ず理解は進むようになるので、根気よく取り組んでもらいたい。

科目名	スペイン語Ⅲ（総）	担当者名	佐藤勘治

講義の目標		接続法、未来形、過去未来など新しい動詞の活用と使い方を学ぶほか、前置詞、関係代名詞など練習が不十分な文法項目を補う。また、語彙の充実にもつとめ、場面に従った十分なスペイン語会話能力の養成をおこなう。また、定着のために、新しい単語を使った復習もおこなう。
講義概要		Hola,amigos の最終課からはじめ、文法事項の補いをおこなった後、ビデオ教材を用いて、運用力の増強をおこなう。ビデオ教材は、聞く力の養成に役立つとともに、構文の使われ方を知るのに最適である。特定の文法事項については、書き言葉に頻出するものがあるので、授業の１／４ほどは、購読にも当てたい。
使用教材	テキスト	・担当者が用意する。
	参考文献	
評価方法		授業への積極的参加、およびテスト
受講者に対する要望など		

科目名	スペイン語Ⅲ（L）	担当者名	佐藤勘治

講義の目標	これまで学んだ文法項目について、スペイン語会話の運用力を身につける。場面設定に従った基本的会話文を学び、語彙力を高めるとともに構文の復習をおこなっていく。このことで、依頼の会話、許可を求める会話、道を尋ねる会話など場面ごとに最低限必要な基本構文をはなせ、また聞き取れることができるようにしたい。また、接続法前置詞、関係代名詞などまだ十分に練習がおこなえていない文法事項についても練習する。	
講義概要	ビデオ教材の Viaje al espanol を主に14課以降進めていきたい。 単に見てなにが言われているか理解できるだけではなく、能動的な発話ができるよう、練習をおこなう。詳しくは、授業の最初に指示する。	
使用教材	テキスト	・担当者が用意する。
	参考文献	
評価方法	授業への積極的参加、およびテスト	
受講者に対する要望など		

科　目　名	スペイン語Ⅲ（読）	担当者名	野々山　ミチコ

講義の目標		文法を復習しながら、スペイン・ラテンアメリカの近代文学について学ぶ。 短篇小説を用いる。
講義概要		最初は教科書用にやさしく書き直したものを用いるが徐々にレベル・アップし、最後は少々むつかしい原文に挑戦する。
使用教材	テキスト	・授業中にそのつどコピーを配布。 ・野々山真輝帆著「スペイン語のトレーニング」（白水社）
	参考文献	・とくになし
評価方法		授業への参加・貢献度を重視する。
受講者に対する要望など		毎回授業に出席し、宿題とされた箇所を予習してくること。

年間授業計画	1. スペイン短篇　ベッケル 2.　〃　〃 3.　〃　〃 4.　〃　クラリン 5.　〃　〃 6.　〃　ウィムーノ 7.　〃　〃 8.　〃　バロッハ 9.　〃　〃 10.　〃　アソリン 11.　〃　〃 12.　〃　〃 13.　〃　〃 14. ラテンアメリカ短篇　キロガ 15.　〃 16.　〃 17.　ルベン・ダリオ 18.　〃 19.　〃 20.　コルタサル 21.　〃 22.　〃 23.　〃 24.　〃

科目名	ロシア語Ⅰ	担当者名	井上幸義

講義の目標		ロシア語は、単語の活用が多く、取っつきにくい言語だと言われていますが、その取っつきにくさを親しみに変えるには、少しでも慣れることが必要です。本講義ではロシア語の骨組みをつかみ、少しでもロシア語に慣れることを目標とします。
講義概要		全くの初学者を対象としており、アルファベット、発音から始めます。最も基礎的な文法書を教材として使い、名詞の格変化、動詞の現在人称変化、過去時称形、未来形、形容詞の用法などを中心に学び最も基本的な構文が理解でき、使えるようにします。講義はゆっくりていねいに進めます。
使用教材	テキスト	『はじめてのロシア語』（桑野隆著、白水社）
	参考文献	『博友社ロシア語辞典』
評価方法		前後期それぞれ１回ずつ試験を行ない、それに基づき評価を下します。尚、参考として出欠を取ります。
受講者に対する要望など		

科目名	ロシア語Ⅱ	担当者名	井上幸義

講義の目標		ロシア語Ⅰで学んだロシア語の基本的な構文を、会話を通して習得し、さらにそれを発展させることを目標とします。
講義概要		ロシア語Ⅰを昨年履習した学生、あるいはロシア語文法の初歩的知識を一通り持っている学生を対象とします。日常的な会話を中心に、あいさつの表現、様々な動詞を使った表現（過去、現在、未来時称など）を学んでいきます。
使用教材	テキスト	『新ロシア語教程』（狩野享、Ａ．アキーシナ共著、ナウカ株式会社）
	参考文献	博友社ロシア語辞典
評価方法		前後期それぞれ１回ずつ簡単な発話形式の試験を行ない、それに基づき評価を下します。尚、参考として出欠を取ります。
受講者に対する要望など		

科目名	中国語Ⅰ	担当者名	張　継　浜

講義の目標		入門から始めて、総合的な語学能力を養成することを目標とします。
講義概要		発音練習から始め、基本文型を使って、聴解、応答などの練習をします。今後の中国語学習への興味及びより一層能力をつけるためにも発音は大変重要なので、正しく発音できるまでしっかり練習します。 文法解説などは必要最少限にとどめることにして、できるだけ口頭練習の機会を与えます。
使用教材	テキスト	『ベーシック・チャイニーズ』　張継浜著　白帝社
	参考文献	
評価方法		授業中の学習態度、出席、テストなど総合評価する。
受講者に対する要望など		予習、復習を行うこと。

年間授業計画	1. 授業中に指示します。 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24.

科目名	中国語Ⅰ	担当者名	陳　　跡

講義の目標		この講義の内容は、中国語の基礎知識（発音、文法、文の構造等）の習得を中心として、聴く力と会話力の学習を第一目標とする。
講義概要		発音は初心者にとって最も難しい課題である。中国語独得の音声で、日本語の音声体系にないもの、つまり、四声—四種の調子音や、その他の特に注意すべき子音と母音の読み方を、集中的に練習する。言葉は、コミュニケーションの手段の一つである。初級中国語の授業は簡単で実用的な言葉や短い会話を用いて行う。
使用教材	テキスト	荒屋　勤／尹　景春／岡部謙治『中国語ネットワーク』朝日出版社
	参考文献	
評価方法		成績評価に当たっては、平常点と最終試験をほぼ均等に扱う。
受講者に対する要望など		履修者の出席と復習を期待します。

科目名	中国語Ⅱ	担当者名	秦　　敏

講義の目標		中国語Ⅰを昨年履修した学生、あるいは同等語学力を持つ学生を対象とします。授業は日常の中国語会話を正確に聞きとり話す能力を養うことを目標とする。
講義概要		講義は理解し得る範囲内で中国語で行う。また、中国の文化、習慣、ものの考え方などを紹介したいと考えています。
使用教材	テキスト	『北京カタログ』相原茂／戸沼市子／張雲明
	参考文献	
評価方法		授業中の学習態度、前後期とも筆記試験と出席回数によって評価する。
受講者に対する要望など		予習と復習することを望みます。

科目名	朝鮮語Ⅰ	担当者名	朴　勇俊

講義の目標	朝鮮語を初めて学ぶ人を対象に朝鮮語と日本語の共通点、類似点を示し、学習の容易さと有用性を理解させながらハングル文字の読み書き、辞書の活用ができるようにするとともに、実用会話を入門指導する。 会話の学習については韓国固有の民俗、歴史、生活、芸術、衣食住等のストーリー性のある題材、日常生活で当面する様々な典型的局面や節目での文型、会話を選び、そのような場面を想定、再現することで実感を深めながら反復指導する。また写真、スライド、ビデオ等をも活用することで臨場感を深め積極的に学習に取り組むようにする。
講義概要	(1)朝鮮語の特徴と学習への取り組み方の理解・体得 朝鮮語の特徴、特に「ハングル」の構造を日本語およびその文字との比較からわかりやすく説明する。 (2)朝鮮語の文字、文章の理解と解読 辞書の活用による「ハングル」の解読、「ハングル」による表現、「ハングル」の音韻的法則を指導する。 (3)実用会話 基本会話文（あいさつ、自己紹介、基本的感情表現、ショッピング、食事の注文等の日常生活に必要な表現）を厳選し学習者同士が役割を変えながら問答型の会話の反復練習をする。
使用教材 テキスト	『韓国語学習―基礎から完成まで―』朴勇俊（プリント）
使用教材 参考文献	参考書や辞書等は後日指定する。
評価方法	評価は原則として定期試験と授業へのとりくみ、出席状況等を総合的に判定する。
受講者に対する要望など	外国語の学習は学習者が持続的な学習や訓練に対応する積極的な興味や関心、持続的努力を一貫して維持できるかどうかによって成果が左右される。意欲を持って取り組む姿勢を身につけてほしい。

年間授業計画	1. 朝鮮語の特徴と学習への取り組み方の理解・体得 2. 朝鮮語の特徴と学習への取り組み方の理解・体得 3. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 4. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 5. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 6. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 7. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 8. 朝鮮語の文字・文章の理解と解読 9. 様々な場面を想定した基本会話（あいさつ） 10. 様々な場面を想定した基本会話（家族） 11. 様々な場面を想定した基本会話（職業） 12. 中間試験 13. 様々な場面を想定した実践会話・読解（故郷） 14. 様々な場面を想定した実践会話・読解（バス、タクシー） 15. 様々な場面を想定した実践会話・読解（教室） 16. 様々な場面を想定した実践会話・読解（事務室） 17. 様々な場面を想定した実践会話・読解（食堂） 18. 様々な場面を想定した実践会話・読解（図書館） 19. 様々な場面を想定した実践会話・読解（書店） 20. 様々な場面を想定した実践会話・読解（下宿） 21. 様々な場面を想定した実践会話・読解（友人） 22. 様々な場面を想定した実践会話・読解（電話） 23. 様々な場面を想定した実践会話・読解（ホテル） 24. 期末試験

科目名	朝鮮語Ⅱ	担当者名	朴　勇俊

講義の目標		日常の朝鮮語会話を正確に聞きとれるようにし、多様な状況、場面に応じて適切な会話表現が可能になるべく指導する。また辞書を使用しながら長い文章を読み、書くことができるようにする。 映画やテレビ、ラジオ等の朝鮮語を聞いて理解できるようにし、実際のドラマの脚本等にそって実演することを通して生きた会話ができるように練習する。
講義概要		日常生活で遭遇する多様な状況を教室に設定し、実体験にみあう会話を身につけるようにする。 また朝鮮語は単なる意思疎通の用具にとどまらず、朝鮮人の習俗や伝説や文化の結晶体であることを実感させ、朝鮮の歴史や文化や生活の諸相について関心を高め、理解を深めて行く。個別指導を基本とし、自学自習が可能なテキストによって講義を進めて行う。
使用教材	テキスト	『韓国語学習―基礎から完成まで―』朴勇俊（プリント）
	参考文献	参考書や辞書は後日指定する。
評価方法		評価は原則として定期試験と授業へのとりくみ、出席状況等を総合的に判定する。
受講者に対する要望など		外国語の学習は学習者が持続的な学習や訓練に対応する積極的な興味や関心、持続的努力を一貫して維持できるかどうかによって成果が左右される。意欲を持って主体的に取り組んでほしい。

年間授業計画	1. 本講義に対する紹介、概要説明、注意点について 2. 様々な場面を想定した実践会話・読解（入国審査） 3. 様々な場面を想定した実践会話・読解（税関） 4. 様々な場面を想定した実践会話・読解（ビザの延長） 5. 様々な場面を想定した実践会話・読解（両替） 6. 様々な場面を想定した実践会話・読解（予約便の確認） 7. 様々な場面を想定した実践会話・読解（国際電話） 8. 様々な場面を想定した実践会話・読解（伝言） 9. 様々な場面を想定した実践会話・読解（地下鉄利用） 10. 様々な場面を想定した実践会話・読解（忘れ物） 11. 様々な場面を想定した実践会話・読解（旅館） 12. 中間試験 13. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（観光） 14. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（韓国料理） 15. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（名刺交換） 16. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（出身地） 17. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（伝統的行事） 18. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（余暇） 19. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（ショッピング） 20. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（引っ越し） 21. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（趣味） 22. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（誕生日） 23. 様々な場面を想定した応用会話・長文読解（記念日） 24. 期末試験

科目名	アラビア語Ⅰ	担当者名	本田孝一

講義の目標		アラビア語には中東21カ国の国語であり、国連の７つの公用語の１つに定めさせているメジャーな言語です。それにもかかわらず日本においてはまだまだ西欧語偏重の中で、その重要性が認められていないのが現状です。本講義ではアラビア語のこのような重要性を認識してもらうと当時にアラビア文字をはじめとしたアラビア語の世界に親しんでもらうことを目的とします。
講義概要		本講義は会話と文法を交互に学んでいく基本姿勢に加えて、広くアラブ世界に親しんでもらえるように、アラブに関わるさまざまな側面を紹介していこうと考えています。具体的にはビデオやスライドを使ってアラブの文化、習慣、彼らのものの考え方などを紹介します。
使用教材	テキスト	『アラビア語の入門』（本田孝一著、白水社）
	参考文献	『パスポート初級アラビア語辞典』（本田孝一、石黒忠昭著、白水社）
評価方法		学期末に簡単な会話をやってもらいます。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. Introduction 2. （会話）アラブ人と友だちになろう。 3. （会話）アラビア語で自己紹介してみよう。 4. （文法）アラビア文字に挑戦 ① 5. （文法）アラビア文字に挑戦 ② 6. （会話）アラブ人と友だちになろう。 ② 7. （文法）アラビア文字をつなげてみよう。 ① 8. （文法）アラビア文字をつなげてみよう。 ② 9. （会話）アラビア語で友だちを紹介してみよう。 10. （文法）アラビア語の読み方 発音符号の練習 11. （文法）自分の名前をアラビア語で書いてみよう。 12. （会話）「これは何ですか」の表現 13. （会話）アラビア語基本単語100を使って 「これは～ですか」の表現練習 14. 文化的事情紹介：アラブの国々の紹介 ① 15. （会話）「私は日本人です」の表現と応用 16. （会話）飛行場でアラビア語を使ってみよう。 17. （文法）アラブ諸国の名前をアラビア語で書いてみよう。 18. （会話）「ご出身はどちらですか」 19. 文化的事情紹介：アラブの国々の紹介 ② 20. （会話）「持つ」の表現 21. （会話）アラビア語で買物をしてみよう。 22. （文法）動詞の使い方 ① 23. （文法）動詞の使い方 ② 24. （テスト）各自（２人で一組）で作った会話の発表

科目名	アラビア語Ⅱ	担当者名	本田孝一

講義の目標		前年度アラビア語Ⅰを受講した人を原則的に対象とし前年度のつづきを勉強します。 目的としては、受講生のひとりひとりがアラブ世界に関心を抱き、各自で興味の対象を定め、将来的にそれを伸ばしてゆけるようにすること。
講義概要		授業はかならずしもテキスト通りに進行させるということではありません。受講生の希望に従ってバラエティーに富んだ授業にしたいと考えています。 講師の専門であるアラビア書道についても、もし希望があれば、導入したいと思います。
使用教材	テキスト	本田孝一『アラビア語の入門』(白水社)
	参考文献	本田孝一・石黒忠昭著 『パスポート初級アラビア語辞典』(白水社)
評価方法		学年末に簡単な会話をやってもらいます。
受講者に対する要望など		授業のはじめに受講生の希望を聞いてから年間の授業計画を立てたいと思います。

科　目　名	古典ギリシア語	担当者名	古　川　堅　治

講義の目標		一年間の授業を通して、古典ギリシア語を着実に読み、書き、理解することができるようになることを主目的とする。テキストを練習問題を確実にこなしていって、１つ１つステップアップしていく。また、古典ギリシア語の学習を通して古代ギリシア文化や歴史、更には現代ギリシアの文化や社会にも触れることにする。
講義概要		毎回、単元を１～２つずつ学習するペースで進む。授業はアトホームな雰囲気で、気軽に行いたい。ビデオなどを交えて、視覚にうったえながら理解を深めることもする。出席は必ず毎回するように心掛けること。
使用教材	テキスト	ギリシア語入門　改訂版（田中美知太郎・松平千秋著）（岩波全書1648円）。第１回目の授業までに購入しておくこと。
	参考文献	とくに使用せず
評価方法		出席による問題回答を繰り返すことを行うので、特別にテストや試験は行わない（平常点による評価）
受講者に対する要望など		だれでも一年間、真面目に学ぶならば、古典ギリシア語はマスターできる。未知で貴重な古典語を気軽に学んで欲しい。ビデオやCDでギリシア文化に触れるので興味のある人の来講を拒まない。

年間授業計画	1. I. 字母、発音、音韻などの分類 2. II. 音節、アクセント、句読点 III. 動詞変化、現在直説法能動相 3. IV. 名詞の第一変化 ①、② 4. V. 名詞の第一変化 ③、④ と動詞の未来直説法能動相 5. VI. 未完了過去を直説法能動相 6. VII. 名詞の第二変化 7. VIII. 形容詞の変化（第一、第二変化） 8. IX. 前置詞 9. X. アオリスト直接法能動相 10. XI. 現在完了、過去完了直接法能動相 11. XII. 指示代名詞と強意代名詞 12. XIII. 直接法能動相本時称と副時称の人称語尾 13. XIV.「ある」「いる」と「言う」の現在直接法 14. XV. 疑問代名詞と不定代名詞 15. XVI. 直接法中動相の現在、未完了過去、未来 16. XVII. 直接法中動相のアオリスト、現在完了、過去完了、未来完了 17. XVIII. 人称代名詞 18. XIX. 再帰代名詞、相互代名詞、所有代名詞 19. XX. 第二アオリスト、直接法能動相と中動相 20. XXI. 直接法受動相 21. XXII. 第三変化の名詞 ① 22. XXIII. 第三変化の名詞 ② 23. XXIV. 能相欠如動詞と約音動詞 ① 24. XXV. 約音動詞 ② まとめ

科目名	ラテン語	担当者名	松田　治

講義の目標		古典ラテン語はむずかしそうに見えますが、語尾変化などの約束ごとを理解すればわりあい簡単なものです。多くの例文を読むことによって約束ごとは身につきます。そうすると逆に自分でラテン語の文章を書くこともできるようになります。知識が深くなれば近代語とのかかわりもつかめるようになります。古代ローマ人のようにラテン語を読み、彼ら同様にラテン語を書き、その過程で彼らの文化を味わう、このあたりを目標にしましょう。
講義概要		名詞の変化、動詞の活用を中心に勉強し、語の機能表示の方法や文の構造を把握するような形で授業を進めます。とりわけ動詞の活用は大事で、直説法や接続法などのモードによる変化、過去・現代・未来といった時制による変化、能動・受動のヴォイスによる変化など、ラテン語形態論の基本をしっかり押さえたいものです。折りにふれて近代語とのかかわり、特に近代語の語源考察に時間をさきます。
使用教材	テキスト	『詳解ラテン文法』（樋口・藤井共著、研究社）
	参考文献	
評価方法		どれだけ積極的に授業に参加したかを重視します。試験の成績だけでなく、総合的に判断します。
受講者に対する要望など		精神的かつ時間的にユトリのある諸君、つまり予習できる人を歓迎します。予習できないことが予め分かっている人はご遠慮ください。

年間授業計画	1. 授業概説 2. 発音、アクセント 3. 規則動詞の活用、sum の活用（現在） 4. 第一変化名詞、格の説明 5. 第二変化名詞 6. 形容詞と名詞の対応 7. 動詞の過去・未来 8. 前置詞の用法・eo の活用 9. 疑問文・fero の活用 10. 第三変化名詞 11. 動詞の完了系活用 12. 人称・再帰代名詞 13. 形容詞と副詞。命令法 14. 受動態 15. 接続態 16. 指示代名詞 17. 助動詞 18. ネクサスの説明 19. 第四変化名詞、スピーヌム 20. 関係・疑問・不定代名詞 21. 代名詞型の形容詞 22. 非人称構文 23. 現在分詞 24. 完了不定詞、未来分詞

科　目　名	総合講座A	担当者名	青　柳　多恵子

講義の目標		テーマ：女性論 20世紀後半は、女性の歴史の中でも、急激な変化が生じた時期と位置づけることができる。ウーマンリブ、男女平等を求める波は未だに多くの関心事である。しかし一方では、平均寿命の高齢化、高学歴化、核家族化に見られるライフサイクルの変化、職業生活の拡大など女性の生活自体の構造的変化は、いわゆる一部の女性に止まらず、女性全体の共通点と言える。経済、政治、社会の激動期の現在に、女性がどのように位置づけられているか、さらに、伝統的な性役割が崩れはじめて起こる不安や意識について、多様な側面から分析し、まず女性の現状を把握して婦人問題を総合的に研究することを目的とする。
講義概要		男女の平等と性役割の流動化とは、全世界的な関心事であるといえる。ここでは、さまざまな学問分野から、女性の身体や生活や文化に関する研究が地道に積み重ねられている。女性に関する諸研究の模索してきた方向と、また、蓄積してきた成果の専門的な切り口を「女の目で見る」仕方と「女性解放思想の歴史的な潮流」の紹介、「男性から見た女性論」「女性の心理学」「フェミニズム理論」「企業における女性」「家庭から見た女性」「子供が育つことをめぐる女性論」等々あらゆる分野の講師に登壇いただき、それぞれの側面からの「女性論」を話していただく。
使用教材	テキスト	・なし
	参考文献	・各担当者から提示
評価方法		出席状況とレポートによる。
受講者に対する要望など		単位のためでなく考える学生の出席を望む。〔男性も可〕

年間授業計画	1. 講座のガイダンス　青柳多恵子担当 「女性論」の歴史的変遷と将来展望 2. 「日本および世界の女性運動史」　（　　） 3. 「宗教の中の女性の歴史」　磯部理一郎先生 4. 「現代イギリス演劇に扱われる女性たち」　児嶋一男先生 C. チャーチルの Top girls の場合 5. 「女性にかかわる法律の動向」　松島由紀子先生 6. 「アメリカ現代詩とフェミニズム」　原　成吉先生 アドリエンヌ・リッチの詩を読む 7. 「教育・学習を通じての男女平等」　島谷部志乃恵先生 8. 「国際社会から見た日本の女性」　（　　） 9. 「社会参画と女性の現状」　（　　） 10. 「少子・高齢化社会における女性の問題」　（　　） 11. 「企業中心社会における女性のもう一つの働き方」（　　） 12. 「男の女性論と女の男性論」　青柳多恵子担当 レポートを作成 後期の予定を提示します。

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	青柳　多恵子

講義の目標	「スポーツ文化学」を主題に、今年度は東洋と西洋の国々の歴史的生活とその中で培われたスポーツ文化・健康文化を中心課題として採り上げる。日本・中国・イギリス・ドイツ・アメリカ・東南アジアを中心にスポーツと生活・健康の為として考えられてきた芸能・祭り等を通してどのような考え方をし、どのような生活をしてきたか研究していく。また大学で学ぶ「ゼミナール」の入門として、どのような形で「ゼミ」が進められるかもこの講座で学ぶことができます。	
講義概要	「ゼミナール」の運営の仕方、各テーマの報告と討論を中心に行う。今年度はオリンピック開催年であると共に、日本（長野）で開催されるという記念の年といえよう。「オリンピック」を主にスポーツ文化が如何なる発展と変化を為したか、解説を加えながら、各スポーツの歴史的変遷を検索し、その誕生当時の社会状況と、特にスポーツを行う服装（スタイル）や用具の変化を通して「スポーツ文化」の意味とその及ぼす社会的意義を解明していく。またオリンピックの全世界的な「祭り」としての意義と経済的影響はもとより、記録としての伸びへの影響等研究していく。研究の成果を作成していくことは勿論だがゼミとしても楽しくしていきたい。	
使用教材	テキスト	特に使用しない。
	参考文献	その都度、指摘・提示する。
評価方法	出席と報告・討議への参加など総合的に評価する。	
受講者に対する要望など	スポーツ・健康学に興味と積極的に取り組む姿勢を期待したい。	

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	有吉広介

講義の目標		現代の英国社会を学ぶ――現代の英国社会では、従来の社会構造に基礎を置く生活様式と、新しく起こってきた社会構造および文化に対応する生活様式とが混じりあって、ときには社会問題も生まれている。そこで、英国の社会構造や文化に関する社会学的分析を中心にして、英国人の行動様式や生活文化を深く理解することを目標とする。
講義概要		まず現代イギリスにおける家族と家庭生活を取りあげて、社会が変化するなかで、伝統的なタイプとは違うさまざまな家族とその生活が生まれていて、そして人びとが結婚や家庭生活に関して不安感をいだくようになっているのをみる。第二に、英国の都市生活を取りあげて、都市とその周辺部との間に生活機会の不平等問題が起こっていたり、あるいは都市の機能が、物質文明の中心地としてよりもサービス文化のメッカに変貌しつつある様子をさぐる。第三に、現代の英国の教育制度を取りあげて、社会や文化を再生産する場である学校が、職業教育の場あるいはエリート選別の場になっている点をみる。最後に、階級社会といわれる英国の社会構造を取りあげて、英国人の生活の多様性をみる。
使用教材	テキスト	プリントを配布する。
	参考文献	適時指示する。
評価方法		前・後期2回のレポートの評価による。
受講者に対する要望など		

年間授業計画	1. 日英の家族構造の比較 2. 同上 3. 英国における家族構造の階級差 4. 近年における家族の多様化 5. 田園地域の生活 6. 都市生活の新しい傾向 7. 同上 8. 教育制度 9. 教育と経済的生産との関係 10. 隠れたカリキュラム 11. 教育における不平等 12. 社会的および文化的再生産 13. 英国の階級社会の概観 14. 最近の職業構造 15. 階級構造の図解 16. 所得および資産の分布状況 17. 貧困の問題 18. 労働階級の姿 19. 同上 20. 新しい労働者は出現したか 21. 中間階級の多様性 22. サービス階級 23. 英国の上流階級 24. まとめ

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	飯島一彦

講義の目標		日本各地に現在でも無数に伝承されている民俗藝能について取り組み、そこに潜む「日本人」の価値観・感覚・感情・発想の原型、及びそれらを根底に置いた人間関係・社会組織・行動規範・様々な人生の様態等を、具体的に伝承の現場を体験・実感することを中心にして認識する。従って、少なくとも全体で一回以上、個人では数度にわたる現地調査を遂行する。
講義概要		アプローチの方法は三つ。第一に民俗学の基礎的知識と分析の方法の獲得である。民俗伝承全体の中で藝能の伝承及びそれに対する追求がどの様に位置付けられるのか、講義及び参加者個々に課せられるリサーチによって構成される。これは前期前半に集中的に行なう。 第二はどの民俗藝能を具的体な対象とするかの検討と決定である。これはすでに発行されている記録・報告類・各市町村で把握している情報、演習参加者が個人的に得ている情報等を元にして行なわれる。前期中に行なう。 第三は具体的な現地調査、及びその報告と検討である。後期をこれに費やす。現地調査は夏期もしくは秋期の予定。
使用教材	テキスト	『日本民俗学』（弘文堂入門双書、弘文堂、1984、東京、ISBN 4-335-57029-5、1340円税込）
	参考文献	主要なものについては最初の時間にその一覧を配付する。その他については、時間中にその都度指示する。
評価方法		前期にレポートを一回、後期に現地調査のまとめ（レポート）を提出。及び平常点（出席点ではない）。
受講者に対する要望など		民俗藝能に関する予備知識を必ずしも必要としない。ただし、みずから調査し参加する意志を持たないものは出席しても無駄である。

年間授業計画	1. 演習の内容・年間予定の概要説明。民俗・民俗学・民俗藝能・民俗藝能を研究することの意義等について概説。参考文献一覧を配付、解説。 2. 民俗藝能の研究方法・研究史について概説。参加者各個人の担当リサーチのテーマを決定。 3. 日本民俗学史・学の構成・最近の問題意識等について概説。参加者各個人の対象とする民俗藝能に関する調査の報告。 4. リサーチ報告「社会伝承」。参加者各個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 5. リサーチ報告「経済伝承」。参加者個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 6. リサーチ報告「儀礼伝承」。参加者個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 7. リサーチ報告「信仰伝承」。参加者個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 8. リサーチ報告「言語伝承」。参加者個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 9. リサーチ報告「藝能伝承」。参加者個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告。及びそれらの検討。 10. 実施調査の実例の説明（例として：八潮市の民俗藝能概説。「三匹獅子舞」概説）。夏期もしくは秋期の民俗藝能調査の対象を決定。夏期休暇中の課題決定。 11. 実地調査の実例の体験（例として：八潮市の民俗藝能）、現地実地調査（フィールドワーク）。 12. 参加者各個人の対象とする民俗藝能に関する事前調査の報告、及びそれらの検討と、夏期もしくは秋期の民俗藝能調査の対象を決定することに関しての予備日。 13. 夏期休暇中の課題の報告、及び検討。参加者各個人の対象とする民俗藝能に関する実地調査の報告、補完調査の内容、及び調査報告（レポート）の形式・内容について検討。 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 参加者各個人の対象とする民俗藝能に関する実地調査の報告、補完調査の内容、及び調査報告（レポート）の形式・内容についての検討・指導。 24. 各自の調査報告の提出。年間のまとめ。

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	城田　俊

講義の目標		語と語は意味・文法・文体のみならず慣用によって結びつく。この慣用をいかに把握し、記述するか。いまだ未開拓の問題に様々な面から光りを与え、解明のいとぐちをつかむことをめざす。また、文章を書く練習も行う。
講義概要		形容することばと形容されることばの関係、名詞と動詞の結合上の関係等シンタグマティックな結びつきのみならず、代りに用いられるというパラディグマティックな関係を具体例に則して明らかにしていく。
使用教材	テキスト	城田俊『ことばの縁―構造語彙論の試み』　リベルタ出版
	参考文献	・Explanatory Combinatorial Dictionary of Modern Russian. Wiener Slawistischer Almanach Sonderband 14 Vienna 1984 (I. A. Mel'cuk and A. K. Zholkovsky) ・Dictionaire explicatif et combinatoire du français contemporain. Ⅰ, Ⅱ. Les Presses DEL'UNIVERSIT、, DE MONTR、AL 1984～
評価方法		試験、レポート、発表、学習・研究態度を見て総合的に判定する。
受講者に対する要望など		参加者の調査・研究・発表をもとに演習を進める。積極的参加が望まれる。

年間授業計画	1. コトとコトの参加者 2. 参加者を示す名詞 3. 舞台だてを示す名詞—時・場所・状況を示す名詞（テキスト、1・2・3併せて133—156頁） 4. 助数詞　集合—集合語 5. 集団—集団語　成員—成員語 6. 頭（かしら）—頭目語　真中—中心語（テキスト、4・5・6併せて157—178頁） 7. 同義・類義—同義語・類義語 8. 敬い—敬語　反義—反義語 9. 反転—反転語　総括—総括語 10. 品詞転換—品詞転換語　類型的関連—類型的関連語（テキスト、7・8・9・10併せて179—220頁） 11. コロケーションの研究は何に役立つか。（テキスト、221—234頁） 12. 作文練習 13. ことばとことばは何によって結びつくか。慣用研究の重要性。 14. コロケーションの研究、その目的。なめらかな文章とは。（テキスト、1・2併せて8—30頁） 15. 強め—強調語 16. 讃え—称讃語　正しさ—真正語（テキスト、3・4併せて31—48頁） 17. 動詞化動詞　始まり—開始語　終わり—終止語 18. 完了—完了語　続き—継続語、繰り返し—反復語（テキスト、5・6併せて49—74頁） 19. 充たし—充たし語 20. 生み—生成語（テキスト、7・8併せて76—101頁） 21. 調え—調之語　無化—無化語 22. 悪化—悪化語　攻撃—攻撃語 23. 成果—成果語　発声—鳴き声のオノマトペ（テキスト、9・10・11併せて102—132） 24. 作文練習

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	瀧本孝雄

講義の目標		この共通演習では、カウンセリングと心理テストの基本について学習し、さらにそれらに関連のあるパーソナリティ、人間関係、精神病、神経症などの諸問題について学習する。次にそれらをふまえて、各テーマについて受講者が発表し、相互に討議しあう。 授業の前期では主にカウンセリングについて、後期では心理テストについての概説と各自の発表・討論・実習などが中心となる。
講義概要		基本的には講義日程にそっていくが、日程に書いていない事項について概説したり、発表したりすることもある。 前期では(1) カウンセリングの意義と目的、(2) カウンセリングの理論と方法、(3) パーソナリティ、(4) 人間関係、(5) ロールプレーの実習、(6) エンカウンター・グループの実習などを行う。 後期では、(1) カウンセリングにおける心理テストの意義と目的、(2) 心理テストの種類、(3) 心理テストの実施を通して、心理テストの効用と限界について考察する。
使用教材	テキスト	『カウンセリングと心理テスト』林潔他著　ブレーン出版
	参考文献	『カウンセラーのためのガイダンス』瀧本孝雄他著　ブレーン出版
評価方法		出欠席、発表、レポート提出の３点により総合的に評価する。
受講者に対する要望など		臨床心理士、認定カウンセラーをめざす者、カウンセリングに関心がある者を対象とする。受講者は１年、２年、３年生とする。なお受講者が多い場合は抽選とする。

年間授業計画	1. カウンセラーとしての機能と活動 カウンセラーとは何か、カウンセラーとはどういうことを具体的にやっていくのかを考察する。 2. カウンセラーの世界 教育・医療・産業などの具体的場面でのカウンセラーの仕事の内容について紹介する。 3. インテークの面接 インテーク（受け入れ）面接は、カウンセリングの初回の面接であるが、その意義と留意点について検討する。 4. クライエント中心カウンセリング クライエント（来談者）中心カウンセリングの理解と方法について学習する。 5. 行動カウンセリング カウンセリングにおける行動カウンセリングとは何か、具体的な方法を紹介し、実習する。 6. その他のカウンセリングの理論と方法 精神分析的カウンセリング、論理療法、芸術療法などについてその理論と技法を学習する。 7. パーソナリティについて パーソナリティの定義、構造、形成、診断などの諸問題について検討する。 8. 人間関係について 親子、友人、恋愛などの人間関係における諸問題について検討する。 9. ロールプレーの実習(1) 1対1を中心としたロールプレーの実習を行う。 10. ロールプレーの実習(2) 3者関係を中心としたロールプレーの実習を行う。 11. エンカウンター・グループの実習(1) エンカウンター（出合い）グループを多人数で実習する。 12. エンカウンター・グループの実習(2) エンカウンター・グループを小人数で実習する。 13. カウンセリングにおける心理テストの意義と役割 カウンセリングにとって心理テストを実施することにどのような意義があるかを検討する。 14. カウンセリングにおける心理テストの利用と倫理 心理テストの利用のしかた、心理テスト使用上の倫理的問題について考察する。 15. 心理テスト実施による診断と予測に関する留意点 心理テストによって何がわかり、何を予測することができるかという問題について考えてみる。 16. 心理テスト実施に関する調査結果　心理テストが、実際場面でどのように利用され、どのようなテストがよく使用されているかについて調査結果をもとに考察する。 17. 心理テストの事例 実際に心理テストやった場合、テストの結果と本人の特徴について比較検討してみる。 18. 心理テストの意義と目的 心理テスト使用の意義と目的、さらに心理テストの効用と限界について検討してみる。 19. 心理テスト作成について 心理テスト作成のプロセスを学習し、実際に心理テストを作成してみる。 20. 心理テストの種類と方法 心理テストにはどのような種類があり、またどのような方法によって実施するのかについて概説する。 21. 知能テストについて 知能テストの理論と方法について概説し、知能テストを実施してみる。 22. 職業興味テストについて 職業興味テストの理論と方法について概説し、職業興味テストを実施してみる。 23. 性格テストについて(1) 性格テストの中での質問紙法について概説し、実際に実施してみる。 24. 性格テストについて(2) 性格テストの中での作業検査法、投影法について概説し、実際に実施してみる。

科　目　名	共通演習（94年度以降）	担当者名	中　西　家栄子

講義の目標		英語文を日本語に翻訳する作業を通じ、英語と日本語におけるさまざまな表現方法の相違を捉える。その上で、英語文をより自然な日本語文に置き換えていくためには具体的にどのような操作をすればよいかを学んでもらいたい。最終目標としては、訳文を十分に練り上げていく過程で、日本語での表現力を身につけていくことである。
講義概要		前期は、教師が各項目ごとに典型的な訳例を見せ、注意ポイントを説明する。学習者はそれを理解した上で、短文及び或る程度の長文を翻訳する。学習者は与えられた課題文を必ず自分で実際に訳した上で授業に参加することを原則とする。クラスでは自分の訳例と他の学生の訳例を照らしあわせながら、適訳を考える。後期は、一冊の本をクラス全員が担当ページを受け持ちながら、全訳する。最終日までにはそれを翻訳本としてまとめ、演習の成果としたい。翻訳する本はオリエンテーションの時に知らせる。
使用教材	テキスト	プリント配布。
	参考文献	特にない。但し、辞書類に関しては英英辞典、英和大辞典、（日本語の）類義語辞典、「大辞林」や「国語大辞典」（小学館）等々必携。
評価方法		出席。与えられた課題を果たすこと。
受講者に対する要望など		この授業では自分で訳文を実際に書いていかなければ何の成果も得られない。従って、参加者は最低限翻訳をした上で授業に参加すること。欠席は4回以内とする。

年間授業計画		
	1. オリエンテーション	語順（説明）
	2. 語順	無生物主語の構文（説明） 所有格（説明）
	3. 無生物主語の構文 所有格	人称代婦詞・指示代名詞（説明）
	4. 人称代名詞・指示代名詞	Of＋名詞　（説明）
	5. Of＋名詞	形容詞・副詞　（説明） 比較級・最上級（説明）
	6. 比較級・最上級 形容詞・副詞	自動詞文・他動詞文（説明）
	7. 自動詞文・他動詞文	否定（説明）
	8. 否定	受動態（説明）
	9. 受動態	連体修飾（説明）
	10. 連体修飾	
	11. 連体修飾	仮定法（説明） 話法　（説明）
	12. 仮定法	時制・接続詞
	13. クラスでの訳例	課題発表
	14.	
	15.	
	16.	
	17.	
	18.	
	19.	
	20.	
	21.	
	22.	
	23.	
	24.	

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	古川堅治

講義の目標		本講座は「ギリシア入門」というタイトルで、ギリシアに関する諸々の問題を考えていく。本年度は「歴史と文化」（続）を中心課題として取り上げる。この講座は「ゼミ」なので、大学での「ゼミナール」というものがどのような形で進められるのか、出席者はどのような取り組みをなすべきかなども合わせて、学んでいくことを目ざしている。
講義概要		「ゼミ」の運営の仕方、出席者の各テーマに沿った報告と討論を中心に進めていく。関連するテーマについてのビデオやその他資料を使っての解説がそれに加わる。ゼミ全体の雰囲気をできるかぎりアト・ホームな形で作り上げ、同時に研究成果も残したい。また、今年度は現代ギリシア語にも挑戦することを新規の企画に考えたい。
使用教材	テキスト	特別に使用することはしない。
	参考文献	その都度、指示する。
評価方法		日頃の出席と報告、討論への参加具合を総合的に評価する。
受講者に対する要望など		積極的に取り上げるテーマに関心を抱き、主体的に取り組む姿勢を期待したい。

年間授業計画	1. 「はじめに」：ゼミの内容と運営方法 2. 「ギリシアへの旅」（その１） 3. 「ギリシアへの旅」（その２） 4. 「ギリシアの現代政治」 5. 「ギリシア近代史」 6. 「ギリシアの食文化」 7. 「ギリシアで活躍する日本人」 8. 「ギリシアの農業」（ワインと酒） 9. 「ギリシアの地誌」 10. 「ギリシアの音楽」 11. 「ギリシアの映画」 12. 「前期まとめ」 13. 「ギリシアとバルカン諸国」（その１） 14. 「ギリシアとバルカン諸国」（その２） 15. 「ギリシアと日本―友好条約調印100周年に向けて―」 16. 「古代文明と環境」（その１） 17. 「古代文明と環境」（その２） 18. 「ギリシアの歴史」（古代） 19. 「ギリシアの歴史」（中世） 20. 「ギリシアの生活」（その１） 21. 「ギリシアの生活」（その２） 22. 「ギリシアの生活」（その３） 23. 「ギリシアの生活」（その４） 24. 後期のまとめ」

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	松原　裕

講義の目標		オーストリアのアルペンスキー指導方法を通じて、オーストリアと日本のスポーツ文化を比較し、理解することを目的とする。
講義概要		オーストリアのスキー教師養成コースのうちSCHILEHRER ANWÄRTER KURSEの資料を中心に講義する。 また、オーストリア・チロル州インスブルック周辺のスポーツ文化についても合せて紹介し、理解してもらう。
使用教材	テキスト	Skilehrer-Anwärter Skripten（ドイツ語）
	参考文献	DIE ÖSTERREICHISCHE SKISCHULE その他
評価方法		毎回の出欠席、レポート、発表により評価する。定期試験は実施しない。
受講者に対する要望など		1対1および集団の一員としてコミュニケーションができること。

年間授業計画	1. オリエンテーション　○個人票の作成（写真添付） 2. BEWEGUNGS—/ UNTERRICHTSLEHRE(1) 3. BEWEGUNGS—/ UNTERRICHTSLEHRE(2) 4. BEWEGUNGS—/ UNTERRICHTSLEHRE(3) 5. AUF IN DEN KINDER SKIKURS(1) 6. AUF IN DEN KINDER SKIKURS(2) 7. AUF IN DEN KINDER SKIKURS(3) 8. NATUR-und UMWELTKUNDE(1) 9. NATUR-und UMWELTKUNDE(2) 10. NATUR-und UMWELTKUNDE(3) 11. TOURISMUSKUNDE(1) 12. TOURIDMUSKUNDE(2) 13. BERUFSKUNDE(1) 14. BERUFSKUNDE(2) 15. BERUFSKUNDE(3) 16. ERSTE HILFE(1) 17. ERSTE HILFE(2) 18. ERSTE HILFE(3) 19. SCHNEE-und LAWINENKUNDE(1) 20. SCHNEE-und LAWINENKUNDE(2) 21. SCHNEE-und LAWINENKUNDE(3) 22. Skier's nightmare(1) 23. Skier's nightmare(2) 24. Skier's nightmare(3)

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	松丸壽雄

講義の目標		ものの考え方を、実際に自分自身が「自己」に関わる問題と取り組みながら、身につける。
講義概要		先ずは、担当教員が「自己」とは如何に考えられるかを、時間の許す範囲内で、様々に示す。その後、受講者がそれぞれに、決められた担当日に各自の発表をし、参加者全員でいろいろな面から、該当する事柄を検討討議する。課題は自由に選べる。また、担当教員が必要と判断した場合には、論理の説明もある。演習形式なので、人数制限がある。
使用教材	テキスト	必要があれば、授業中に指示する。
	参考文献	授業中に指示。
評価方法		演習なので、参加者の発表内容と出席状況により評価。
受講者に対する要望など		受講者は発表が義務づけられる。

年間授業計画	1. 演習の概要説明 2. 参加者の発表日の決定。「自己をめぐる諸問題」の講義。 3. 同上 4. 参加者の発表。討議・検討。 5. 同上 6. 同上 7. 同上 8. 同上 9. 同上 10. 同上 11. 同上 12. 前期発表分を全体を見ての討議・検討。 13. 参加者の発表。討議・検討。 14. 同上 15. 同上 16. 同上 17. 同上 18. 同上 19. 同上 20. 同上 21. 同上 22. 同上 23. 同上 24. 前期発表分を全体を見ての討議・検討。

科目名	共通演習（94年度以降）	担当者名	三本　茂

講義の目標		―ルポルタージュを書く― 交通手段やコミュニケーションの方法が多様化し、様々な地域を訪れる機会も多くなった。しかし、せっかく体験した事も他人や外部に伝える方法が身についていなければ、知識として共有される機会が失われてしまう。 この演習では、すぐれたルポルタージュ（現地報告）に触れることを通じてルポルタージュの書き方について基礎的知識と技術を身につけることを目的とする。 文章だけではなく、写真やビデオなどの映像による記録の方法についても実習する。
講義概要		本多勝一著「ルポルタージュの方法」（朝日文庫）を使用し、ルポを書く際に必要な基礎知識を学習する。次いで、彼の書いた「憧憬のヒマラヤ」「カナダエスキモー」などを読み解きながら実際の書き方を体得してゆく。 この他のテキストとして「日本語の作文技術」を絶えず参照する。 以後、各人が短いルポルタージュを書き、お互いに批評し合いながら進めてゆく。カメラを用いた映像によるルポルタージュの方法も試みる。
使用教材	テキスト	本多勝一『ルポルタージュの方法』『日本語の作文技術』他
	参考文献	その都度、文献や記事などを指示、提供する。
評価方法		提出されたルポルタージュと授業への参加の内容により評価する。
受講者に対する要望など		とにかく出席し、行動しなければ演習は進まないので、積極的に参加し発言することを期待している。

年間授業計画	1. 「ルポルタージュの方法」を読む 2. 「ルポルタージュの方法」を読む 3. 「ルポルタージュの方法」を読む 4. 「ルポルタージュの方法」を読む 5. フィールドに出て取材する 6. 幾つかのルポルタージュを読んで批評する 7. 幾つかのルポルタージュを読んで批評する 8. 幾つかのルポルタージュを読んで批評する 9. 幾つかのルポルタージュを読んで批評する 10. ルポルタージュを書いてみる 11. ルポルタージュを書いてみる 12. ルポルタージュを書いて互いに批評する 13. ルポルタージュを書いて互いに批評する 14. 映像による記録の実習 15. 大学祭のルポルタージュを作る 16. 大学祭のルポルタージュを作る 17. 大学祭のルポルタージュを作る 18. 大学祭のルポルタージュを作る 19. 大学祭のルポルタージュを作る 20. 書く、撮る、描く、語る等の方法の違いについて考える 21. 22. 23. 24.